

5 歴史文化の保存・活用の具体方策

5-1 歴史文化の保存・活用の進め方

大津市における歴史文化の保存・活用を効果的に推進するためには、市民をはじめとした各主体による、大津市の歴史文化の価値の認識・共有のもと、市全域における歴史文化の保存・活用の取り組みを着実に推進する「歴史文化の価値の共有化・連携による保存・活用」と、大津市の豊かな歴史文化を戦略的に活用する「歴史文化の魅力発信による保存・活用」を両輪で進めていくことが求められる（図5-1）。

「歴史文化の価値の共有化・連携による保存・活用」については、歴史文化の保存・活用の方針（4-2）に基づく取り組みを市全域において実践していくため、各主体が各々の役割を認識し、自ら積極的に歴史文化の保存・活用に取り組んでいくと同時に、主体間の連携を促していくことや必要となる新たな制度を検討していくことが求められる。そこで、5-2では、「各主体による役割の認識と取り組みの実践」と「主体間の連携に向けた取り組み方策」、「（仮称）大津歴史文化市民遺産制度」の検討を示した上で、これらの取り組みを促進するために「市による具体的な施策（重点実施計画1）」を示す。

「歴史文化の魅力発信による保存・活用」については、歴史文化遺産相互の関係をもとに、大津市の歴史文化の特徴を魅力的な形で再整理して設定する「関連文化財群」を手掛かりにしながら、各主体が歴史文化遺産の保存・活用を推進することで、まとまりのある効果的な取り組みを実現するとともに、特に重点的に歴史文化の保存・活用を推進する区域を設定して重点的な施策展開を行うことにより、歴史文化の保存・活用の拠点を形成し、市全域の取り組みを牽引していくものである。そこで、5-3では、「関連文化財群による歴史文化の戦略的な保存・活用の推進」と「重点的な施策展開の方策」を示した上で、これらの取り組みを促進するために「市による具体的な施策（重点実施計画2）」を示す。

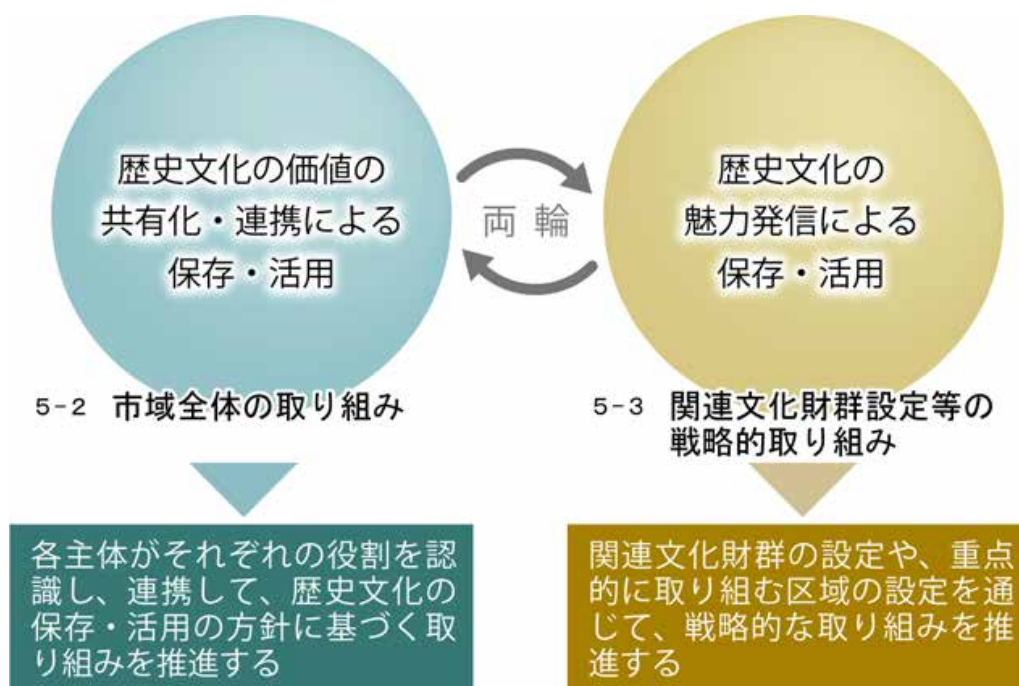


図5-1 歴史文化の保存・活用の進め方

5-2 市域全体の取り組み

(1) 各主体による役割の認識と取り組みの実践

大津市の歴史文化の保存・活用に関わる各主体が、表 5-1 に示す役割を認識し、主体的な取り組みを実践する。

表 5-1 各主体の役割

主 体	役 割
市民等	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりが大津市の歴史文化を育む主体であることを認識し、大津市並びに自らが暮らす地域の歴史文化について学び、文化財の価値を認識し、それらを守り、育み、活かす取り組みを主体的に実施する。 行政や関係機関、専門家等の取り組みに協力するとともに、市民団体等による歴史文化の保存・活用の活動に積極的に参加する。
市民団体	<ul style="list-style-type: none"> 大津市並びに活動対象地域の歴史文化について、継続的に学び、理解を深める。 活動内容についての情報発信や団体間の交流等に積極的に取り組み、活動のより一層の拡充に努める。
行政	<ul style="list-style-type: none"> 大津市の歴史文化の魅力や歴史文化の保存・活用の取り組みについての情報発信を継続的に実施し、市民や市民団体等の意識啓発を図る。 市民や市民団体、関係機関、専門家等との連携のもとに、大津市の歴史文化に関する調査・研究を進め、史実の解明や新たな魅力の発見に努める。 制度の整備や事業の活用、関係部局との連携等を通じて、大津市の歴史文化の価値や魅力の維持並びに向上を図るとともに、市民や市民団体が歴史文化の保存・活用に、自ら積極的に取り組める環境を整備する。 指定文化財等の活用のための施設整備等を進める。
関係機関	<ul style="list-style-type: none"> 各々の管轄する分野を中心に、大津市の歴史文化に関連する調査・研究を継続的に実施するとともに、講座やイベントの開催、情報発信などを通じて、市民や市民団体等の意識啓発を図る。 各機関が相互に連携を図るとともに、行政や専門家等が実施する調査・研究に対して積極的に協力を行うことで、歴史文化の保存・活用に係る各種取り組みの効果を高める。
専門家	<ul style="list-style-type: none"> 大学の研究者や学芸員等の専門家は、相互の情報共有を図りながら、大津市の歴史文化に係る調査・研究を継続的に実施し、その成果を市民等に分かりやすく発信する。 豊富な知識と経験を活かし、市民や活動団体、行政等の取り組みに対する指導や助言、技術的支援を行い、大津市における歴史文化の保存・活用を適切な方向へと導く。
出身者・来訪者等	<ul style="list-style-type: none"> 大津市出身者や来訪者等は、市民や活動団体、行政などが実施する取り組みや施策の趣旨を理解し、積極的に参加・協力するとともに、市民との交流や市外からの情報発信などを通じて、大津市の歴史文化の魅力を広く伝える。
文化財所有者 ※寺社・市民 行政等	<ul style="list-style-type: none"> 所有する文化財が、大津市の歴史文化を伝え、その魅力を創り出す貴重な財産であることを認識し、必要に応じて、行政や専門家等の助言を受けながら、適切な保存・継承を図る。 可能な範囲で文化財等を公開し、大津市の歴史文化の魅力の発信や観光等への活用を図る。

(2) 主体間の連携に向けた取り組み方策

大津市が運営するウェブサイト等を用いて、歴史文化に関する情報の投稿・収集や意見交換の場（プラットフォーム）を設置し、緩やかな連携体制を築く（図5-2）。このようなプラットフォームを継続して運営し、本構想の周知状況や歴史文化の保存・活用に対する意識の醸成に応じて、市民・市民団体の代表や専門家、関係機関、行政を中心に、大津市における歴史文化の保存・活用に対する具体的な施策の方向性や内容の検討等も含めた意見交換を行う協議会等の組織づくりを検討していく。なお、この組織づくりにあたっては、大津市文化財専門委員会や大津市歴史的風致維持向上計画の法定協議会、庁内横断組織などの関連する組織と連携・調整を図りながら、より効果的な設置方法を検討する。

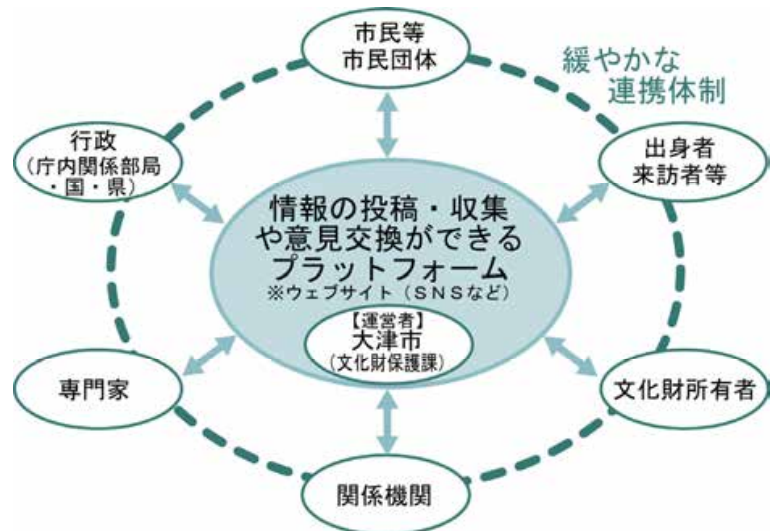


図5-2 緩やかな連携体制の構築

(3) 「(仮称) 大津歴史文化市民遺産制度」の検討

大津市では、数多くの歴史文化遺産が、文化財の指定等を受けて保護されている。しかし、それにも増して多くの歴史文化遺産が大切に受け継がれており、これらが大津市の歴史文化の魅力を底上げすると同時に、各地域における歴史文化の豊かな生活環境をつくり出している。従って、これらの指定等を受けていない歴史文化遺産を的確に将来世代へと受け継いでいくための新たな制度のひとつとして、「(仮称) 大津歴史文化市民遺産制度」を創設・運用していくことを検討する。

「(仮称) 大津歴史文化市民遺産制度」の具体的な内容や仕組みについては、今後継続して検討を進めるが、図5-3に示すように、市民等による主体的・自立的な取り組みを支援し、歴史文化の保存・活用の活動を持続的に展開するための制度としていくことを想定する。

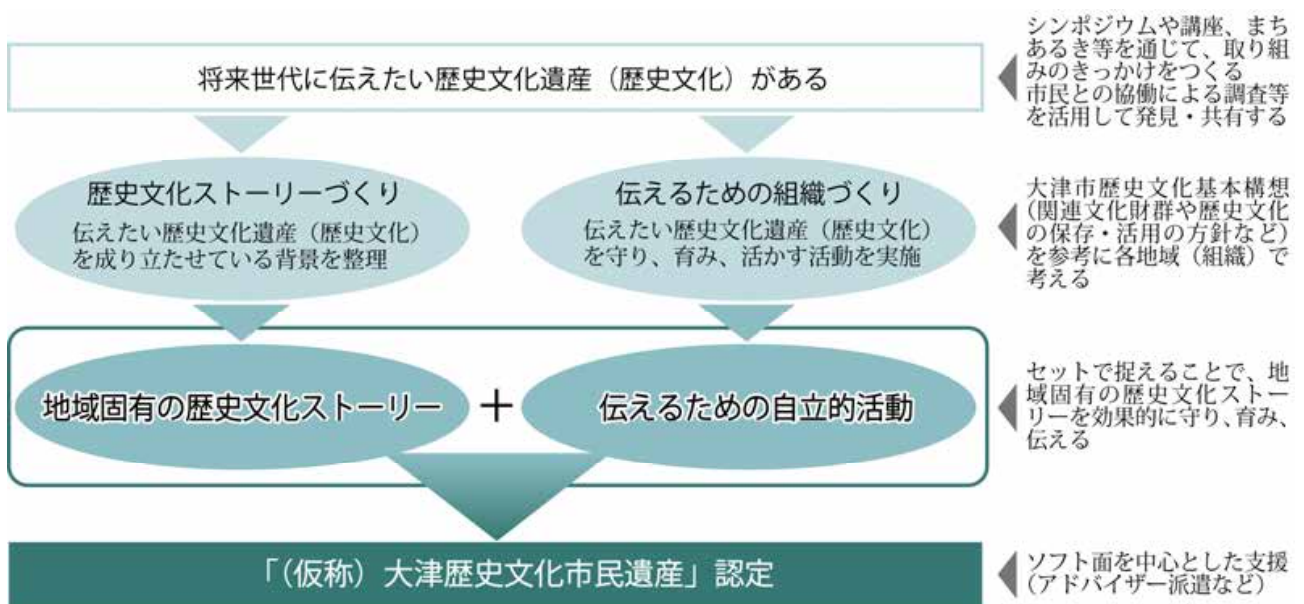


図5-3 「(仮称) 大津歴史文化市民遺産制度」のイメージ

(4) 市による具体的な施策（重点実施計画1）

市全域における歴史文化の保存・活用の着実な推進のために、大津市が今後10年程度で優先的に実施する具体的な施策の内容は表5-2のとおりとする。

表5-2 大津市による具体的な施策（重点的実施計画1）

対応する方針番号※	具体的な施策の内容
1-②	・市内一円における石造物の把握調査の実施
1-②	・関連部局と連携した歴史文化遺産の把握
1-⑤ 3-③	・「(仮称)大津歴史文化市民遺産制度」の検討
2-① 3-②	・市や歴史博物館、観光協会のホームページ、パンフレット等の歴史文化情報や観光情報の充実・多言語化の推進
2-①	・SNSや市民団体ホームページ、個人ホームページとのリンクなど、多様な情報発信ツールの活用を検討
2-②	・大津市における歴史文化の活用拠点としての歴史博物館・埋蔵文化財調査センターの充実
2-②	・小中学校生徒等を対象とした副読本の作成や出前授業の実施などの歴史文化教育の推進
2-③	・大津市景観計画との連携・調整による、主要な歴史文化遺産周辺や主要動線における景観形成の重点化
2-④ 3-②	・市民との協働による調査や歴史ウォーキング、体験教室など多様な活用イベントの実施
2-⑤	・関連文化財群を踏まえた副読本の作成や学校教育の教材として歴史文化遺産の活用や学習機会の充実
3-①	・市民との協働による地域の歴史文化遺産調査
3-②	・広報などによる継続的な歴史文化情報の発信
3-②	・歴史講座や歴史文化の保存・活用についてのシンポジウムの継続的な開催
3-③	・市民や市民団体等による歴史文化の保存・活用の取り組みへの支援の拡充
3-③	・歴史文化遺産の保存・活用の取り組みに関する相談窓口の設置
3-④	・各主体が大津市の歴史文化の保存・活用について、自由に意見交換できるプラットフォームの設置
3-⑤	・本構想を踏まえた「文化財保存活用地域計画」の策定の推進

※方針番号は、「4-2 歴史文化の保存・活用の方針」と対応しており、内容は下記のとおりである。

- 1-②：これまで把握できていなかった歴史文化遺産の調査を実施する
- 1-⑤：指定等を受けていない歴史文化遺産の文化財指定等の推進や新たな保存制度を検討する
- 2-①：大津市の歴史文化に関する情報のアクセシビリティを高め、多様な魅力を全世界に発信する
- 2-②：個々の歴史文化遺産の魅力を高め、さまざまな人々がその魅力を体感できる環境を整える
- 2-③：歴史文化遺産周辺との一体的な景観づくりを行う
- 2-④：関連文化財群を通じた、多様な魅力を感じられる着地型の観光振興を図る
- 2-⑤：歴史文化が持つ多面的な機能を活かし、良好な居住環境づくりを図る
- 3-①：さまざまな主体が連携し、歴史文化遺産の調査・研究体制を整備する
- 3-②：歴史文化に対する興味・関心を高め、保存・活用の技術や知識を身に付ける機会を提供する
- 3-③：各地域の身近な歴史文化遺産を継承するための体制・制度を整える
- 3-④：歴史文化の保存・活用に関する各主体の連携体制を整える
- 3-⑤：構想を具体化・実現化するための計画を策定し、計画的な取り組みを推進する

5-3 関連文化財群設定等の戦略的取り組み

(1) 関連文化財群による歴史文化の戦略的な保存・活用の推進

ア 関連文化財群の設定の考え方

「歴史文化基本構想」策定技術指針（平成24年2月、文化庁文化財部）では、「関連文化財群」を次のように定義している。

関連文化財群とは、有形・無形、指定・未指定にかかわらず様々な文化財を歴史的・地域的関連性に基づき一定のまとまりとして捉えたもの

つまり、関連する歴史文化遺産をストーリー立てて結びつけ、一体的・総合的に捉えることにより、歴史文化の保存・活用を戦略的かつ効果的に推進するためのまとまりといえる。

この定義を踏まえ、大津市の関連文化財群は、次の2点を目的として設定する。

【大津市における関連文化財群の設定目的】

- 目的① 大津市の歴史文化の特徴を分かりやすく再整理し、多くの人々が理解・共有し、協働による保存・活用を推進するための手掛かりとする
- 目的② 大津市における歴史文化の保存・活用を、個別の地域・地区を超えた横断的な視点から、戦略的かつ効果的に推進するためのツールとする

これらの設定目的を踏まえ、大津市の関連文化財の設定方針を次の4点に設定する。

【大津市における関連文化財群の設定方針】

- 方針① 大津市の歴史文化の特徴を踏まえた関連文化財群とする
- 方針② 大津市の歴史文化遺産の価値を理解できる関連文化財群とする
- 方針③ 大津市の歴史文化遺産の魅力に磨きをかけられる関連文化財群とする
- 方針④ 全国的に著名な歴史文化遺産を中心に設定することで、全国さらには世界に発信できる関連文化財群とする

なお、方針④に示すように、大津市の関連文化財群は、指定等文化財などの著名な歴史文化遺産を中心に設定して、その魅力を整理して、発信していくが、ここであげる歴史文化遺産以外にも、関連文化財群を構成する歴史文化遺産は各地域に数多くある。これらについては、今後、各地域において、市民や市民団体等が中心となって、大津市の関連文化財群を手掛かりに価値づけて、その魅力を育む取り組みを展開していくことが求められる。

イ 大津市の関連文化財群

大津市の歴史文化の6つの特徴（3－4参照）を「歴史文化のテーマ」とし、そのもとに合計15の関連文化財群を図5-4のとおり設定する。

大津市の歴史文化の特徴 (歴史文化のテーマ)	大津市の関連文化財群
I. 遺跡が語る歴史文化	1. 原始・古代の暮らし 2. 渡来人の足跡 3. 大津宮と近江国府
II. 信仰が生み出した 歴史文化	4. 鎮護国家と仏教文化 5. 浄土信仰の展開 6. 祭礼文化と庶民信仰
III. 琵琶湖と暮らしをめぐる 歴史文化	7. 水運とともに歩む町 8. 水城と町の繁栄 9. 琵琶湖の暮らしと生業
IV. 道でつながる歴史文化	10. 東海道と大津宿 11. 北国との交流の道 12. 山越の道と参詣の道
V. 自然とともにつくる 歴史文化	13. 水と技 14. 里山の暮らしと生業
VI. 文学につづられる 歴史文化	15. 歌と物語

図5-4 大津市の関連文化財群

次頁以降、関連文化財群のつながりをつくり出ししているストーリー（以下、「歴史文化ストーリー」という）の概要及び内容、関連文化財群を構成する主な歴史文化遺産の一覧と分布により、それぞれの関連文化財群を解説する。

■ 関連文化財群解説シートの構成

関連文化財群解説シートは、1つの関連文化財群につき4頁で構成する。

1頁目に該当する歴史文化のテーマ（3-4参照）及び関連文化財群の名称、「歴史文化ストーリーの概要」と「構成する主な歴史文化遺産の一覧」、2頁目に「構成する主な歴史文化遺産の分布」、3～4頁目に「歴史文化ストーリー」を掲載する。

該当する歴史文化のテーマ

関連文化財群の名称

歴史文化ストーリーの概要

3～4頁目に示す歴史文化ストーリーを分かりやすく簡潔に示す。

構成する主な歴史文化遺産の一覧

当該関連文化財群を構成する歴史文化遺産のうち、指定等文化財を中心とした主な歴史文化遺産を示す。
（国）は国指定文化財、（県）は県指定文化財、（市）は市指定文化財、（登録）は国登録文化財をそれぞれ示している。なお、この他にも各地域には関連する歴史文化遺産は数多く見られる。

構成する主な歴史文化遺産の分布

1頁目に示す「構成する主な歴史文化遺産」の所在地を示す。

歴史文化ストーリー

当該関連文化財群を構成する歴史文化遺産の相互の関係をストーリー一立てて示す。

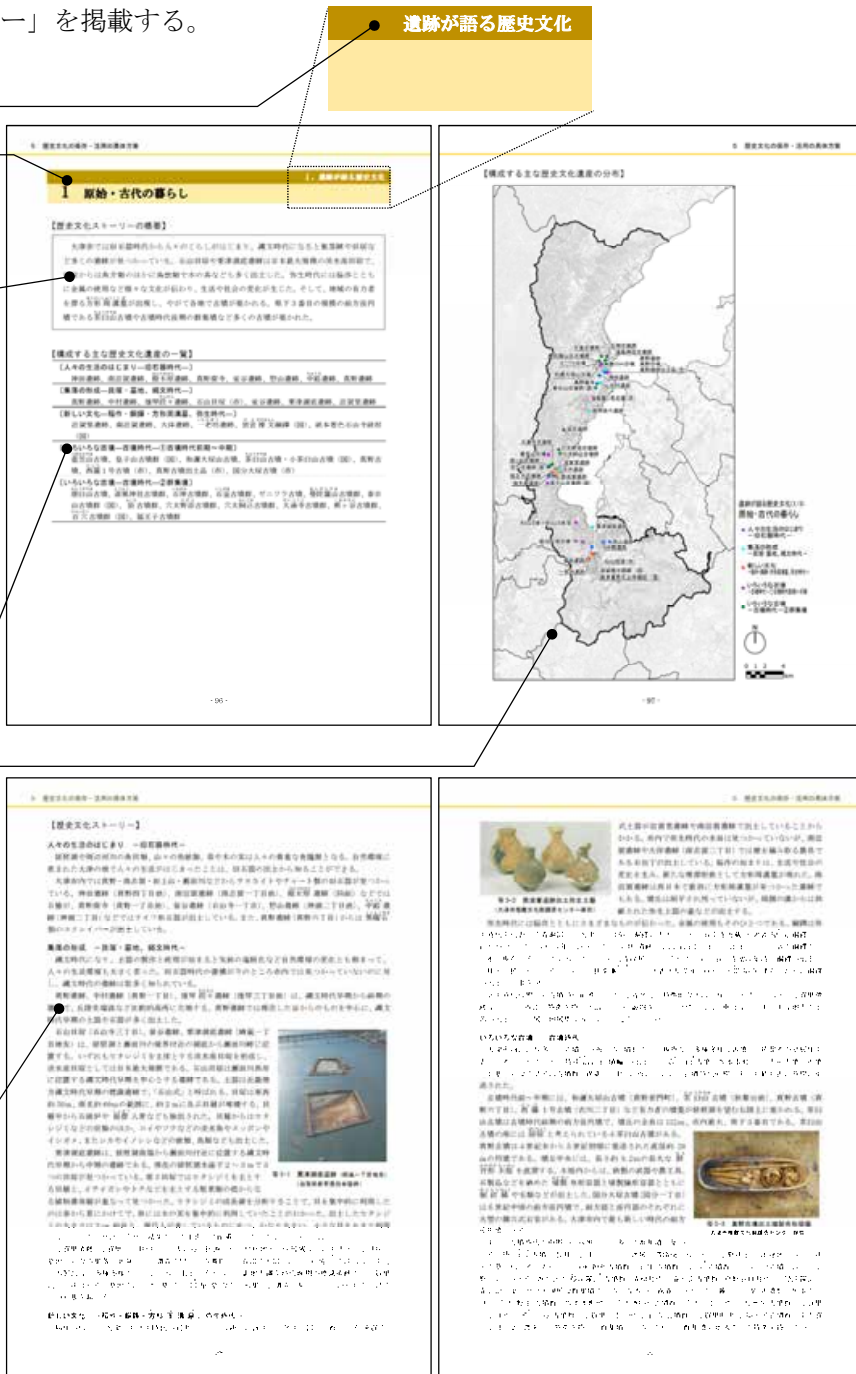


図 5-5 関連文化財群解説シートの構成

1 原始・古代の暮らし

【歴史文化ストーリーの概要】

大津市では旧石器時代から人々のくらしがはじまり、縄文時代になると集落跡や貝塚など多くの遺跡が見つかっている。石山貝塚や栗津湖底遺跡は日本最大規模の淡水産貝塚で、貝塚からは魚介類のほかに鳥獣類や木の実なども多く出土した。弥生時代には稲作とともに金属の使用など様々な文化が伝わり、生活や社会の変化が生じた。そして、地域の有力者を葬る方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}が出現し、やがて各地で古墳が築かれる。県下3番目の規模の前方後円墳である茶臼山古墳^{ちやうすやま}や古墳時代後期の群集墳など多くの古墳が築かれた。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔人々の生活のはじまり—旧石器時代—〕

神田遺跡、南滋賀遺跡、榎木原遺跡^{えんぎはら}、真野廃寺、蛭谷遺跡、惣山遺跡^{ちゅうろ}、中路遺跡、真野遺跡

〔集落の形成—貝塚・墓地、縄文時代—〕

真野遺跡、中村遺跡、雄琴段々遺跡^{たんだん}、石山貝塚（市）、蛭谷遺跡、栗津湖底遺跡、滋賀里遺跡

〔新しい文化—稲作・銅鐸・方形周溝墓、弥生時代—〕

滋賀里遺跡、南滋賀遺跡、大伴遺跡、一老坊遺跡^{いちろうぼう}、袈裟襷文銅鐸^{けさだすきもん}（国）、紙本著色石山寺縁起（国）

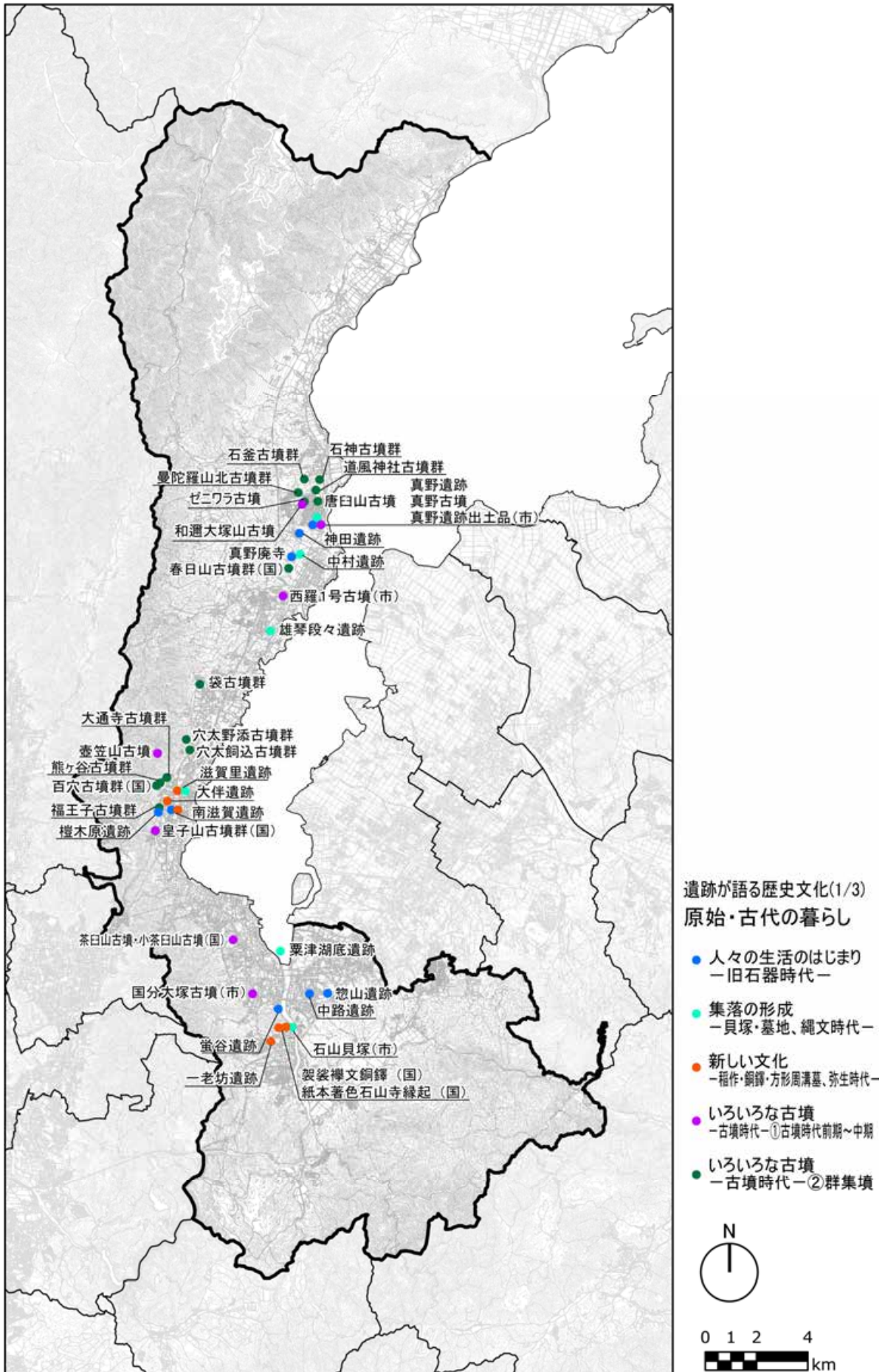
〔いろいろな古墳—古墳時代—①古墳時代前期～中期〕

壺笠山古墳^{つぼかさやま}、皇子山古墳群（国）、和邇大塚山古墳、茶臼山古墳・小茶臼山古墳（国）、真野古墳、西羅1号古墳（市）、真野古墳出土品（市）、国分大塚古墳（市）

〔いろいろな古墳—古墳時代—②群集墳〕

唐臼山古墳^{からうすやま}、道風神社古墳群^{どうふう}、石神古墳群^{いわがみ}、石釜古墳群^{いしがま}、ゼニワラ古墳、曼陀羅山古墳群^{まんだらやま}、春日山古墳群（国）、袋古墳群^{ふくろ}、穴太野添古墳群^{のぞえ}、穴太飼込古墳群^{かいごめ}、大通寺古墳群^{だいつうじ}、熊ヶ谷古墳群^{くまがたに}、百穴古墳群^{ひゃっけつ}（国）、福王子古墳群

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

人々の生活のはじまり —旧石器時代—

琵琶湖や周辺河川の魚介類、山々の鳥獣類、草や木の実らは人々の貴重な食糧源となる。自然環境に恵まれた大津の地で人々の生活がはじまったことは、旧石器の出土から知ることができる。

大津市内では真野・南志賀・田上山・瀬田川などからサヌカイトやチャート製の旧石器が見つまっている。神田遺跡（真野四丁目他）、南滋賀遺跡（南志賀一丁目他）、^{はんのきはら}檀木原遺跡（同前）などでは石槍が、真野廃寺（真野一丁目他）、^{ちゅうろ}蛭谷遺跡（石山寺一丁目）、惣山遺跡（神領二丁目他）、中路遺跡（神領二丁目）などではナイフ形石器が出土している。また、真野遺跡（真野六丁目）からは黒曜石製のスクレイパーが出土している。

集落の形成 —貝塚・墓地、縄文時代—

縄文時代になり、土器の製作と使用が始まると気候の温暖化など自然環境の変化とも相まって、人々の生活環境も大きく変った。旧石器時代の遺構が今のところ市内では見つかっていないのに対し、縄文時代の遺跡は数多く知られている。

真野遺跡、中村遺跡（真野一丁目）、^{だんだん}雄琴段々遺跡（雄琴三丁目他）は、縄文時代早期から前期の遺跡で、丘陵先端部など比較的高所に立地する。真野遺跡では埋没した谷からのものを中心に、縄文時代早期の土器や石器が多く出土した。

石山貝塚（石山寺三丁目）、蛭谷遺跡、栗津湖底遺跡（晴嵐一丁目地先）は、琵琶湖と瀬田川の境界付近の湖底から瀬田川畔に位置する。いずれもセタシジミを主体とする淡水産貝塚を形成し、淡水産貝塚としては日本最大規模である。石山貝塚は瀬田川西岸に位置する縄文時代早期を中心とする遺跡である。土器は近畿地方縄文時代早期の標式遺跡で、「石山式」と呼ばれる。貝塚は東西約 50m、南北約 60mの範囲に、約 2 mに及ぶ貝層が堆積する。貝層中から石組炉や^{くつそう}屈葬人骨なども検出された。貝層からはセタシジミなどの貝類のほか、コイやフナなどの淡水魚やスッポンやイシガメ、またシカやイノシシなどの獣類、鳥類なども出土した。



写 5-1 粟津湖底遺跡
（晴嵐一丁目地先）
（滋賀県教育委員会提供）

栗津湖底遺跡は、琵琶湖南端から瀬田川付近に位置する縄文時代早期から中期の遺跡である。現在の琵琶湖水面下 2～3 mで3つの貝塚が見つまっている。第3貝塚ではセタシジミを主とする貝層と、イチイガシやトチなどを主とする堅果類の殻からなる植物遺体層が重なって見つかった。セタシジミの成長線を分析することで、貝を集中的に利用したのは春から夏にかけてで、秋には木の実を集中的に利用していたことがわかった。出土したセタシジミの大きさは3 cm 前後と、現代人が食しているものに比べ、かなり大きい。小さな貝をあまり利用しなかったとすれば、それは結果として生態系に配慮したことになっていると言える。

滋賀里遺跡（滋賀里一丁目他）では浅い谷に区画された扇状地上に住居域などの生活区と小貝塚、墓地からなる集落が展開した。調査で出土する遺物には石器や土器のほか骨角器や漆器などを含む木製品など多種多様なものがある。出土する土器は近畿地方縄文時代晩期の標式遺跡で「滋賀里式」と呼ばれる。墓地では土坑墓や土器棺墓などが密集し、調査で見つまっているものだけでも 100 基を超える。

新しい文化 —稲作・銅鐸・^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓、弥生時代—

新しい文化 —稲作・銅鐸・^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓、弥生時代—

稲作が伝わり、大津にも弥生時代が到来したことは新たに誕生した弥生土器の一群である^{おんががわ}遠賀川



写 5-2 南滋賀遺跡出土弥生土器
(大津市埋蔵文化財調査センター保管)

式土器が滋賀里遺跡や南滋賀遺跡で出土していることからわかる。市内で弥生時代の水田は見つかっていないが、南滋賀遺跡や大伴遺跡(南志賀二丁目)では穂を摘み取る農具である石包丁が出土している。稲作の始まりは、生活や社会の変化を生み、新たな埋葬形態として方形周溝墓が現れた。南滋賀遺跡は西日本で最初に方形周溝墓が見つかった遺跡でもある。墳丘は削平され残っていないが、周囲の溝からは供献された弥生土器の壺などが出土する。

弥生時代には稲作とともにさまざまなものが伝わった。金属の使用もそのひとつである。銅鐸は弥生時代を代表する青銅器で、大津市には3個の銅鐸の出土がある。石山寺所蔵の袈裟襷文銅鐸は、総高90.9cmで、文化3年(1806)に一老坊遺跡(石山寺四丁目他)で出土した。3個の銅鐸のうち唯一現存するものである。また、『石山寺縁起』にはそれより前に石山寺増改築時に銅鐸が出土した様子が描かれている。さらに『扶桑略記』は、天智天皇7年(668)の崇福寺建立のおりに銅鐸が出土した事を記す。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、各地方に特徴的な土器が作られるようになる。滋賀里遺跡などでは、近江の特徴を持つ土器のほか、畿内をはじめ北陸、山陰、東海などさまざまな地方の土器が出土し、広域の地域間交流があったことがわかる。

いろいろな古墳 ー古墳時代ー

大津市内には数多くの古墳が分布する。墳丘の形や規模など多種多様な古墳は、被葬者の階層性を表すと考えられている。特殊器台形埴輪が出土した壺笠山古墳(坂本本町)、前方後円墳と円墳の2基からなる皇子山古墳群(錦織一丁目)は近江において古墳時代前期の中でも最も古い時期に築造された。

古墳時代前～中期には、和邇大塚山古墳(真野普門町)、茶臼山古墳(秋葉台他)、真野古墳(真野六丁目)、西羅1号古墳(衣川二丁目)など有力者の墳墓が琵琶湖を望む丘陵上に築かれる。茶臼山古墳は古墳時代前期の前方後円墳で、墳丘の全長は122m、市内最大、県下3番目である。茶臼山古墳の南には陪塚と考えられている小茶臼山古墳がある。真野古墳は4世紀末から5世紀初頭に築造された直径約20mの円墳である。墳丘中央には、長さ約8.2mの長大な割竹形木棺を直葬する。木棺内からは、鉄製の武器や農具、石製品などを納めた埴製舟形容器と埴製桶形容器とともに振紋鏡や玉類などが出土した。国分大塚古墳(国分一丁目)は6世紀中頃の前方後円墳で、前方部と後円部のそれぞれに大型の横穴式石室がある。大津市内で最も新しい時代の前方後円墳である。



写 5-3 真野古墳出土埴製舟形容器
(大津市埋蔵文化財調査センター保管)

また、古墳時代の中期から後期には、多くの群集墳が築かれる。唐臼山古墳(水明一丁目)は、この地域が遣隋使で知られた小野妹子の出身地とされ、妹子の墓と伝える。周辺には道風神社古墳群、石神古墳群、石釜古墳群、ゼニワラ古墳(以上、小野)などがある。西北部の曼陀羅山古墳群(清和町他)、春日山古墳群(真野谷口町他)は曼陀羅山、春日山に築かれた大規模な群集墳である。坂本から錦織にかけての山麓には、袋古墳群(坂本六丁目)、穴太野添古墳群(坂本本町他)、穴太飼込古墳群(穴太二丁目他)、大通寺古墳群(滋賀里二丁目他)、熊ヶ谷古墳群(滋賀里一丁目他)、百穴古墳群(滋賀里町甲)、福王子古墳群(南志賀二丁目)など渡来系の特徴を持った群集墳がある。これらの群集墳も地域ごとの特徴を持っている。

2 渡来人の足跡

【歴史文化ストーリーの概要】

古墳時代後期、市内の特に坂本から錦織にかけての地域には渡来人の痕跡が色濃く残る。穴太遺跡や滋賀里遺跡などで見つかる^{おおつかべ}大壁建物、オンドルといった生活文化、穴太野添古墳群^{のぞえ}や大通寺古墳群などの古墳群で見つかるドーム形の天井を持つ横穴式石室、ミニチュア炊飯具に代表される副葬など、墓制や葬送儀礼に関わるものなどである。これらは大陸の先進技術、文化とともに入ってきたものであり、この先進技術や文化は後の大津宮遷都の基礎のひとつとなるものである。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔渡来人の集落〕

穴太遺跡、滋賀里遺跡、南滋賀遺跡、オンドル状遺構、^{たいこづか}太鼓塚遺跡、^{なかはただ}中畑田遺跡、^{かみたかきご}上高砂遺跡、大谷南遺跡

〔墓制と葬送儀礼 ①渡来系の古墳〕

袋古墳群、穴太野添古墳群、穴太飼込古墳群、^{だいつうじ}大通寺古墳群、^{くまがたに}熊ヶ谷古墳群、^{ひやつけつ}百穴古墳群（国）、福王子古墳群、日吉古墳群、^{まくずはら}真葛原古墳群、大谷古墳群、大谷南古墳群、小山古墳群

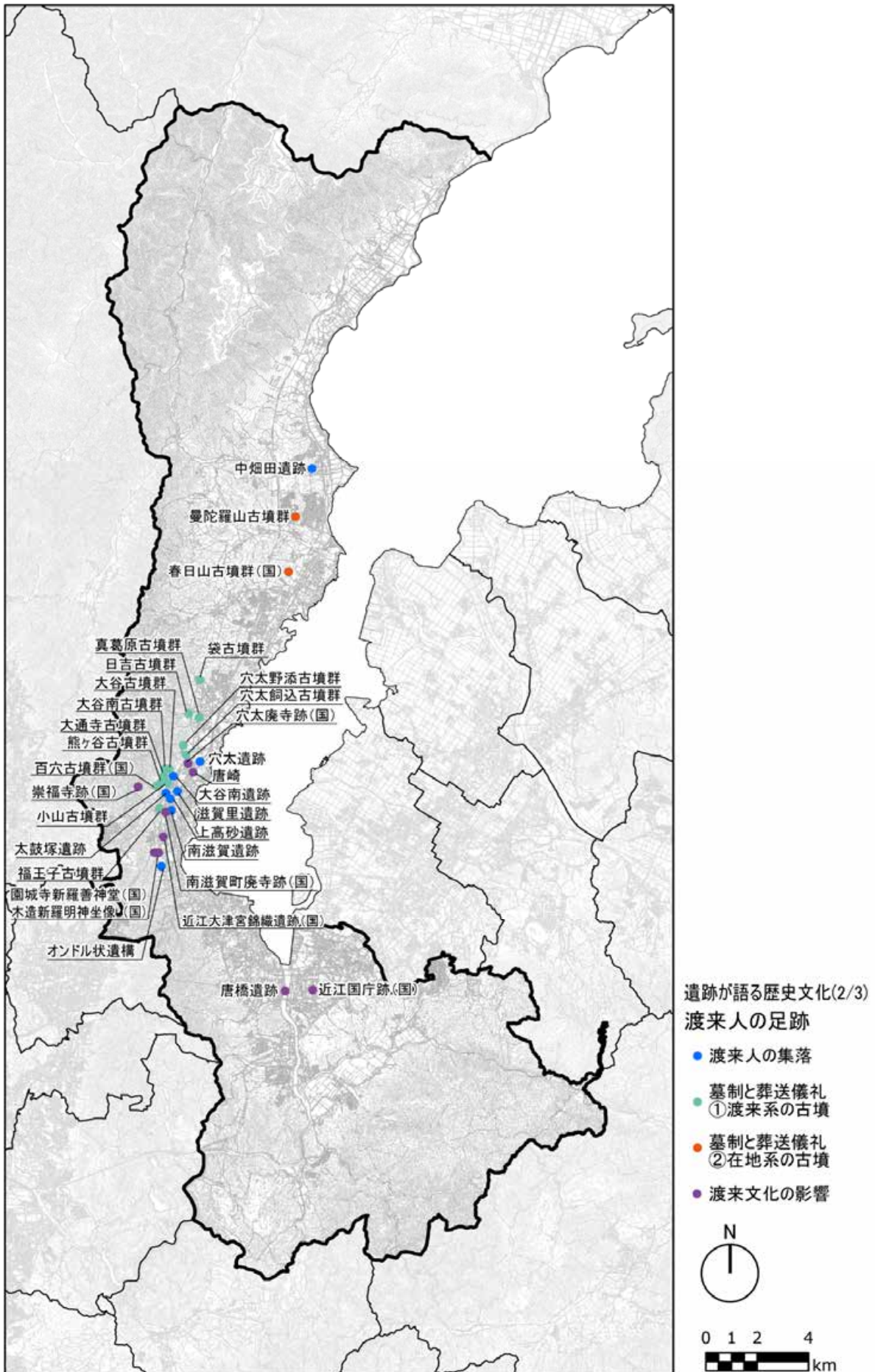
〔墓制と葬送儀礼 ②在地系の古墳〕

春日山古墳群（国）、^{まんだらやま}曼陀羅山古墳群

〔渡来文化の影響〕

近江大津宮錦織遺跡（国）、唐橋遺跡、穴太廃寺跡（国）、^{すうふくじ}崇福寺跡（国）、南滋賀町廃寺跡（国）、近江国庁跡（国）、木造新羅明神坐像^{しんらみょうじん}（国）、園城寺新羅善神堂（国）、唐崎

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

渡来人の集落

渡来人とは、その名のとおり他の国から渡ってきた人々のことである。特に、古墳時代には朝鮮半島や中国から、先進技術や様々な文化とともに渡来してきた人々のことが、『日本書紀』をはじめとする文献に記述されている。近江は大和、河内とならんで渡来人の住んだ地域で、彼らの痕跡がさまざまな形で現在まで残っているが、大津市内では、坂本から錦織にかけての地域を中心に、発掘調査によって渡来人にかかわる遺跡や遺物が確認されている。

現在、大津市内で見つかっている渡来人の集落とみられている遺跡は穴太遺跡（穴太一丁目他）、滋賀里遺跡（滋賀里一丁目他）、南滋賀遺跡（南志賀三丁目他）などが挙げられる。これらの遺跡では、大壁建物や、オンドル状遺構など特殊な遺構が確認されている。大壁建物は、古墳時代後期以前よりみられた竪穴建物や掘立柱建物とは異なる建物である。大壁とは柱材が見えない壁の構造のことである。方形に溝を掘り、その中に細い柱を立てそれに木舞とよばれる横木をわたす。これを芯材とし壁土を貼り付けて壁をつくり、この壁に屋根を乗せて建物としている。つまり柱を持たない建物である。この大壁建物は現在全国で 100 例ほどが確認されているが、その 5 割以上が大津市内の上記 3 遺跡などで見つかっている。



写 5-4 大壁建物復元模型
(財団法人滋賀県文化財保護協会提供)

このほか穴太遺跡では大壁建物とあわせて、礎石建物が確認されている。礎石建物は、飛鳥時代に仏教建築とともに導入されたもので、穴太遺跡のものは先行する時期のものである。やはり先進技術として導入されたものであろう。また同じく穴太遺跡では、石組のオンドル（特殊カマド）と見られる遺構が確認されている。オンドルとは朝鮮半島を中心に現在でも使用されている床暖房の施設である。穴太遺跡で検出された石組のものは、全国的にも非常に貴重であることから、調査後、大津市歴史博物館の敷地内に移設展示されている。



写 5-5 穴太遺跡出土のオンドル状遺構

このように、集落に伴う遺構は多数確認されている一方、生活に使用していた道具、特に一般的によく確認される土器類の出土が少ない。そのような中でわずかに出土している土器類についてみておきたい。まず、「鳥足文」とよばれる特殊なタタキメを持つ、韓式系土器が太鼓塚遺跡（滋賀里一丁目他）で、陶質土器が中畑田遺跡（和邇中）で出土している。また、同じく太鼓塚遺跡と春日山古墳群（真野谷口町他）では、徳利形平底壺と呼ばれる特殊な形の須恵器の壺が出土している。特に平底壺は朝鮮半島の百済にルーツを持つものと考えられており、県内でも 10 数例しか出土していない。大和や河内など渡来人の居住が想定されている地域では、このような土器類などの生活用具が多数出土している。渡来人の生活に関わる遺物の出土が少ないことが、未発見なのか、本市の特徴であるのか、今後の継続した調査、研究が必要である。

墓制と葬送儀礼

集落の広がる穴太遺跡や滋賀里遺跡、南滋賀遺跡の西、比叡山東麓には、多くの古墳が見られる。直径 10m 程度の円墳が密集しているところから、古墳群や群集墳などといわれる。袋古墳群（坂本

六丁目)、穴太野添古墳群(坂本本町他)、穴太飼込古墳群(穴太二丁目他)、大通寺古墳群(滋賀里二丁目他)、百穴古墳群(滋賀里町甲)、熊ヶ谷古墳群(滋賀里一丁目他)、福王寺古墳群(南志賀二丁目)などである。これら坂本から錦織までのすべてを数えると、1,000を超す数の古墳があるともいわれる。これらの古墳は大部分が、平面形が正方形で、天井は持ち送りによるドーム形の横穴式石室を主体部に持つ。このような石室は、大津市内でもこの地域にほぼ限られ、滋賀県内や周辺をみても類例が少ない。朝鮮半島の百濟などの石室形態との類似が指摘され、渡来人の石室と考えられている。石室内では土師質のミニチュア炊飯具のセット(カマド・カマ・ナベ・コシキ)や、金銅製や銀製のカンザシ、クシロといった副葬品が特徴的である。また、石室内から木棺を留めた鉄釘や鍔が出土している。

一方、堅田・真野地域の春日山古墳群(真野谷口町他)や曼陀羅山古墳群(清和町他)では、石室の平面形は長方形で、天井は3石程度からなる平天井、副葬品には、鉄刀や鉄鏃などの武器類や馬具などが見られる。これらの特徴は、畿内をはじめとした周辺の状況と類似しており、在地の豪族のものであると考えられている。坂本から錦織の集落や古墳で見られる渡来人の人々と、堅田・真野地域をはじめとする市内の他の地域で見られる在地系の人々が地域を分けて住み分けていた様子が考えられる。ただし、春日山古墳群では一部にドーム型の石室や徳利形平底壺が出土しており、両者の間で交流が行われていた様子も窺える。

渡来文化の影響

このような古墳時代後期を中心とする大津市内の渡来文化は、後の時代にも影響を与えている。天智天皇6年(667)に遷都された大津宮は、これまで述べた渡来文化がベースのひとつとされている。さらに、古代三大橋のひとつに数えられる勢多橋(他は宇治橋と山崎橋)は、発掘調査によって7世紀の橋脚台の遺構が確認されている。この構造は朝鮮半島、慶州の「月精橋」との類似が指摘されており、これも渡来人による技術であろう。さらに大津宮に関連する寺院である穴太廃寺跡(穴太一丁目)、崇福寺跡(滋賀里町甲)、南滋賀町廃寺跡(南志賀一丁目他)では瓦積基壇とよばれる建物の基壇外装が確認されているが、この基壇外装も渡来人に関わるものと考えられている。8世紀頃の造営と考えられる近江国庁跡(大江三丁目他)でも瓦積基壇が採用されており、本地域の渡来人の影響を窺うことができる。

また渡来人は、仏教の興隆にも深く関わった。延暦寺を開いた最澄は、滋賀郡古市郷(石山付近)の生まれで、後漢の孝献帝の子孫と伝える三津首氏の出身であり、石山寺の開基で東大寺初代別当となった良弁は、滋賀郡に住んだ百濟氏の出身であった。天台別院として園城寺を再興する円珍は、入唐からの帰国の途上に船中で新羅明神を感得し、園城寺の鎮守神として祀ったという。新羅明神は、朝鮮半島の新羅に係る神であり、木造新羅明神坐像と像を安置する新羅善神堂は、国宝の指定を受けている。また、近江八景のひとつに数えられる「唐崎夜雨」の唐崎は、古くは「韓崎」の字があてられていた。「唐」「韓」は中国や海外から渡来したものに添えられる漢字であり、渡来系の地名が定着したといえる。



写 5-6 百穴古墳群(滋賀里町甲)



写 5-7 太鼓塚古墳出土ミニチュア炊飯具(大津市埋蔵文化財調査センター保管)

3 大津宮と近江国府

【歴史文化ストーリーの概要】

天智天皇6年(667)、中大兄皇子(天智天皇)は中臣鎌足(藤原鎌足)の協力を得て、激動する東アジア情勢の中、都を飛鳥から近江大津宮に移した。近江令の制定、庚午年籍の作成、漏刻の設置、仏教文化の開花、生産遺跡の開始など、たった5年間の宮であったが、その果たした役割は大きい。また、奈良時代には、鎌足の曾孫である藤原仲麻呂が絶大な権力のもと、瀬田川の西岸に保良宮を造営し、瀬田には丘陵の薨群とも呼ばれる近江国府が開かれた。近江国庁では全国初の発掘調査がなされ、多くの成果を生み出している。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔近江大津宮と古代寺院・生産遺跡 ①大津宮〕

近江大津宮錦織遺跡(国)、大友皇子の伝承(大友桜、法伝寺、石坐神社、葬り塚、将軍塚、功臣塚)

志賀宮址碑：錦織二丁目の京阪バス停留所の横に建つ。明治28年(1895)11月の年記を持つが、明治30年大津町長など有志の建立という。大津町は旧跡顕彰のための調査を進め、この地を「宮址」と推定した。当時、大津宮の所在地は不明であったが、約80年後にその推測が正しかったことが証明された。

近江神宮：昭和15年(1940)、天智天皇を祭神として創建。当時の建築技術の粋を凝らした本殿以下40棟の建物が登録文化財となっている。また、国宝の崇福寺塔心礎納置品をはじめとする大津宮関係寺院の遺物も、近江神宮の所蔵となっている。

〔近江大津宮と古代寺院・生産遺跡 ②大津宮を取り巻く寺院〕

南滋賀町廃寺跡(国)、崇福寺跡(国)、崇福寺塔心礎納置品(国)、穴太廃寺跡(国) 園城寺前身寺院跡、大津廃寺、衣川廃寺跡(国)、

大津宮関係遺跡出土品(市)：大津宮関連史跡の崇福寺跡、南滋賀町廃寺跡の出土品。古瓦、泥塔、瓦器、塑像、埴仏などからなる。

〔近江大津宮と古代寺院・生産遺跡 ③生産遺跡の展開〕

瀬田丘陵生産遺跡群〔山ノ神遺跡、源内峠遺跡〕(国)、鷗尾 滋賀県山ノ神四号窯出土(国)、石山国分遺跡(森瓦窯)出土瓦(市)

榎木原瓦窯：南滋賀町廃寺で使用されている瓦を焼いた窯跡。西大津バイパス建設工事にもなう発掘調査で、全貌が明らかとなった。

〔近江国府の位置〕

若松神社、野神社旧跡、建部大社、管池遺跡

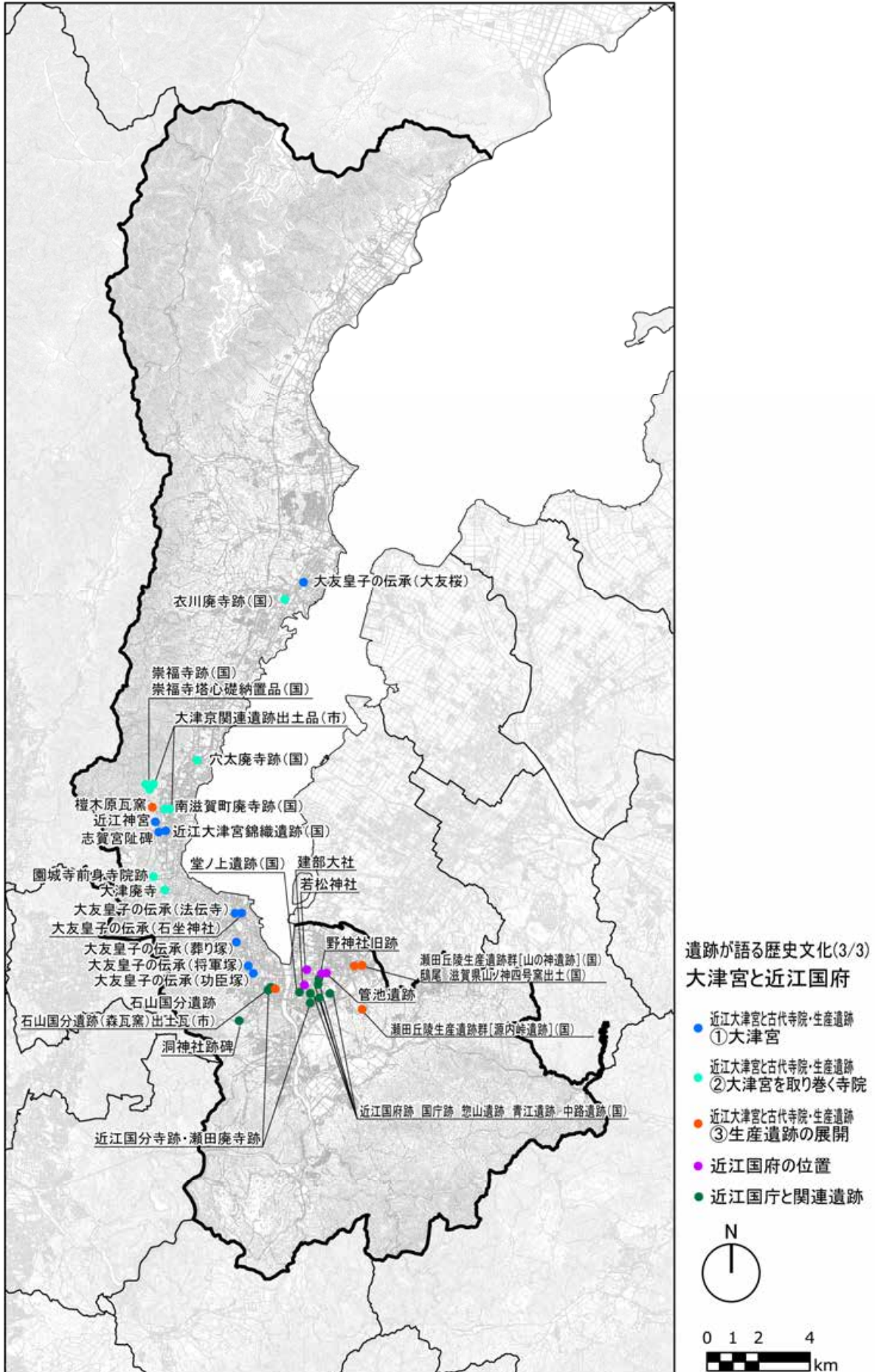
〔近江国庁と関連遺跡〕

近江国府跡 国庁跡 惣山遺跡 青江遺跡 中路遺跡(国)、堂ノ上遺跡(国)、石山国分遺跡、洞神社跡碑

近江国分寺跡・瀬田廃寺跡：古代の国府近郊には、国ごとに国分寺と国分尼寺が建立された。

近江国分寺の所在地は幾度かの変遷をたどるが、晴嵐小学校(光が丘町)の校内には国昌寺の旧跡として昭和11年(1936)の「史蹟近江国分寺跡の碑」が建ち、野郷原一丁目の瀬田廃寺も国分寺跡といわれている。

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

国家存亡の危機

660年朝鮮半島では、百済が唐・新羅連合軍によって亡ぼされた。百済復興のため、661年、斉明天皇は朝鮮半島へ向かうが、途中、筑紫の朝倉宮で亡くなってしまふ。その後、663年倭国（日本）は朝鮮半島の白村江で大敗を喫し百済も完全に滅亡した。

唐・新羅連合軍の追撃を恐れた倭国は、664年に対馬・壱岐・筑紫に防人・烽火を配置し、筑紫に水城を築き防御を固め、さらに、百済の人々の力を借りて九州及び瀬戸内海沿岸に山城を築いた。そのような中、天智天皇6年（667）多くの人々の反対を押し切り、中大兄皇子（天智天皇）は中臣鎌足（藤原鎌足）らの協力を得て、都を飛鳥から近江に遷した。また、この年、河内と大和の境に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城を築き、万全の体制を整えた。

近江大津宮と古代寺院・生産遺跡

遷都の翌年、中大兄皇子は即位し天智天皇となった。『日本書紀』によると、大津宮内の建物には「内裏」「濱台」「大蔵」「宮門」「殿」「大殿」「漏剋台」「西小殿」「内裏仏殿」「内裏西殿」「大蔵省第三倉」「大炊」などがあったことが記されている。

その所在地については、昭和49年（1974）、滋賀県教育委員会の錦織地区での発掘調査によって、巨大な掘立柱の門と、それに取り付く回廊、北に延びる塀などが確認され、解明の糸口が開かれた。以後、点的な調査ではあるが、四面庇の掘立柱建物や庇付建物、倉庫などが確認され、現在の県道を宮の中心軸として、大津宮の復元が行われている。しかしながら、その全容はまだ地中にあり、今後の調査に期待がかかる。



写5-8 南滋賀町廃寺跡出土
方形蓮華紋軒先瓦（近江神宮蔵）

大津宮以前、坂本から錦織にかけての地域には、渡来人たちが集住していた。彼らは7世紀には仏教の広まりと共に氏寺を建立することとなる。建物には共通して瓦積基壇を採用している。南滋賀町廃寺（南志賀一丁目他）は、大津宮の北にあり、奈良県の川原寺と同じ伽藍配置である。当初の軒先瓦には、単弁八弁蓮華紋軒丸瓦のほかにも全国唯一の方形蓮華紋軒先瓦が使用された。また平瓦も特殊な方形である。大津宮の時代には、一本づくりの複弁八弁蓮華紋軒丸瓦が採用された。滋賀里山中には、天智天皇7年（668）に崇福寺（滋賀里町甲）が建立された。北尾根に弥勒堂（講堂）、中尾根の西に金堂、東に塔、南尾根に金堂と講堂が、3つの尾根上に建つ。建物

中心線の違いから、北・中尾根が崇福寺、南尾根は平安時代の梵刹寺と考えられる。中尾根の地下式の塔心礎からは金・銀・銅・ガラスの小瓶が入子となった舍利容器や無文銀銭・鉄鏡・鈴などの荘厳具が見つまっている。穴太廃寺（穴太二丁目）は同一地点で方位を変えて建て替えられた寺院で、先の寺院は周辺地割に沿っていたが、7世紀後半の大津宮遷都によって、建物方位を正南北にした。このほか、園城寺前身寺院（園城寺町）や大津廃寺（中央三丁目他）など多くの寺院が建立され、仏教文化が花開く。

瀬田丘陵では、7世紀中頃に山ノ神遺跡（一里山三丁目）で須恵器が生産されるようになり、7世紀後半、大津宮遷都によりその生産を拡大した。ここでは、鴟尾も焼かれた。源内峠遺跡（瀬田南大萱町）では鉄鉱石を原料とする製鉄が開始されるようになる。以降8世紀に到るまで、おそらく国家が関与した大規模な生産活動が展開していく。



写5-9 山ノ神遺跡出土鴟尾
（大津市蔵）

近江国府の位置

奈良時代には律令制を推し進めるため各国に国府を置き、中央から国司が派遣された。近江にも近江国府が開かれ藤原鎌足の孫武智麻呂や、曾孫仲麻呂など藤原氏の有力者が国司となっている。

近江国府は、地理学者米倉二郎によって、瀬田地域にその範囲が推定された。約1km四方の近江国府推定地では、109m間隔の正南北、正東西の道路により碁盤の目状に区画される。

いつの時代にこのような区画ができたのかは不明であるが、近江国庁（大江三丁目他）の建てられた奈良時代である可能性が高い。推定範囲の四至には北西に若松神社（大江二丁目）、北東に野上神社（大江四丁目）、南西に近江一ノ宮の建部大社（神領一丁目）、南東に山ノ神の祠（現在、所在地不明）が置かれ、南西角では高橋川を改修して直角に曲げ、丘陵を切り通して北上させ、南辺、西辺を川で囲うようにする。この推定地内にある管池遺跡（大江五丁目）からは7世紀中ごろの土器と一緒に木簡が出土しており、国府成立以前の状況も明らかになりつつある。また、国府域内の別の地点では、奈良・平安時代の瓦葺の建物や墨書土器も出土している。国府域内に多くの人々が暮らしていたことは間違いないであろう。また、斎王群行の際には、京を出て最初の宿泊所となっていた。



写5-10 近江国府（大江三丁目他）

近江国庁と関連遺跡

国府域の南中央に、南北3町、東西2町（1町は約109m）の範囲で近江国庁が存在する。昭和38年（1963）からの発掘調査により、全国で初めて国庁の実態が明らかになった。多くの奈良・平安時代の遺物と共に見つかった敷地は、築地塀で囲まれ3区画から構成される。中央の区画には中心となる建物があり、東西棟の前殿、後殿、その両側に南北に長い脇殿が取り付く。すべての建物は、瓦積基壇で瓦葺である。西の区画の実態は不明であるが、東の区画には、木製外装基壇という特殊な基壇を持つ瓦葺建物。その北、塀で遮断された区画に厨房と考えられる掘立柱建物などがある。平城宮・平安宮あるいは福岡県の大宰府・宮城県の大賀城政庁などの構造と類似しており、律令国家を推し進める地域の一大拠点であることがわかる。

国庁に伴う官衙群は、国府域ではなく、谷を挟んだ南の丘陵上に、官道を中心として計画的に配置されていることがわかってきた。西から瀬田地域に入るには古代勢多橋を渡らなければならない。現在の瀬田唐橋の南80mに古代勢多橋の橋脚台が発見されたことにより、官道である東山道、東海道が近江国庁の南を目指して真東に伸びていたことが推定され、勢多駅と考えられる堂ノ上遺跡（神領三丁目）や謎の官衙遺跡である中路遺跡（神領二丁目）などで道路側溝が確認されている。



写5-11 近江国庁跡出土飛雲紋鬼瓦（滋賀県蔵）

青江遺跡（神領二丁目）は国司館でないかと推定され、遺跡内には大規模な鍛冶工房跡も見つかっている。最も東の惣山遺跡（神領二丁目他）は、全長300mにわたって12棟の瓦葺総柱礎石建物が建ち並んでおり、国庁に伴う大倉庫群であったと考えられる。これらの遺跡の瓦葺建物には、軒先瓦に国庁と同様、飛雲紋があらわれており、一連の大計画の基に建設されたことがわかる。

また、瀬田川の西岸では、当時最高権力を握った仲麻呂により、保良宮の建設が進められ、淳仁天皇、孝謙（称徳）天皇、道鏡らにより『続日本紀』に語られる歴史が繰り広げられた。

4 鎮護国家と仏教文化

【歴史文化ストーリーの概要】

延暦寺・園城寺（三井寺）・石山寺は、日本を代表する古刹であり、国家を護る寺として皇室はじめ貴族・武家からの崇敬を受け、中世には膨大な荘園を有した。日本仏教史に大きな足跡を残し、多くの高僧を輩出してきたこれらの古刹は、市内所在の国指定文化財の半数以上を所有している。これらの寺院は、周辺地域の歴史にも大きな影響を与え、延暦寺の鎮守としてともに繁栄した日吉社（現、日吉大社）と門前町坂本や大津をはじめとして、市内各所には関連の歴史文化遺産が数多く残されている。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔鎮護国家の寺—延暦寺—〕

延暦寺（世界遺産）、延暦寺根本中堂（国）、延暦寺根本中堂廻廊（国）、延暦寺転法輪堂（国）、延暦寺戒壇院（国）、延暦寺瑠璃堂（国）、延暦寺相輪櫓（国）、延暦寺常行堂及び法華堂（国）、延暦寺大講堂（旧東照宮本地堂）（国）、延暦寺文殊楼・山王社・浄土院伝教大師御廟・浄土院唐門・浄土院拝殿・阿弥陀堂鐘楼・西塔鐘楼・四季講堂・元三大師御廟拝殿・横川鐘楼・慈眼堂（国）、横川中堂、延暦寺境内（国）、東南寺、安養院、西教寺、聖衆来迎寺、浮御堂、慈眼庵、木造地藏菩薩立像（地藏堂安置）（真迎寺・国）、木造薬師如来坐像（薬師堂安置）（専念寺・国）、木造千手観音立像（観音堂安置）（東光寺・国）、木造阿弥陀如来坐像（華開寺・市）、木造虚空蔵菩薩立像（華開寺・市）、木造仏像（寺伝聖観音立像）（慈眼庵・国）

〔日吉社と坂本〕

日吉大社西本宮本殿及び拝殿（国）、日吉大社東本宮本殿及び拝殿（国）、日吉大社撰社宇佐宮本殿及び拝殿（国）、日吉大社撰社樹下神社本殿及び拝殿（国）、日吉大社撰社白山姫神社本殿及び拝殿（国）、日吉大社撰社牛尾神社本殿及び拝殿（国）、日吉大社撰社三宮神社本殿及び拝殿（国）、日吉大社西本宮楼門（国）、日吉大社日吉三橋（国）、日吉大社東本宮楼門（国）、日吉大社鳥居（山王鳥居）（県）、日吉大社撰社大物忌神社本殿（市）、大津市坂本伝統的建造物群保存地区（国）、日吉山王金銅装神輿（国）、日吉神社境内（国）、延暦寺坂本里坊庭園（国）

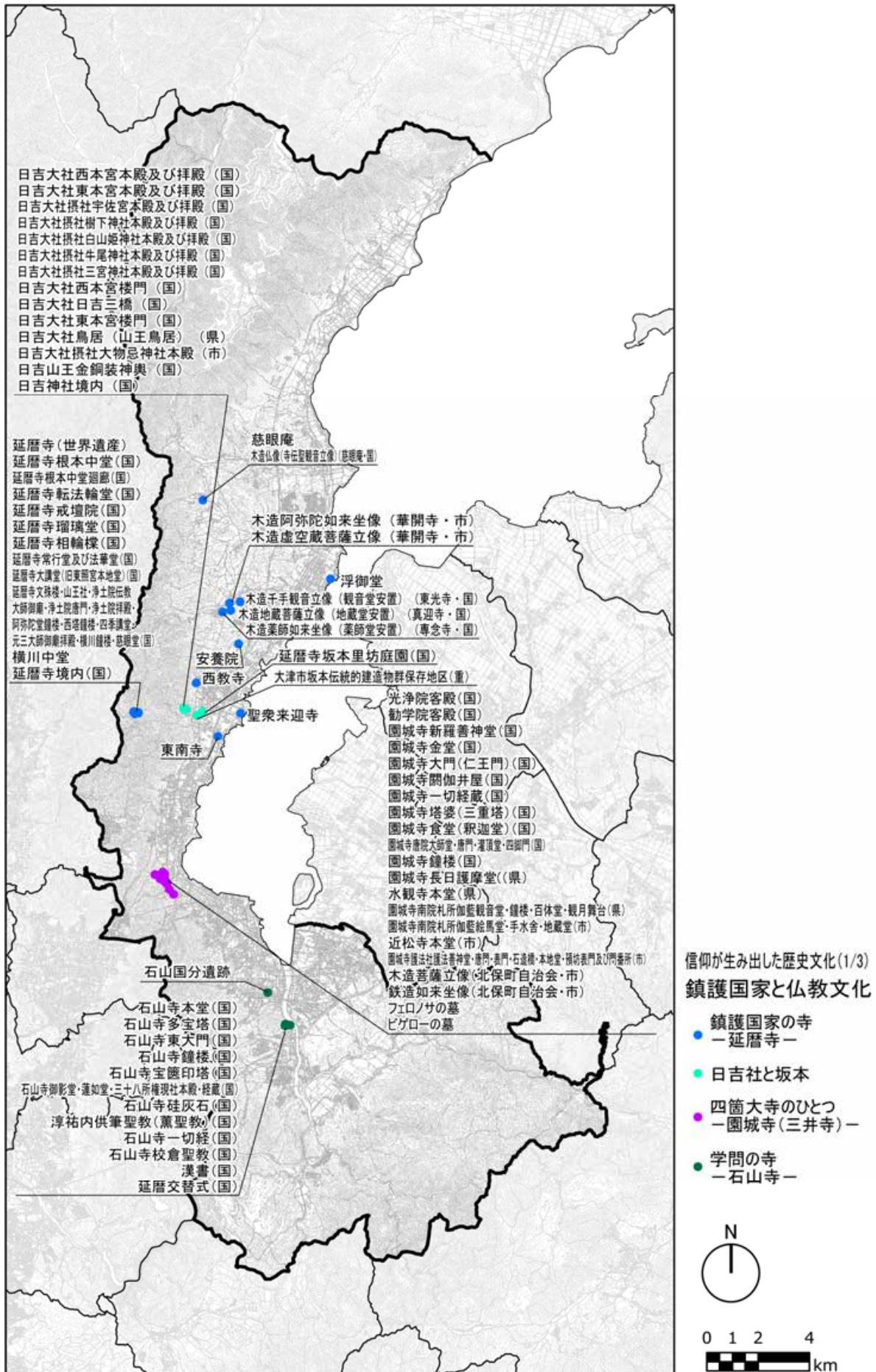
〔四箇大寺のひとつ—園城寺（三井寺）—〕

光浄院客殿（国）、勸学院客殿（国）、園城寺新羅善神堂（国）、園城寺金堂（国）、園城寺大門（仁王門）（国）、園城寺閼伽井屋（国）、園城寺一切経蔵（国）、園城寺塔婆（三重塔）（国）、園城寺食堂（釈迦堂）（国）、園城寺唐院大師堂・唐門・灌頂堂・四脚門（国）、園城寺鐘楼（国）、園城寺長日護摩堂（県）、水観寺本堂（県）、園城寺南院札所伽藍観音堂・鐘楼・百体堂・観月舞台（県）、園城寺南院札所伽藍絵馬堂・手水舎・地藏堂（市）、近松寺本堂（市）、園城寺護法社護法善神堂・唐門・表門・石造橋・本地堂・預坊表門及び門番所（市）、木造菩薩立像（北保町自治会・市）、鉄造如来坐像（北保町自治会・市）、フェノロサの墓、ビゲローの墓

〔学問の寺—石山寺—〕

石山寺本堂（国）、石山寺多宝塔（国）、石山寺東大門（国）、石山寺鐘楼（国）、石山寺宝篋印塔（国）、石山寺御影堂・蓮如堂・三十八所権現社本殿・経蔵（国）、石山寺硅灰石（国）、淳祐内供筆聖教（薫聖教）（国）、石山寺一切経（国）、石山寺校倉聖教（国）、漢書（国）、延暦交替式（国）、石山国分遺跡

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

鎮護国家の寺 — 延暦寺 —

平安時代、最澄によって開かれた延暦寺は、平安京の鬼門を護り、国家の安泰を祈る寺として、皇室や貴族たちの崇敬をうけた。最澄は、延暦4年(785)東大寺で受戒して近江国分寺に入ったが、間もなく比叡山中に籠もり、仏道修行にはげむ。延暦7年、薬師如来を安置する小堂を建立し、延暦寺が創建される。その後、桓武天皇の庇護を得て、遣唐使に随行して唐に渡り、帰国後の延暦25年に年分度者2名を認められ、天台宗が成立する。しかし、嵯峨天皇により僧侶の資格を得るための戒壇の設立が勅許されたのは、最澄没後7日目のことであった。

天台宗の基礎を築いた3代座主の円仁も唐に留学して密教を学び、多くの典籍を日本に伝えた。また、最澄の時代に誕生していた東塔・西塔に加え、新たに横川を開き三塔の体制が確立する。次いで、5代座主となる円珍も入唐し、天台密教の充実と延暦寺の隆盛につとめ、天台別院として園城寺を再興した。18代座主良源は、衰退していた横川を復興し、撰関家との関係を強め、堂舎の再建や維持、法会を営むための荘園が多数寄進された。その結果、総本堂にあたる東塔の根本中堂、西塔の釈迦堂、横川的首楞厳院(横川中堂)を中心に、三塔十六谷と呼ばれる延暦寺の寺域体制が整えられた。延暦寺は平成6年(1994)、「古都京都の文化財(京都市・宇治市・大津市)」として世界遺産に登録された。

修行の場であった山上に対し、山麓には民衆と延暦寺を結ぶゆかりの寺院が点在していた。東南寺(下阪本三丁目)は、人々に法華経の功德を説く戸津説法で有名である。千野には、良源が母を住ませたとされる安養院(千野二丁目)があり、源信は念仏をひろめるため西教寺(坂本五丁目)や聖衆来迎寺(比叡辻二丁目)を、湖水の亡者を慰めるため浮御堂(本堅田一丁目)を建立したと伝わる。仰木には、最澄が開いたとされる高日山星林院跡があり、そこから移されたとされる尊像が地域の人々によって今も護られている。伊香立の慈眼庵の仏像も、横川飯室谷より移されたと伝わる。このように山麓には、延暦寺との深いつながりを示す伝承や尊像が今も伝えられている。

日吉社と坂本

最澄が修行に入った比叡山は、山の神が祀られていた「神山」であった。この神こそ、日吉社の祭神のひとつである大山咋神で、東本宮に祀られている。大津宮遷都によって大和から勧請された三輪明神が西本宮に祀られ、日吉社は延暦寺の鎮守、天台宗の護法神となり、延暦寺の発展とともに、繁栄していった。平安時代末期、延暦寺の僧兵が朝廷に強訴する時に日吉社の神輿を奉じているのも、神仏習合による両者の密接な関係を示している。

延暦寺は日本仏教の母山と呼ばれるように、仏道修行の場であったが、山上の寺院を支えていたのは、東西の坂本をはじめとした山麓のまちである。坂本には室町時代には土倉と呼ばれる金融業者や、問丸と呼ばれる問屋も見られた。物資流通ルートとして、琵琶湖水運が利用され、下阪本(浜坂本)から京都へ陸路運搬する馬借・車借の活動拠点でもあった。中世、目覚ましい発展を遂げた坂本であったが、織田信長の山門焼き討ちにより焼かれ、そ



写 5-12 延暦寺釈迦堂



写 5-13 大津市坂本重要伝統的建造物群保存地区

の後日吉社とともに復興するものの、かつての繁栄を取り戻すことはなかった。それでも、里坊のひろがる町並みは「石積みのある門前町」と親しまれ、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

四箇大寺のひとつ ー園城寺（三井寺）ー

延暦寺の発展に尽力した円仁と円珍の弟子達はそれぞれ門徒集団を形成し、延暦寺の二大派閥となって天台教団をけん引する。しかし、円仁門徒の良源が延暦寺を中興して大きな勢力となって以後、両派閥は主導権をめぐり激しく対立し、正暦4年（993）円珍門徒が山を下り、園城寺に移る。以後天台教団は山門派（延暦寺）と寺門派（園城寺）に分裂する。



写 5-14 園城寺唐院大師堂（園城寺提供）

円珍門徒が入った園城寺は、天智天皇の天津宮遷都にあたり大友皇子が邸宅を構えた場所で、壬申の乱の後に大友与多王によって創建されたと言われている。以後、大友氏の氏寺となっていたが、大友氏の請いによって円珍が別当となって再興し、貞観8年（855）に天台別院となった。園城寺に移った円珍門徒にとっての悲願は、独自の戒壇を設立することであった。しかし山門はそれを許さず、両者はしばしば対立、抗争し、伽藍は焼失したが、園城寺はそのたびに復興し、東大寺、興福寺、延暦寺とならんで「四箇大寺」として、国家の祈祷所となった。

園城寺は長等山全体を寺域とし、秘仏弥勒菩薩を本尊とする金堂を中心に、北院・中院・南院の3地区に分かれ多くの堂舎が建立されている。皇室や貴族・武家の崇敬を受け、中でも源氏の信仰は厚く、足利尊氏は、園城寺の整備に大きな貢献をしている。豊臣秀吉による闕所では存亡の危機を迎えるが、その後復興し伽藍の整備が進められた。園城寺は、仏道修行の寺で修験道の本山派の拠点でもあったが、一方で、観音堂（正法寺）が西国三十三所観音巡礼の札所になるなど庶民との接点も兼ね備えていた。園城寺の門前は大津西浦とも呼ばれ、園城寺ゆかりの尊像が現在も地域の人々によって護られている。なお、園城寺北院の法明院は、明治初期に古美術の保護を指導し、日本美術を海外に紹介したフェノロサと友人のビゲローが葬られていることでも知られる。

学問の寺 ー石山寺ー

石山寺の創建の経緯は明らかではないが、聖武天皇の命により良弁が東大寺大仏の鍍金用の黄金を得るため、金峯山の蔵王権現の夢告により石山の地に聖徳太子の念持仏を祀ったところ、陸奥国から黄金が見つかった。そのため、この地に草庵を営んだのが石山寺のはじまりと伝え、東大寺の創建にかかわった良弁を開基とするのもこの由来による。天平宝字3年（759）から藤原仲麻呂によって保良宮造営が着手されると、石山寺は保良宮の鎮護の寺として整備が進められた。

平安時代になると本尊如意輪観音の靈験を求め、皇族はじめ貴族の参詣が頻繁に行なわれ、信仰を集めた。紫式部がこの寺で『源氏物語』を執筆したとの伝承が生まれ、本堂には源氏の間が現在も残る。石山寺への信仰は、やがて庶民にもひろがり、西国三十三所観音巡礼の札所のひとつとなる。石山寺は、戦乱により大きな被害をうけることがなく、県内最古の木造建築である本堂や源頼朝の寄進になる多宝塔を始めとする貴重な文化財を伝えているが、真言教学の拠点として膨大な經典や聖教を伝える学問の寺でもあった。菅原道真の孫にあたる3代座主淳祐の自筆の聖教（薫聖教）をはじめとして、奈良時代から鎌倉時代の「一切教」、平安時代の「校倉聖教」、聖教の紙背に残された漢籍や奈良時代の公文書などがあり、歴代の座主によって現在まで大切に守り伝えられている。

5 浄土信仰の展開

【歴史文化ストーリーの概要】

平安時代、延暦寺横川の僧源信が著した『往生要集』は、日本の浄土思想に大きな影響を与え続けてきた。この世界観を絵画化した国宝「六道絵」は聖衆来迎寺の所蔵で、浄土思想を顕在化した貴重な文化財である。この系譜から法然や親鸞を生み、15世紀にその教線は広がる。大津市にもその流れで真宗教団が伸張し、蓮如にまつわる数々の伝説も生まれていく。応仁の乱では京都からの疎開先として大津市が注目され、庶民の生活に根ざした文化はこのころ醸成され、今に至っている。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔延暦寺と浄土信仰〕

延暦寺常行堂及び法華堂（国）、往生要集（延暦寺・県）、絹本著色六道絵（聖衆来迎寺・国）、「御所之山」（上仰木遺跡）、源満仲祠跡碑、上仰木遺跡出土品（市）、西教寺、聖衆来迎寺開山堂（国）、絹本著色恵心僧都像（聖衆来迎寺・県）、絹本著色眞盛上人像（西教寺・県）
来迎図：新知恩院、西教寺、弘法寺、安楽律院に国・県指定の来迎図が伝えられている。

〔蓮如と大津〕

本福寺、「堅田源兵衛の首」伝承（光徳寺、等正寺）、安養寺と身代わり名号石の伝承、犬塚の櫓（市）、堅田本福寺中世記録（市）

〔諸宗の進出と京都からの疎開 ①新たに創建・転宗した寺院〕

満月寺、青龍寺、法蔵寺、正福寺

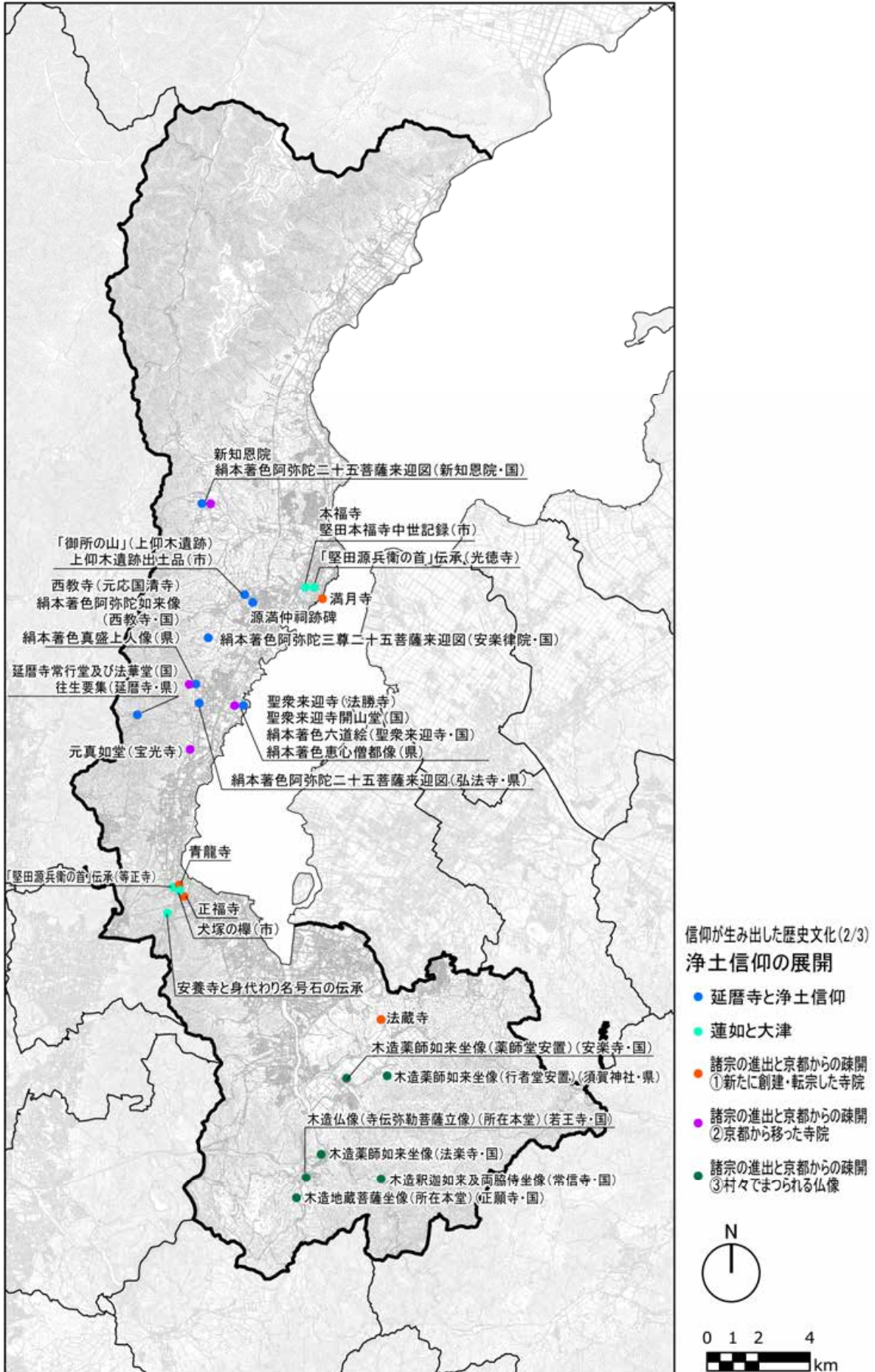
〔諸宗の進出と京都からの疎開 ②京都から移った寺院〕

新知恩院、元真如堂（宝光寺）、聖衆来迎寺（法勝寺）、西教寺（元応国清寺）

〔諸宗の進出と京都からの疎開 ③村々でまつられる仏像〕

木造地藏菩薩坐像（所在本堂）（正願寺・国）、木造仏像（寺伝弥勒菩薩立像）（所在本堂）（若王寺・国）、木造薬師如来坐像（法楽寺・国）、木造釈迦如来及両脇侍坐像（常信寺・国）、木造薬師如来坐像（行者堂安置）（須賀神社・県）、木造薬師如来坐像（薬師堂安置）（安楽寺・国）

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

延暦寺と浄土信仰

死後に仏・菩薩の国土への往生を説く浄土信仰は、延暦寺の円仁が中国の五台山で引声念仏を学び、延暦寺に常行三昧堂を建てたことから本格的に展開した。やがて横川の源信が『往生要集』を寛和元年（985）に著し、以後の浄土思想に大きな影響を与え続ける。源信は阿弥陀仏の極楽浄土に生まれることを勧め、そのためには念仏が最も大切であることを説いて、臨終の念仏を重視し、その行儀を強調している。平安時代、末法意識が高まる中で、源信の浄土思想は広く受け入れられ、貴族達による阿弥陀堂の建立や、阿弥陀仏の造像、阿弥陀聖衆来迎図などの作品が作られた。源信が説いた厭離穢土の世界観を絵画化した六道絵の傑作は、源信ゆかりの聖衆来迎寺（比叡辻二丁目）に所蔵されており、毎年夏の虫干しで展覧されている。かつては絵解きも行われ、多くの参詣者を集めた。



写 5-15 聖衆来迎寺本堂

源信が修行した横川は、延暦寺の三塔の中でも一番北に位置し、麓の仰木や堅田とのつながりが深かった。堅田の浮御堂は源信の創建と伝え、仰木にも源信に関わる伝承が残されている。平安時代中期、撰関家に取り入り、やがて源氏発展の基礎を築いた源満仲は、摂津の多田荘を本拠としたが、晩年の10年あまり源信に帰依して仰木の地に館を構えたという。満仲の館跡は「御所之山」と呼ばれ、元禄6年（1693）には後水尾天皇の女五宮の賀子内親王の発願になる旧跡の碑が建てられている。なお、御所之山公園の隣接地の発掘調査では、南宋からの輸入磁器や僧兵を描いた墨書土器等が見つかり、満仲の時代よりは新しいものの何らかの館のあったことが確認された。

延暦寺の浄土教の流れは、やがて法然を生む。西塔黒谷で修行していた法然は、易行としての称名念仏を選択し、専修念仏を人々に広めるため、山を下りる。法然の弟子である親鸞・弁長・聖覚などは、いずれも比叡山で修行し、その後法然の門に入って、教えを深化させ人々に広めた。こうして法然や親鸞の教えが広まる中で、延暦寺の中からも浄土信仰を人々に説く流れが生まれる。15世紀に活躍した真盛は、西塔黒谷で『往生要集』を修学し、天台の戒律の厳守と称名念仏の励行という信仰のあり方を見出す。真盛は山麓の西教寺（坂本五丁目）を拠点に、幅広い階層にその教えを説き、後の天台真盛宗の基礎を作った。

蓮如と大津

法然の弟子であった親鸞は浄土真宗を開くが、その弟子達は多くの門流に別れていった。15世紀、本願寺第8世の蓮如は近江の布教に重点をおき、湖南地域で真宗門徒が広がりを見せる。その拠点のひとつが堅田であった。堅田は、湖上水運の特権を有し、交通の拠点として発展した町で、住人は地侍層の殿原衆と商工業者や農民で構成される全人衆に大きく分かれていた。全人衆は、真宗を信仰し、寛正6年（1465）山門の衆徒によって京都を追われた蓮如を本福寺（本堅田一丁目）に迎えている。本福寺の第3世法住は、蓮如が信頼を寄せる門弟であったことから、ここを拠点のひとつにして、近江での布教に努めたのである。ところが、応仁2年（1467）室町幕府の命で山門衆徒が堅田を攻める「堅田大賁」が起こると、蓮如は堅田を逃れて園城寺（三井寺）の庇護を得て近松御坊に移った。その後も各地での布教活動を精力的に進め、山科本願寺、やがて石山本願寺を建立し、真宗教団は大きな勢力となっていく。

大津には、蓮如にまつわる多くの伝説が残されている。寛正6年、京都を追われた蓮如は、園城寺に宗祖親鸞の御真影を預けて越前に逃れた。その後、山科に本願寺を再興し、文明12年（1480）園

城寺に御真影の返却を求めて出向いたところ、人の生首をふたつならべるなら返そうとの難題をもちかけられた。この時、堅田光徳寺（本堅田一丁目）の門徒であった源兵衛が首を差しだし、源兵衛の殉教心に感じ入った園城寺は、御真影とともに首を返却した。この話を聞いた蓮如は、その殉教を末代まで伝えるようにと命じ、光徳寺に源兵衛の首が祀られ、墓所が作られた。同様の伝承は、小関町の等正寺にも伝わっている。



写 5-16 本福寺

同じく、蓮如が山門による焼き討ちを逃れた時のこと、逢坂山を越えて安養寺（逢坂一丁目）あたりまで来たところ、追っ手の僧兵に長刀で切りつけられた。とっさに、安養寺門前の石の後ろに身を隠すと、振り下ろされた長刀にあわせて石が左右に動き、蓮如の身を守ったという。後に蓮如はこの身代わりになってくれた石に、「無礙光如来」の五文字を刻んだと言われる。

また蓮如が大津に難をさけている頃、何者かが彼を殺害しようと食膳に毒を盛ることがあった。その時、日頃かわいがっていた犬が、蓮如のかわりに食事をたいらげ、毒にあたって死んでしまった。毒を盛られたことに気がついた蓮如は、身代わりとなった愛犬をねんごろにとむらい、樗を植えた。近松御坊の後身にあたる近松別院に程近い「犬塚の樗」（逢坂二丁目）が、その場所である。

蓮如の伝記では、園城寺の庇護をうけて南別所に近松御坊を建立して御真影を安置し、文明 12 年に山科本願寺の御影堂に移したとあり、園城寺との歴史的つながりは確認できるが、源兵衛の殉教譚をはじめとするこれらの話は、地域に伝えられてきた伝承と言えよう。

諸宗の進出と京都からの疎開

大津市は、延暦寺や園城寺といった古刹の膝下でその影響下にあったが、15 世紀頃になると、真盛の民衆への布教や堅田への禅宗、真宗の進出といった、庶民の信仰を受ける新たな勢力が教線を広げ、寺院が建立されるようになる。例えば、堅田の浮御堂（満月寺）が臨済宗大徳寺派に転宗し、応永 19 年（1412）には曹洞宗の竺山得仙が大津に青龍寺（長等一丁目）を開き、文明年中（1469～87）には田上中庄の地侍中野宗永父子が曹洞宗の法蔵寺（芝原一丁目）を建立している。時宗の国阿が、大津の靈仙に正福寺（音羽台）を開いたのは永徳 2 年（1382）とされる。

この時期京都は、応仁の乱で戦場となっていた。そのため、戦禍を逃れて大津市に移った寺院もあった。浄土宗の知恩院は、応仁元年（1467）伊香立の金蓮寺に逃れ、その後新知恩院（伊香立下在地町）を建立している。天台宗の真如堂も応仁 2 年に黒谷青龍寺に逃れるが、参拝に不便なことから文明 2 年（1470）に穴太真如堂（宝光寺、坂本一丁目）を建立している。こうした一時的な疎開のほか、戦国時代には、廃絶の危機にある寺院の重宝も大津に移されている。京都岡崎の勅願寺で戦乱により廃絶の危機にあった法勝寺の本尊や典籍、そして法勝寺流円頓戒（天台宗の戒律）が、西教寺に移されている。聖衆来迎寺も京都岡崎にあった元応国清寺の本尊を移し、元応寺流の円頓戒を継承している。



写 5-17 新知恩院

また、市内各地には、16 世紀以降の開基あるいは中興と伝える寺院でありながら、鎌倉時代や平安時代にさかのぼる仏像等が伝えられている例がある。これらの中には、応仁の乱によって荘園が解体され、新たな村落秩序の中で生まれた江戸時代につながる村の寺が、現在まで守り伝えてきたものも見られる。

6 祭礼文化と庶民信仰

【歴史文化ストーリーの概要】

市内各地で、1年を通じて様々な伝統行事が行われている。神輿御渡を中心とした春祭りが多く、その代表ともいうべきものが山王祭である。その規模は市外にも及ぶ広域なもので、華やかで勇壮な神輿祭が繰り広げられる。また、魅せる祭として洗練された大津祭は、江戸時代における都市祭礼の典型といえる曳山祭礼である。庶民信仰としては、西国三十三所観音巡礼があり、園城寺・石山寺といった鎮護国家の寺が、札所となっているのは興味深い。仏教文化が中心となる大津市にあって、昭和のはじめにキリスト教の教会が建てられ今に残されているのも、好対照をなしている。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔山王祭と大津祭〕

日吉大社、山王祭〔神輿上げ、午の神事、未の御供、宵宮落し、神輿御渡、船御渡、粟津御供〕(市)、膳所五社(石坐神社、和田神社、膳所神社、篠津神社、若宮八幡神社)、天孫神社、大津祭の曳山行事(国)、大津祭(県)、大津祭曳山(市)、木造狸面(市)、四宮祭礼牽山永代伝記(市)

四宮祭 鯉山飾毛綴(国)：大津祭の龍門滝山の見送幕、16世紀後半のベルギー製

四宮祭 月宮殿山飾毛綴(国)：大津祭の月宮殿山の見送幕、16世紀後半のベルギー製

〔四季の祭と正月行事〕

神田神社本殿(国)、春日神社本殿(国)、木造猿田彦命坐像(平野神社・国)、五箇祭、和邇祭、仰木の沼田祭、真野神田神社の稚児祭、若松神社の鉾振り(県・選択)、千団子祭、園城寺護法社護法善神堂(市)、木造護法善神立像(国)、建部大社の船幸祭、唐崎神社のみたらし祭、真野・栗原の六斎念仏(県・選択)、滋賀八幡神社の祭礼、宇佐八幡神社の祭礼、酒井神社・両社神社のおこぼまつり(市)、尾花川の蛇の顔見せ、御田神社の綱引き、建部大社の弓神事、坂本六地藏(穴太地藏・早尾地藏・明良地藏・阿波羅屋地藏・比叡辻地藏・苗鹿地藏)

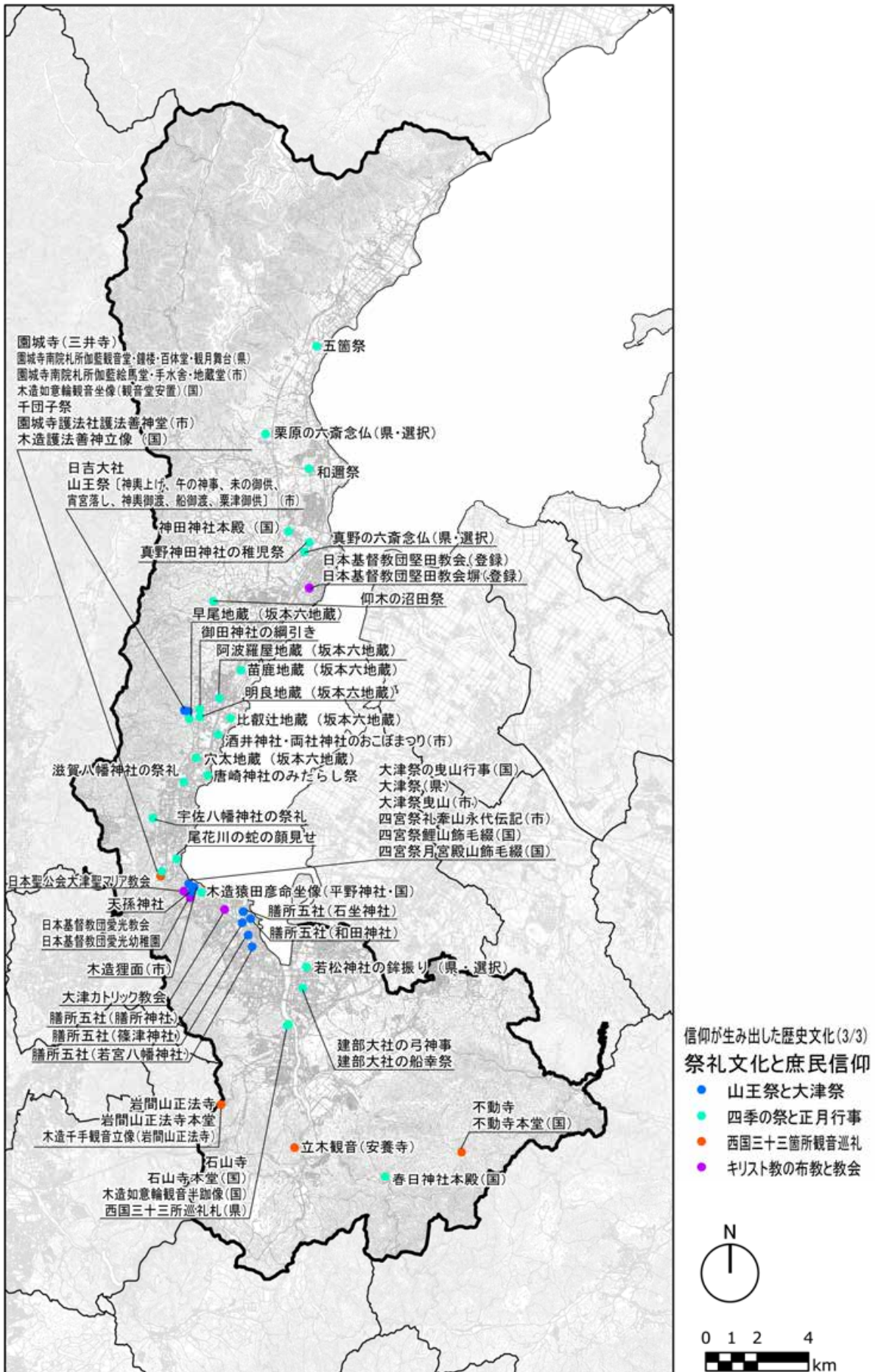
〔西国三十三所観音巡礼〕

岩間山正法寺、岩間山正法寺本堂、木造千手観音立像(岩間山正法寺)、石山寺、石山寺本堂(国)、木造如意輪観音半跏像(石山寺・国)、西国三十三所巡礼札(石山寺・県)、園城寺(三井寺)、園城寺南院札所伽藍観音堂・鐘楼・百体堂・観月舞台(県)、園城寺南院札所伽藍絵馬堂・手水舎・地藏堂(市)、木造如意輪観音坐像(観音堂安置)(園城寺・国)、立木観音(安養寺)、不動寺、不動寺本堂(国)

〔キリスト教の布教と教会〕

日本基督教団堅田教会(登録)、日本基督教団堅田教会塀(登録)、日本基督教団愛光教会、同愛光幼稚園、日本聖公会大津聖マリア教会、大津カトリック教会

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

山王祭と大津祭

地域の祭礼は、それぞれの歴史と伝統を踏まえ、独自の文化を継承してきた。大津市を代表する祭礼として、まず挙げられるのが日吉大社最大の祭礼である山王祭であろう。舞台となる日吉大社は、延暦寺の護法神として崇敬を受け、延暦寺の発展とともに、多くの神々が祀られる大社となっていく。3月上旬、八王子山の牛尾宮と三宮に2基の神輿を上げる行事からはじまり、4月12日にはこの神輿が山を下る午の神事、翌日には京都市下京区山王町の日吉神社から未の御供の奉納を受け、夜には四社の神輿を激しく揺する宵宮落しが行われる。そして4月14日には、七社



写 5-18 山王祭

の神輿が坂本・下阪本を渡御し、そこから湖上を渡る船渡御が行われ、唐崎沖で粟津御供が奉納される。これは、西本宮に祀られる大己貴神（三輪明神）が大和からやってきた時、大津から船に乗り唐崎に上陸する途中で、粟飯を食された故事に由来し、膳所五社（石坐神社、和田神社、膳所神社、篠津神社、若宮八幡神社）が担当する。このように、多くの地域が一体となり祭礼が行われる。

近世、宿場町・港町として大きく発展した経済都市大津、そこで生まれた大津祭も大津市を代表する祭りである。天孫神社の祭礼で、毎年秋に13基の曳山が大津の町を巡行する。江戸時代初期、天孫神社の宮元である、鍛冶屋町の塩売治兵衛が、祭の日に狸の面を被って踊ったことに始まるとされ、寛永15年（1638）には3輪で祇園祭の鉾に似た曳山が登場し、その後次々と曳山やねりものが生まれ華やかな祭礼に発展していく。大津祭の特色は、豊かな経済力を背景にした曳山装飾と、巡行中各所で演じられるからくりである。行事は、9月16日の鬮取式からはじまり、この日から各町内で囃子の練習がはじまる。本祭の1週間前に曳山を組み立てる山建てがあり、本祭前日の宵宮は、曳山やからくり人形が町内に飾られる。本祭は13基の曳山が終日巡行し、大津を祭礼一色に染める。

四季の祭と正月行事

市内には多くの神社があり、貴重な文化財とともに地域の人々によって大切に守られている。これらの神社では、多くが春祭りを大祭としている。神輿が渡御する祭礼が多いものの、個々の集落の歴史を反映して、様々な行事が見られる。複数の集落がまとまって祭礼を行う五箇祭（大物、荒川、木戸、守山、北船路）や和邇祭（北浜、中浜、高城、和邇中、南浜、今宿）、仰木の泥田祭などは、荘園鎮守社の伝統を伝え、集落単位で様々な役割を担いながら祭礼が構成されている。栗原の十人衆、仰木の泥田祭における芝座敷をはじめ、長老たちが年間の祭祀を司る宮座の伝統が今も生きている。神輿のほか、神田神社（真野四丁目）の稚児祭では榊が神の依代として重要な役割を担い、若松神社（大江二丁目）では巨大な鉾で境内を練る鉾振りが見られる。5月中頃、園城寺の護法善神堂で行われる千団子祭は、子供の健やかな成長を祈る祭で、多くの参拝者で賑わう。

夏祭りを代表するのが、建部大社（神領一丁目）の船幸祭である。毎年8月17日、建部大社を出発した神輿は、橋本で船に載せられて瀬田川を下る、華やかな船渡御である。このほか、唐崎神社のみたらし祭は、罪穢れを祓う行事として知られている。お盆には、六斎念仏が真野や栗原で行われている。秋には、八幡神社（滋賀里一丁目）、宇佐八幡神社（錦織



写 5-19 船幸祭

一丁目)で祭礼が行われる。八幡神社では、神輿渡御に先立ち竹の鉾が奉納されるのが、特徴的である。今堅田の野神神社で行われる野神祭は、新田義貞の寵愛をうけた勾当内侍の伝説に由来する。

年頭にも多彩な行事が見られる。下阪本の酒井神社(下阪本四丁目)・両社神社(下阪本三丁目)で行われるおこぼまつりは、餅を独特の形に加工して奉納する。藁で蛇を作り奉納する行事も多く見られ、尾花川の蛇の顔見せや坂本の御田神社(坂本六丁目)では蛇に見立てた大綱で綱引きが行われる。特定の場所に大綱を掛ける勧請縄も各地で見られる。また、建部大社の弓神事をはじめ、弓を打つ神事も広く見られる。このほか、市内各地で、地域に根差した信仰生活が今も生きている。例えば地蔵盆は、夏の風物詩として各地で行われているが、広域の地蔵信仰としては坂本六地蔵が挙げられ、伊勢講・愛宕講・庚申講・行者講といった講も各地に見ることができる。

西国三十三所観音巡礼

西国三十三所観音巡礼は、平安時代後期に生まれたとされるが、文治4年(1188)に完成した『千載和歌集』には、三井寺の覚忠が巡礼途上に谷汲山で詠んだ歌が収録されており、これが確実な史料といわれる。巡礼が広まるのは15世紀のことで、江戸時代以降、庶民の参詣が爆発的に増える。市内には3か所の札所がある。

第12番札所岩間山正法寺(岩間寺、石山内畑町)は、養老6年(722)泰澄が開いたと伝える。本尊千手観音は、元正天皇の勅命によって泰澄が霊地を求めて行脚の途中に、岩



写 5-20 岩間山正法寺

間山で桂の大樹から千手陀羅尼経が聞こえるのを不思議に思って木を伐らせたところ、中から千手観音が姿をあらわした。泰澄はこの奇瑞に感じ、自ら千手観音を刻み、寺を建立したのが創建という。

第13番札所石山寺(石山寺一丁目)は、平安時代から観音信仰が盛んで、皇族や貴族が参籠し、紫式部が『源氏物語』を執筆したとの伝承もある霊場である。石山寺には、永正3年(1506)武蔵国吉見(埼玉県吉見町)の住人と、永正4年(私年号で弥勒2年とある)甲州(山梨県)の住人が納めた巡礼札が残る。関東からの巡礼者が納札しており、西国巡礼の庶民化を示す事例といえる。

第14番札所園城寺(三井寺)観音堂(正法寺、園城寺町)は、秘仏の如意輪観音を本尊とする。もともと長等山山上付近の華ノ谷にあったが、文明13年(1481)山を下り、現在地に遷された。伝承では多くの僧の夢に、山上では参拝に不便で女人禁制のため女性も参れない。これでは人々を救うことが難しいため、山を下りて参詣しやすい場所に移りたい、との告げがあったという。山を下りたとはいえ、中心市街地を一望できる高台に位置し、「南院札所伽藍」として一画を構成している。

札所ではないが、岩間寺の南、空海ゆかりの立木観音(安養寺、南郷五丁目)も厄除けの寺として多くの参拝者を集める。太神山上の田上不動(太神山不動寺、田上森町)は、園城寺を中興した円珍ゆかりの寺で、毎年9月に法要が営まれ、江戸時代には大坂や京都からも参詣者があった。

キリスト教の布教と教会

江戸時代に禁止されていたキリスト教の信仰は、明治6年(1873)キリスト教禁止の高札が撤廃され、布教が認められるようになる。明治38年アメリカから来日したヴォーリズは教師のかたわら布教につとめ、やがて建築事務所をたちあげ、多くの建物を設計した。日本基督教団堅田教会(本堅田三丁目)、同大津教会愛光幼稚園(末広町)はヴォーリズの設計になる。大津市内には、他にも日本聖公会大津聖マリア教会(京町一丁目)、大津カトリック教会(馬場二丁目)など、キリスト教に関わる建築物が残されている。これもまた、庶民の信仰が生み出し、守り伝えてきた歴史文化遺産といえる。

7 水運とともに歩む町

【歴史文化ストーリーの概要】

「大津」という地名が琵琶湖の「大きな港」に由来するように、大津市内には琵琶湖の水運と深く結びついた地域が多い。大津は平安時代以降、京都の東の玄関口となり、江戸時代には「大津百町」と呼ばれ、東海道で最大の人口を持つ宿場となったが、その理由は水陸交通の要衝であったことに由来する。堅田は鎌倉時代に「湖十二郡」を支配すると豪語し、江戸時代には「諸浦の親郷」として水運や漁業に大きな権利を持っていた。他にも、下阪本の三津浜は平安時代以降港として栄え、北部地域や瀬田川沿いの村々でも水運が盛んであった。琵琶湖と瀬田川の水運が、大津市の繁栄を支えていたといえる。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔琵琶湖の港に由来する大津〕

小舟入こふないりの常夜灯（市）、石場常夜灯、大津祭の曳山行事（国）、大津港周辺の町並みひこたいなり、彦田稻荷神社、滋賀県庁本館（登録）、大津市旧大津公会堂（登録）、大津船大工・貸船屋関係文書（市）
大津別院本堂・書院（国）：真宗大谷派の別院で、慶安2年（1649）と寛文10年（1670）の建築。大津の豪商が直参門徒として、建立や修繕に深くかかわった。
大津百艘船関係資料（国）：江戸時代に大津を拠点に活動した大津百艘船の歴史を伝える資料群。
華階寺けかいじのいちょう（市）：大津駅前まへにあり、樹齡は600年に近い。水運の盛んであった頃は、湖上からの目印となっていた。

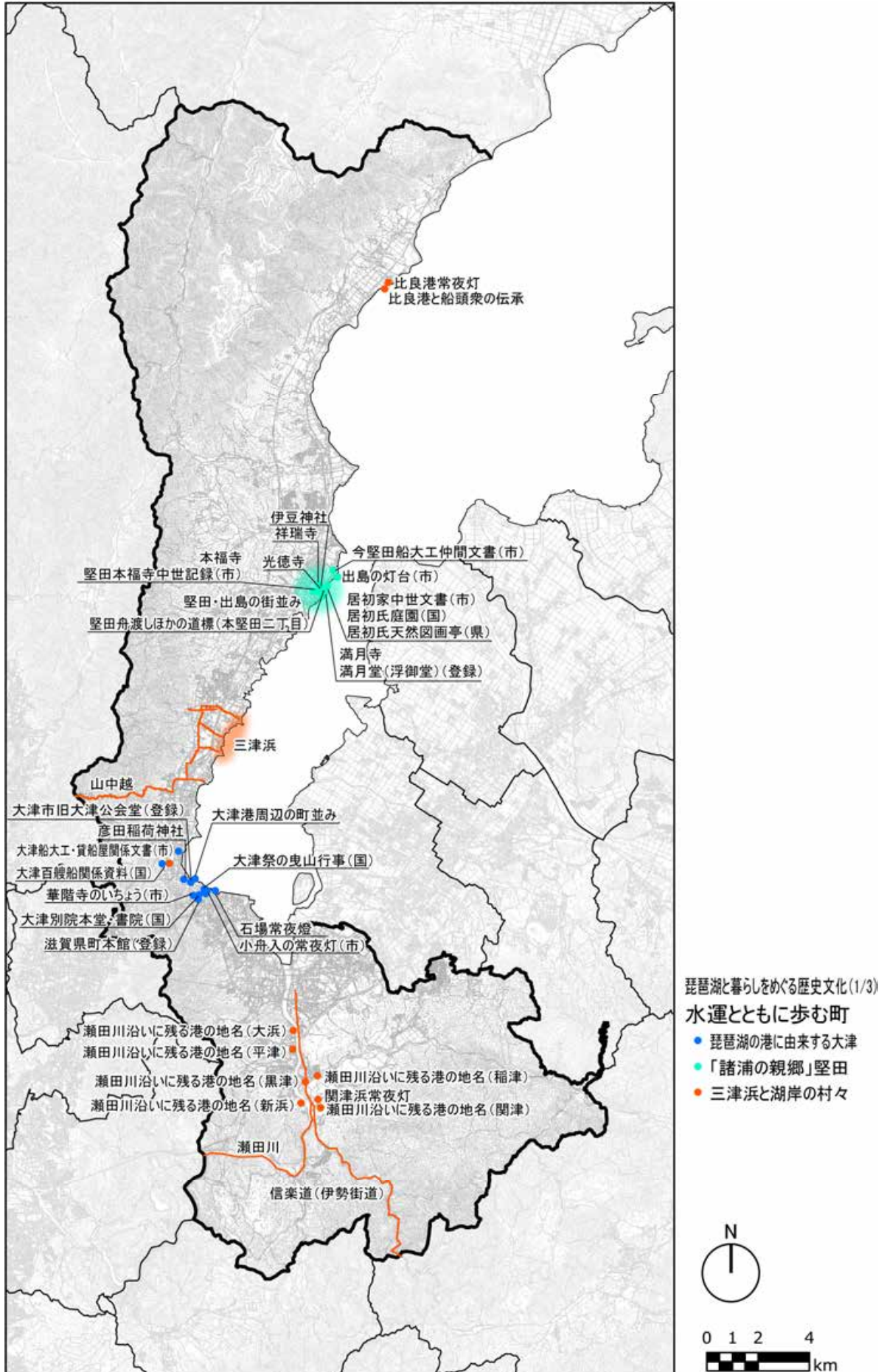
〔「諸浦の親郷」堅田〕

堅田本福寺中世記録ほんぶくじ（市）、今堅田船大工仲間文書いま（市）、居初家中世文書いそめ（市）、伊豆神社、堅田・出島の町並みまんげつじ、満月寺しょうずいじ、祥瑞寺こうとくじ、本福寺、光徳寺、居初氏庭園（国）、居初氏天然図画亭（県）、出島の灯台（市）、堅田舟渡しほかの道標（本堅田二丁目）

〔三津浜と湖岸の村々〕

三津浜、山中越、大津百艘船関係資料（国）、比良港常夜灯、比良港と船頭衆の伝承、関津浜常夜灯、信楽道（伊勢街道）、瀬田川沿いに残る港の地名（大浜、平津、新浜、稲津、黒津、関津）

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

琵琶湖の港に由来する大津

大津とは、大きな津＝港があったことから付いた地名であり、琵琶湖の大きな港があったことに由来する。『日本書紀』持統天皇6年(692)閏5月15日条に、天智天皇のことを「御近江大津宮天皇」と記しているのが「大津」の初見で、1300年以上前に既にこの地が大津と呼ばれていたことがわかる。天智天皇没後の壬申の乱を経て都は飛鳥に遷され、いつしか「古津」(昔の港)と呼ばれるようになるが、延暦13年(794)平安京に遷都した桓武天皇は再び「大津」と改めるように命じた。延長5年(927)に成立した『延喜式』によれば、北陸道からの荷物は、琵琶湖を船で大津に、そして陸路で都へと運ばれた。このように大津は、平安京の東の外港として地位を確立していった。

園城寺の門前に開けた西浦と、延暦寺領で東国への玄関口となった東浦からなっていた大津は、浅野長吉による大津築城と大津百艘船の創設によって、坂本(下阪本)にかわって再び琵琶湖水運の中心として復活した。関が原合戦後は幕府による直轄支配をうけ、「大津百町」と呼ばれて東海道第一の宿場町として繁栄した。江戸時代の「大津百町」の繁栄を支えた最大の要因は、琵琶湖を運ばれてくる米をはじめとした多くの荷物であった。湖岸には「関」と呼ばれた船入(船の停泊場所)が設けられ、諸藩の蔵屋敷や商人たちの米蔵が建ちならんだ。「川口関(堀)」「扇屋関」「風呂屋関」といった主要な関は、かつての大津城の堀が再利用された。ちなみに、京阪電車石山坂本線の「島の関」駅は、船入のひとつであった島の関に由来する。そして、米を売買するための米相場がたち、やがて大津御用米会所となった。多くの荷物が集まった大津には豪商が生まれ、彼らの財力は、からくりの妙技と豪華な懸装品で知られる大津祭を生み出す。



写 5-21 小舟入の常夜灯
(中央四丁目)

水運とともに発展してきた大津は、近代に入って交通の主役が鉄道へと移る中、滋賀県の県庁所在地として行政の中心となる。「大津百町」には伝統的な町家が数多く残され、登録有形文化財として保存が図られている。現在、湖岸の埋め立てが進んだことで港町としての面影を伝えるものは数少ないが、小舟入(中央四丁目)と打出浜の琵琶湖ホール横には、船の往来の目印となった常夜灯が残されている。打出浜の常夜灯は、元は大津警察署の場所にあった石場の常夜灯で、それが琵琶湖文化館前に移され、さらに現地へと移動したものである。それに対して、小舟入の常夜灯は江戸時代の場所とかわっておらず、かつての湖岸線を示す、貴重な資料でもある。

「諸浦の親郷」堅田

琵琶湖の最狭部に位置する堅田は、下鴨社の御厨(神への供え物を献上した領地)としての由緒を持ち、中世には琵琶湖の漁業や水運に絶大な力をふるった。なかでも水運では、湖上関を構え、「上乗権」と呼ばれる安全航行を保証する権利を根拠に、琵琶湖を支配した。『本福寺由来記』によれば、鎌倉時代に沖ノ島の支配をめぐる堅田と近江守護六角氏との間で争いが起こったとき、「六角トノ(殿)ハ海ヨリ東」、「堅田ハ湖十二郡ヲ知行致」と主張し、鎌倉幕府にその権利を認められたという。御厨供御人の系譜をひく殿原衆は堅田の指導者層で、禅宗に帰依した。それに対し、農民や商工業者は全人衆と呼ばれて浄土真宗の門徒となり、商人たちは御厨住人としての自由通行権を背景に、全国に進出していった。

織田信長からも琵琶湖に対する支配権を安堵されたと伝え、豊臣秀吉は堅田の船大工に諸役免除の特権を与えている。大津城が築かれ、公用船として大津百艘船が創設されると、堅田からも船持ち

が大津に移住し、堅田町をつくりあげた。江戸時代には「諸浦の親郷」と呼ばれ、廻船に出向く権利である船株の制限がなく、琵琶湖のどの港にも自由に入出入りし、廻船の規定に違反した船を抑留して詫び証文を取ることのできる権利を持っていた。堅田は、内湖との間に水路が入りこみ、中世には「堅田四方」と呼ばれた北ノ切（本切、宮ノ切）、東ノ切、西ノ切、今堅田の4区域からなっていた。北ノ切には鎮守の伊豆神社があり、堅田発祥の地であった。江戸時代には、北ノ切が廻船と農業、東ノ切、西ノ切は漁業が中心で、今堅田には船大工が居住した。元禄11年（1698）堀田正高が1万石を与えられて本堅田村に陣屋を構え、堅田藩が誕生する。堅田藩では、中世の殿原衆の系譜をひく船道郷士を庄屋に登用し、民政にあたった。

堅田は今も環濠の名残を伝える堀割が残り、比叡山横川の源信が衆生済度と湖上交通の安全を祈願して創建したという満月寺（浮御堂）、頓知嚙で有名な一休が修行をした祥瑞寺、浄土真宗中興の祖である蓮如ゆかりの本福寺・光徳寺のように中世に溯る古刹や、随所に昔ながらの町並みを残している。なかでも、船道郷士の1人で最初の居住者であるところから苗字にしたという居初家には、琵琶湖を借景とした雄大な庭園が残されている。

明治8年（1875）今堅田の湖岸の突端、出島（今堅田一丁目）に木造の灯台が築かれた。高床式で四隅に立つ4本の柱と中心の支柱の合計5本の柱で支える木造の灯台は、頂部に火袋を設けるといふ、他には見られない姿である。出島は船大工の居住地で古い町並みが残り、周辺には造船所もあり、水運とともに歩む堅田の姿を見ることができる。



写 5-22 居初氏庭園（本堅田二丁目）

三津浜と湖岸の村々

延暦寺・日吉社の門前に開けた坂本（上坂本）に対し、下坂本（浜坂本）の湖岸には港が開けた。三津浜と総称される、今津・戸津・志津である。永承7年（1052）頃の成立とされる『新猿楽記』には、大津とならんで三津浜が登場する。三津浜に着いた荷物は、延暦寺・日吉社はもちろんのこと、山中越から京都へと運ばれていった。室町時代には、三津浜や山中には、運送業者である馬借や車借が住んでいた。

江戸時代に琵琶湖で荷物輸送を認められていた丸子船（丸船）には、船株が定められていた。大津市内では、船株の定が無かった本堅田を別格に、大津が150株、松本・馬場・膳所西之庄の30株、北小松の16株、舟路・木戸・荒川・守山・大物（木戸5ヶ村）の15株、北比良の15株、南比良の15株、野村・南小松の12株である。このように、北部地域の村々では、船稼ぎも重要であった。運ばれた荷物は、北小松の米・竹木・木柴・石、南小松の木柴・商売荷物、北比良・南比良の木柴・石、木戸5ヶ村の石などである。比良山系で採れる木柴や石材が主要な荷物であったことがわかる。これらの村々は、多くが山手の街道沿いに集落があるなか、北比良村と南比良村は湖岸に所在し、北比良には明治11年（1878）に建立された常夜灯が移設されて残っている。

目を南に転じると、瀬田川にも川舟が就航していた。延宝5年（1677）の「江州湖水諸浦舟員数帳」には、瀬田川の内として、神領2艘、橋本9艘（内7艘は獵舟）、鳥居川2艘、黒津4艘、太支3艘、関津7艘、南郷6艘、稲津1艘の合計34艘が記されている。黒津・関津・稲津は、大津と同様、港に由来する地名である。この中では、関津が大石で採られた木柴を運び出す港として知られており、常夜灯が残されている。



写 5-23 関津浜常夜灯
（関津一丁目）

8 水城と町の繁栄

【歴史文化ストーリーの概要】

安土・桃山時代、大津市には^{のぶなが}信長・^{ひでよし}秀吉・^{いえやす}家康という3人の天下人の命によって城が築かれる。^{あけちみつひで}明智光秀の坂本城、^{あきのながよし}浅野長吉の大津城、^{とだかずあき}戸田一西の膳所城である。3つの城は、いずれも琵琶湖岸に築かれた水城であったが、坂本城・大津城が湖上交通を取り込んだ城であったのに対し、膳所城は軍事上の要害として琵琶湖を利用している。坂本城、大津城は短命であったが、膳所城は江戸時代を通じて膳所藩の居城となり、城下町はいずれも現在の町へとつながっている。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔まぼろしの坂本城〕

坂本城跡、^{あけちさ まのすけ}明智左馬之助湖水渡りの伝説と碑、駒止めの松の碑、^{せいあんじ}明智一族墓（西教寺）、^{せいあんじ}盛安寺の陣太鼓、^{りょうしや}両社神社本殿（県）、^{しやうじゆらいこうじ}酒井神社本殿（県）、^{よちしりやく}聖衆来迎寺表門（国）、『^{よちしりやく}近江輿地志略』（県）、坂本城址碑

明智塚：東南寺の北の国道沿いに、木造の鳥居と石燈籠がある。光秀が築城の際に宝刀を埋めた跡、落城の際に光秀愛用の脇差を埋めた跡、明智一族の墓、などの諸説がある。

〔水運の拠点となった大津城〕

大津城跡、大津百艘船関係資料（国）、「大津百町」に残る町名（^{こからさき}石川町、^{たいま}小唐崎町、柳町、太間町、中堀町、坂本町、堅田町、島の関）、川口公園（川口堀跡）

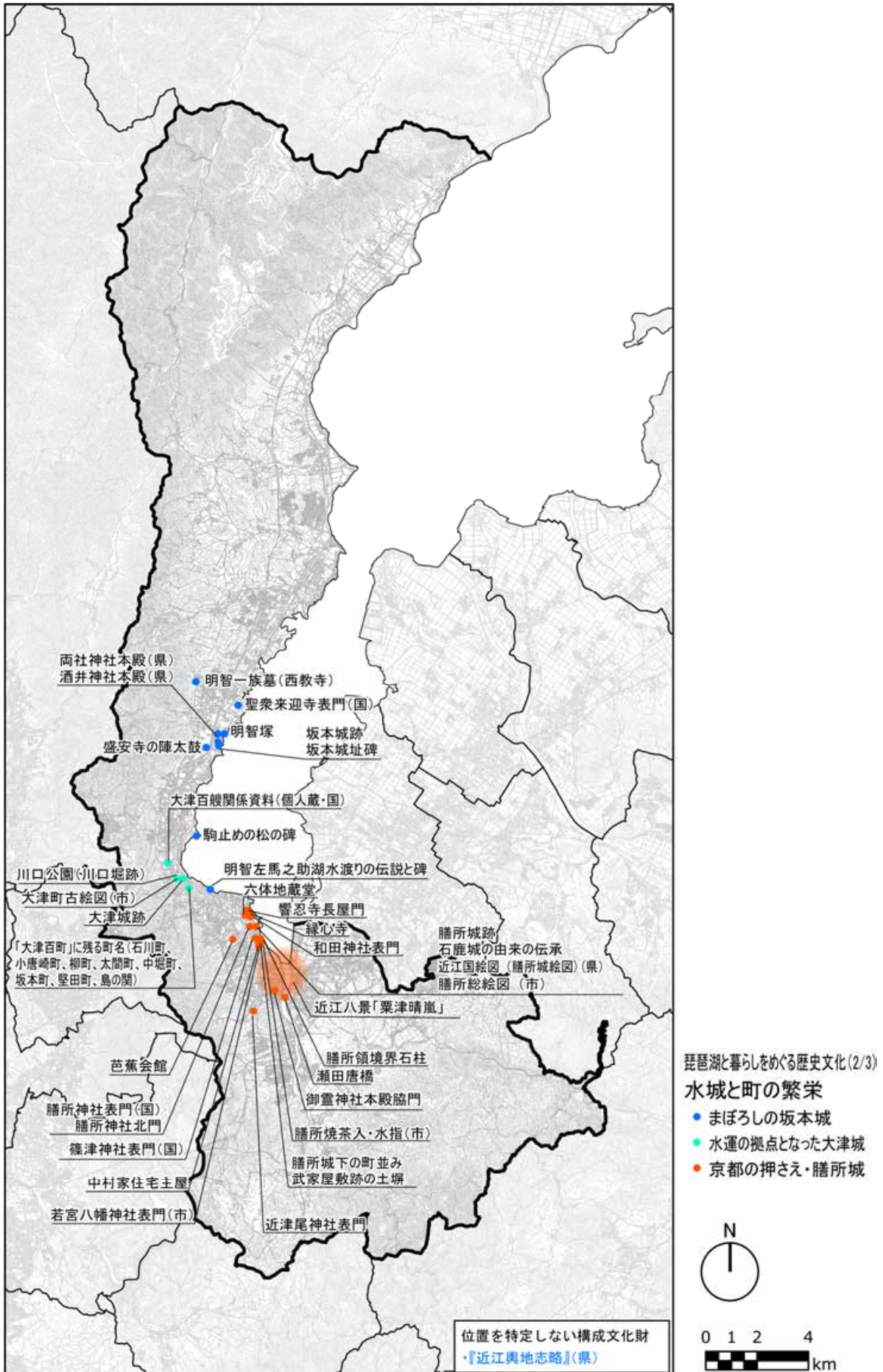
大津町古絵図（市）：江戸時代の大津町を描いた絵図で、寛保2年（1742）の写し。大津城の本丸跡が幕府の御蔵と代官所に、堀の跡が船入（^{ふないり}船の停泊場所）となっていることがわかる。

〔大坂・京都の押さえ膳所城〕

膳所城跡、^{えんしんじ}縁心寺、近江国絵図（膳所城絵図）（県）、膳所総絵図（市）、^{あわ}瀬田唐橋、近江八景「^{あわ}粟津晴嵐」、膳所焼茶入・水指（市）、膳所神社表門（国）、膳所神社北門、^{しのづ}篠津神社表門（国）、若宮八幡神社表門（市）、和田神社表門、^{ごりょう}御霊神社本殿脇門、^{ちかつお}近津尾神社表門、六体地藏堂、芭蕉会館、膳所城下の町並み、^{こうにんじ}響忍寺長屋門、中村家住宅主屋、武家屋敷跡の土堀、^{せきろく}石鹿城の由来の伝承

膳所領境界石柱：膳所藩領の境界に立てられて石柱。移築されながらも、市内の数カ所に現存する。

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

まぼろしの坂本城

元龜2年（1571）9月12日、織田信長はかねてから敵対的な行動をとっていた延暦寺を焼き討ちした。そして、延暦寺の押さえと京都への交通路の確保のため、明智光秀に命じて琵琶湖岸に坂本城を築いた。『兼見卿記』や『天王寺屋会記』によれば、大・小の天主を備え、湖水を城内に引き込んだ城であったことが知られる。本能寺の変後、坂本城は秀吉軍の攻撃を受けて落城するが、この時安土城を守っていた光秀の娘婿秀満は、打出浜あたりから琵琶湖を馬で渡って入城を果たしたと伝える。光秀は主君信長を討った逆臣と言われるが、坂本では焼き討ち後の復興に尽力した恩人とされ、西教寺（坂本五丁目）には明智一族の墓があり、明智光秀奉賛会によって毎年法要が営まれている。また盛安寺（坂本一丁目）は別名を「明智寺」と呼び、光秀（秀満ともいう）の陣太鼓が残されていると、『伊勢参宮名所図会』に紹介されている。

一度は落城した坂本城ではあったが、その後丹羽長秀によって再建され、秀吉の家臣浅野長吉は天正11年（1583）に「坂本町中定書」を出し、城下町の繁栄の基礎を築いた。浅野長吉の子孫は広島藩主として明治維新を迎えるが、長吉の長男幸長が坂本城で生まれたところから、幸長の弟で初代藩主となった長晟は、元和6年（1620）に酒井神社（下阪本四丁目）と両社神社（下阪本三丁目、江戸時代には2社で「両社大明神」と呼ばれていた）の本殿を建立した。

坂本城は、天正14年頃に廃城となったため、長らくその所在が不明であった。享保19年（1734）の『近江輿地志略』には、かつての坂本城の場所に「今津堂」（現、東南寺、下阪本三丁目）が再建されたとあり、大正14年（1915）に東南寺の門前に「坂本城址」の碑が建てられた。城跡の場所が確定したのは、昭和54年（1979）から東南寺の東側湖岸で実施された発掘調査の成果で、『近江輿地志略』の記述が裏付けられた。現地で城跡の痕跡を見つけるのは難しいが、琵琶湖の渇水時には、石垣の一部や根太（石垣の沈下を防ぐためにわたされた横木）が姿を現す。坂本城の遺構には、聖衆来迎寺（比叡辻二丁目）の表門がある。坂本城から移築されたとの伝承を持っていたが、平成23年（2011）に実施された解体修理によってそれが証明された。



写 5-24 聖衆来迎寺表門

水運の拠点となった大津城

天正14年（1586）頃に坂本から城が大津に移される。西浦と呼ばれていた園城寺の門前と、東浦と呼ばれていた東国への玄関口との間に、百々川や吾妻川の扇状地を造成して築かれた。その全体像は明らかではないが、京阪電車のびわ湖浜大津駅周辺が本丸にあたり、昭和55年（1980）以降に数次にわたる発掘調査が実施され、石垣や礎石建物、石組みの溝やかまどなどの遺構、金箔瓦をはじめとする瓦類や土器類が見つかっている。

写 5-25 大津城跡出土瓦
(大津市埋蔵文化財調査センター保管)

坂本城から大津城への移動は、大津が東海道によって京都へ、また追分から奈良街道に道をとって伏見から淀川水運を経て、秀吉の本拠地であった大坂に直結するという、大津の位置にあった。そのため、大津築城と同時に大津城主の公用を勤めるために「大津百艘船」と呼ばれる船仲間が組織され、初代の大津城主浅野長吉は天正15年2月16日付けで5カ条からなる高札を出して大津百艘船の特権を認めた。以後、増田長盛、新庄直頼、京極高次

と歴代の大津城主は同様の高札を出しており、「大津百艘船関係資料」として、今に伝えられている。

大津城跡は、湖岸の埋め立てによって水城としての面影は失っているが、「川口公園」（浜大津三丁目）となっている細長い敷地は、江戸時代の船入（船の停泊場所）であった川口堀を埋め立てたもので、かつての大津城の堀の跡である。また、江戸時代に「大津百町」と呼ばれた町名で、現在も自治会名として残る地名に、手がかりを見つけることができる。「石川町」（長等一・二丁目）、「小唐崎町」（上小唐崎町・下小唐崎町：中央一・二丁目・京町二丁目）、「柳町」（中央一・二丁目）、「太間町」（中央二丁目）の4町は、同じ名前を旧坂本城下の町の中にも見つけることができる。坂本から大津に城が移ったことにより、町ごと移住した結果、同じ町名がつけられたと考えられている。「中堀町」（中央一丁目）は、大津城の中堀と関係ある地名であろう。「坂本町」（中央二丁目・浜町）と「堅田町」（上堅田町・下堅田町：中央三丁目・島の関）は大津百艘船の創設にあたって、坂本と堅田から移住した船持ちにちなむ町名である。

大坂・京都の押さえ膳所城

慶長5年（1600）9月、関ヶ原合戦の前哨戦が、大津城を舞台に繰り広げられた。10日余りの籠城戦の後に開城し、城主の京極高次は城を出て高野山に蟄居した。しかし、西軍の大軍を引き止めたことが関ヶ原での東軍の勝利を導いたとして、戦後加増の上で若狭小浜に転封となった。かわって大津城主となったのは徳川家康の家臣戸田一西であったが、大津籠城戦の経験から、大津城は守るには不利な城であると判断され、家康の命によって諸大名を動員して膳所城が築かれた。築城にあたっては相模川を付け替え、大津城から石垣や建物が移築されたが、大津城天主は最後まで落ちなかった縁起ものとして、膳所城ではなく彦根城天主の部材として再利用された。



写 5-26 膳所城址公園（平成10年撮影）

大津市で最後の水城となった膳所城は、琵琶湖を城郭に取り込んでいたが、琵琶湖の水運を活用するという構造にはなっていなかった点で、坂本城、大津城とは大きく異なる。膳所城と城下町を描いた絵図からは、城下町に荷物を積んだ船が着岸できるような港はなく、東海道を挟んだ両側に町家が並び、その背後を武家屋敷が固める構造となっている。軍事上の要衝である瀬田橋の警護や架け替えも、膳所藩が担当した。これらのことから明らかのように、東海道の防備が主眼となって、膳所城が築かれたのである。それでも、「瀬田の唐橋 唐金擬宝珠 水に映るは 膳所の城」と詠われ、近江八景の「栗津晴嵐」に膳所城が描かれるように、琵琶湖と相俟ってその美しい姿は、多くの人々を魅了した。文化の華も開き、江戸時代のはじめには、藩主の御用窯として膳所焼が焼かれ（一旦は廃絶するが大正期に復興）、この地に滞在した松尾芭蕉を多くの門人が支援した。

膳所藩は、戸田氏、本多氏、菅沼氏、石川氏と藩主が変わるが、慶安4年（1651）再度本多氏が藩主となり、幕末まで存続する。延宝7年（1679）以降、その所領は近江（栗太郡、滋賀郡、高島郡が中心）と河内で6万石余となり、村々の支配は百姓を営みながら郷士身分として数ヶ村から数十ヶ村を管轄した郷代官があたった。

膳所城は明治3年（1870）廃城となり、いくつかの城門が城下の神社等に移築され、今に伝えられている。膳所城の本丸跡は現在膳所城址公園となり、琵琶湖に突き出た立地は変わらないが、周辺は湖岸の埋め立てによって大きく変貌している。それでも、一部にかつての湖岸線の石垣を見つけることができる。城下町は町割りが踏襲され、各所に武家屋敷の名残や土堀の町並みが残り、なかでも響忍寺（木下町）は家老村松家の屋敷跡で立派な長屋門を構えている。

9 琵琶湖の暮らしと生業

【歴史文化ストーリーの概要】

琵琶湖は、人々の暮らしに大きな影響を与えてきた。人々は湖をウミと呼び、湖上交通や漁業の場として利用してきたのである。人々は、琵琶湖から魚を獲るために様々な漁法を工夫し、収穫した魚は独特の料理法によって食膳を豊かなものとした。人と湖が関わる上では、船という道具が必要だった。琵琶湖では、丸子船（丸船）と髹船と呼ばれる船が生まれ、人は船を駆使することで、沖に出ることができ、湖上での活動が可能となったのである。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔琵琶湖の漁業〕

石山貝塚（市）、粟津湖底遺跡、琵琶湖の漁撈用具及び船大工用具（登録）、港に由来する地名（和邇北浜、和邇中浜、和邇南浜）

紙本著色近江名所図（国）：琵琶湖西岸の名所を描いた室町時代の作品。四ツ手網で漁をする姿が描かれる。

〔琵琶湖の食文化〕

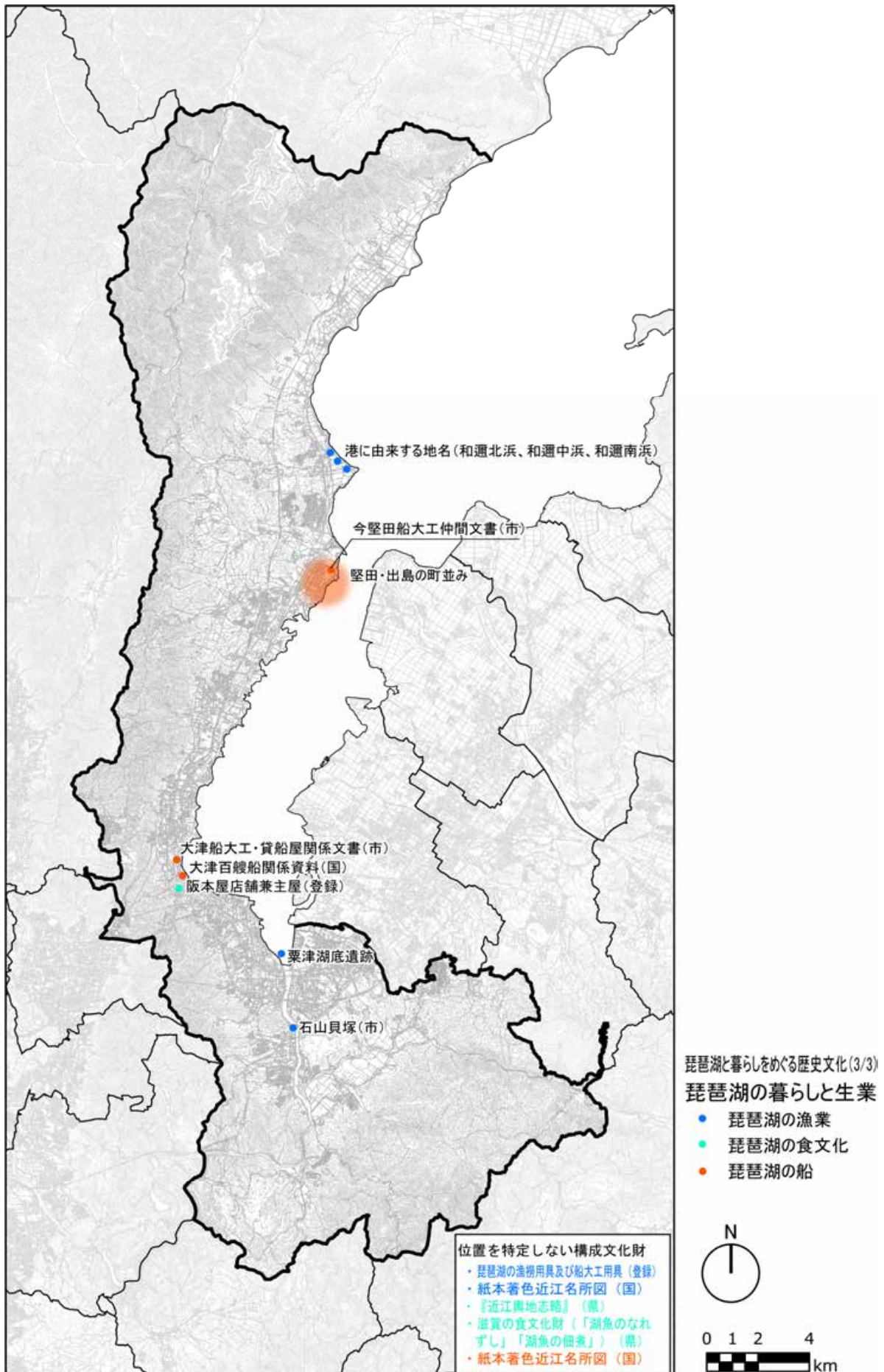
近江輿地志略（県）、阪本屋店舗兼主屋（登録）、滋賀の食文化財（「湖魚のなれずし」「湖魚の佃煮」）（県）

〔琵琶湖の船〕

大津百艘船関係資料（国）、今堅田船大工仲間文書（市）、大津船大工・貸船屋関係文書（市）、堅田・出島の町並み

紙本著色近江名所図（国）：琵琶湖西岸の名所を描いた室町時代の作品。人や荷物を乗せて往来する船の姿が描かれる。

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

琵琶湖の漁業

琵琶湖の周辺に暮らす人々は、縄文時代には丸木舟を使って沿岸で貝や魚を捕り、暮らしを豊かにしていた痕跡が石山貝塚(石山寺三丁目)や栗津湖底遺跡(晴嵐一丁目地先)からわかる。セタシジミなどの貝類、コイやフナなどの淡水魚が貝塚から出土している。海の遠い京都では、新鮮な魚を提供できる琵琶湖は貴重で、平安時代以来皇室や摂関家、特定の神社に魚介類を納める御厨が各所に設定される。大津市では栗津・橋本の御厨が大きな勢力を持って漁撈活動を行っていた。御厨の仕事に従事する供御人は、諸役免除の特権を与えられ、魚の販売も行っており、室町時代には、京都で湖魚の販売をほぼ独占するまでに至っている。この時代には漁撈よりも商業活動が主体となっていた。

鎌倉から江戸時代にかけての琵琶湖での漁撈活動では、下鴨社の御厨であった堅田が重要である。堅田衆は、湖上の自由通行権を持ち、琵琶湖一円を漁場として、各地で漁場をめぐり相論をおこしている。江戸幕府からも網漁の独占的権利を認められ、慶長6年(1601)の船数調査の記録でも、「かた田れう(漁)舟」86艘、「今かた田れう舟」46艘がみえ、その数は他浦を圧倒している。明治時代になると、漁業における特権はなくなるが、現在も琵琶湖で最大の漁業基地として活動している。

琵琶湖での漁法として、河川での築(網代)が古い文献に見え、田上の網代は国家が管理する網代として平安時代の和歌にも歌われていた。湖岸から突き出して仕掛けられた魷は、琵琶湖の景観を特色づける独特の漁法で湖岸の各所で見られる。船を駆使する漁法としては網を使った小糸網やイサザ網、流し釣(延縄釣)、竹製の漁具である蝦タツベを用いた漁が行われていた。かつて堅田の漁師を釣漁師・網漁師と呼び分けていたのも、こうした漁法の違いからである。和邇南浜・北浜は、イサザ網の発祥の地とされ、この漁が盛んだった。湖岸からの地曳網も各所であり、江戸時代には大津(尾花川)、堅田、小松などに網引き場が多く見られた。産卵のため湖岸に寄ってくる魚を、タツベやモンドリなどの竹製漁具をヨシ原に仕掛けて捕る漁も各地で見られた。沿岸でのこうした漁業は、農業の副業として行われ、人々の食卓を潤していたものである。

琵琶湖が生み出す食文化

享保19年(1734)膳所藩士寒川辰清が著した『近江輿地志略』は、琵琶湖でとれる大津の名産として「堅田煎鰯」、「鱒魚」、「鮒」、「鯉」、「鰻鱺魚」、「勢多蜆」、「宇治丸鮓」、「鮎」をあげる。これらの湖魚は、独特の食文化を生み出した。エビ、イサザ、モロコ、コアユなどは佃煮として加工され、フナは「なれずし」(塩漬けの魚と飯を合わせて自然発酵させたもの)の代表として圧倒的知名度を持つフナズシとなる。琵琶湖に生息するフナの固有種には、ニゴロブナとゲンゴロウブナがあるが、フナズシはニゴロブナを原料とする。うろこ・えら・内臓を取り除いたニゴロブナを塩漬にし、飯と重ねて漬けこむことで自然醗酵させ、独特の風味をだす。康保4年(967)施行された『延喜式』には、筑摩御厨(米原市)から「鮓鮒」が朝廷に納められるとの記載があり、その歴史は古い。製法は時代によって変遷が見られるが、今も家庭の味として自宅で漬けら



写 5-27 琵琶湖の漁撈用具及び船大工用具
(滋賀県教育委員会提供)



写 5-28 フナズシ

うろこ・えら・内臓を取り除いたニゴロブナを塩漬にし、飯と重ねて漬けこむことで自然醗酵させ、独特の風味をだす。康保4年(967)施行された『延喜式』には、筑摩御厨(米原市)から「鮓鮒」が朝廷に納められるとの記載があり、その歴史は古い。製法は時代によって変遷が見られるが、今も家庭の味として自宅で漬けら

れるのは勿論、堅田や大津には伝統の味を伝えるフナズシの専門店が営業している。

『近江輿地志略』が紹介する湖魚は、「鯉」は瀬田橋の下で取れるものを最上とし、黒津で取れるものも美味とある。「鰻鱺魚」も黒津の築でとれたものが大ぶりで美味とある。黒津では、膳所藩に運上を納めて瀬田川でのウナギ漁が認められ、急流に2艘の船をつないでその間に網を入れてウナギをとった。「宇治丸鮎」はウナギの鮎のことで、宇治丸なる人物が初めて作ったところからその名が付いたというが、今は馴染みがない。

「勢多蜆」は石山貝塚でも見つかっているように、古くから琵琶湖周辺の人々の栄養源となってきた。江戸時代には、大江村や橋本村の漁師がシジミ掻き漁によって漁獲し、シジミ汁やシジミ飯として食膳をかざった。身が食べられたあとに残った貝殻は、貝灰に加工されて漆喰や肥料として利用された。現在は、瀬田町漁業協同組合が稚貝を放流して繁殖をはかっており、石山寺の門前ではシジミ飯が名物として売られている。このような琵琶湖の食文化は、伝統漁法とともに日本遺産「琵琶湖とその水辺景観—祈りと暮らしの水遺産」の構成要素となり、滋賀県の無形民俗文化財に選択されている「滋賀の食文化財」5件の中に、「湖魚のなれずし」と「湖魚の佃煮」が含まれている。

琵琶湖の船

平安時代の『延喜式』からは、若狭や北国から京都への荷物が琵琶湖を船で運ばれていたことが知られるが、どのような船が通っていたかは明らかではない。一方、江戸時代には淡水湖である琵琶湖の特性に見合った独特の木造和船が建造されていたことが知られている。丸子船(丸船ともよばれる)と艀船である。丸子船は、船底が丸みを帯びており、舷側板を積み重ねることで大型船になり、艀先が板を斜めに立て並べて造るヘイタ造であることと、舷側板にオモギと呼ばれる丸太を半切したような大きな部材を取り付けていることである。オモギが荷物を積載した時の喫水線にあたり、その浮力で転覆しにくい構造になっていた。それに対し、艀船は船底が平な小型船で、沿岸や内湖で漁船や田船として用いられた。



図 5-6 丸子船
 (『琵琶湖の船—丸木舟から蒸気船へ—』より)

こうした船がいつごろから見られたかは判然としない。史料の上では艀船は平安時代から川船の名称として淀川で見られ、琵琶湖では室町時代に登場する。それに対して、丸子船は慶長6年(1601)が初見で、淡水湖に見合った発達を遂げてきたためか、琵琶湖でしか見られない。丸子船は琵琶湖を運ばれる荷物輸送に活躍し、中世以来の特権を誇る堅田、大津城主の公用船として組織されたことにはじまる大津(大津百艘船)、豊臣秀次の朱印状に由来する八幡(近江八幡市)の3浦が、幕府の庇護の下で「諸浦の親郷」を称し、彦根藩領を除いた船を支配した。彦根藩領を除いた丸子船の数は、元禄6年(1693)で1,200艘余を数え、大きさは最大で400石を超えるものまであった。

これらの船を建造していた船大工は、大津と今堅田に集住していた。戦国時代、船は荷物輸送は勿論のこと、兵を運ぶ軍船としても利用されていた。このため、船の統制は重要と考えられ、豊臣秀吉により、船大工は大津と堅田(今堅田)のみで船を建造するように定められ、江戸時代となっても彦根藩領を除いて踏襲された。木造和船の需要は、明治時代まで続く。大津や今堅田の船大工(船屋)も家職として続けられていたが、戦後になると強化プラスチックなどに素材が変化し、木造和船を建造する船大工は廃れていった。大津では湖岸の埋め立てもすすみ、かつての船大工も姿を消したが、今堅田の出島には船大工が集まっており、家職としては衰退したが、船小屋や民家が独特の雰囲気を残しており貴重な景観となっている。

10 東海道と大津宿

【歴史文化ストーリーの概要】

京都から江戸へ向かう東海道は、逢坂山を越え、大津宿から膳所城下を経て瀬田橋（唐橋）を渡り、草津宿へと通じている。逢坂山や瀬田橋は、古来より交通の要衝として知られ、豊かな歴史や文化遺産に彩られている。大津宿は100の町からなっていたところから「大津百町」とも呼ばれ、天保14年（1843）の人口は、東海道の53の宿場の中では最大であった。琵琶湖の港町、園城寺の門前町としての性格を併せ持ちながら、現在の中心市街地へと発展していったのである。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔東国への関門—逢坂山—〕

東海道、小関越の道標（横木一丁目）、京道・伏見道の道標、月心寺（走井居）、大津絵、大津算盤製作道具（市）、蟬丸神社、逢坂山関趾碑、逢坂常夜灯、蟬丸神社、関蟬丸神社、石燈籠（関蟬丸神社・国）、蟬丸の伝説、小町塚の伝説、長安寺宝塔（国）、旧逢坂山トンネル、東海道線逢坂山トンネル、京阪電車京津線逢坂山隧道、東海道線蟬丸跨線橋

〔東海道の53番目の宿場—大津宿— ①宿場の名残〕

明治天皇聖跡（旧大塚本陣）碑、大津市道路元標、大津町古絵図（市）、大津絵踊り（市）、小舟入の常夜灯（市）、大津祭の曳山行事（国）
馬神神社：明治43年（1910）に長等神社に移されるまでは、東海道と北国海道（西近江路）の分岐点にあたる札の辻に祀られ、大津宿の鎮守として信仰を集めていた。

〔東海道の53番目の宿場—大津宿— ②大津の町屋（登録文化財）〕

大津魚忠、北川家住宅主屋・土蔵、石田家住宅主屋・洋館、桐畑家住宅主屋・離れ・土蔵、佐野家住宅主屋・土蔵、初田家住宅主屋・土蔵・塀、小川家住宅主屋・土蔵、森本家住宅主屋・門塀、豆信料亭棟・蔵・門塀、木村家住宅主屋・土蔵、中野家住宅主屋・離れ・土蔵、中野家住宅主屋、川嶋家住宅主屋・土蔵、太田家住宅主屋・塀、阪本屋店舗兼主屋、宮本家住宅主屋、旧多田家住宅主屋、奥村家住宅主屋、川村家住宅主屋、粹世主屋

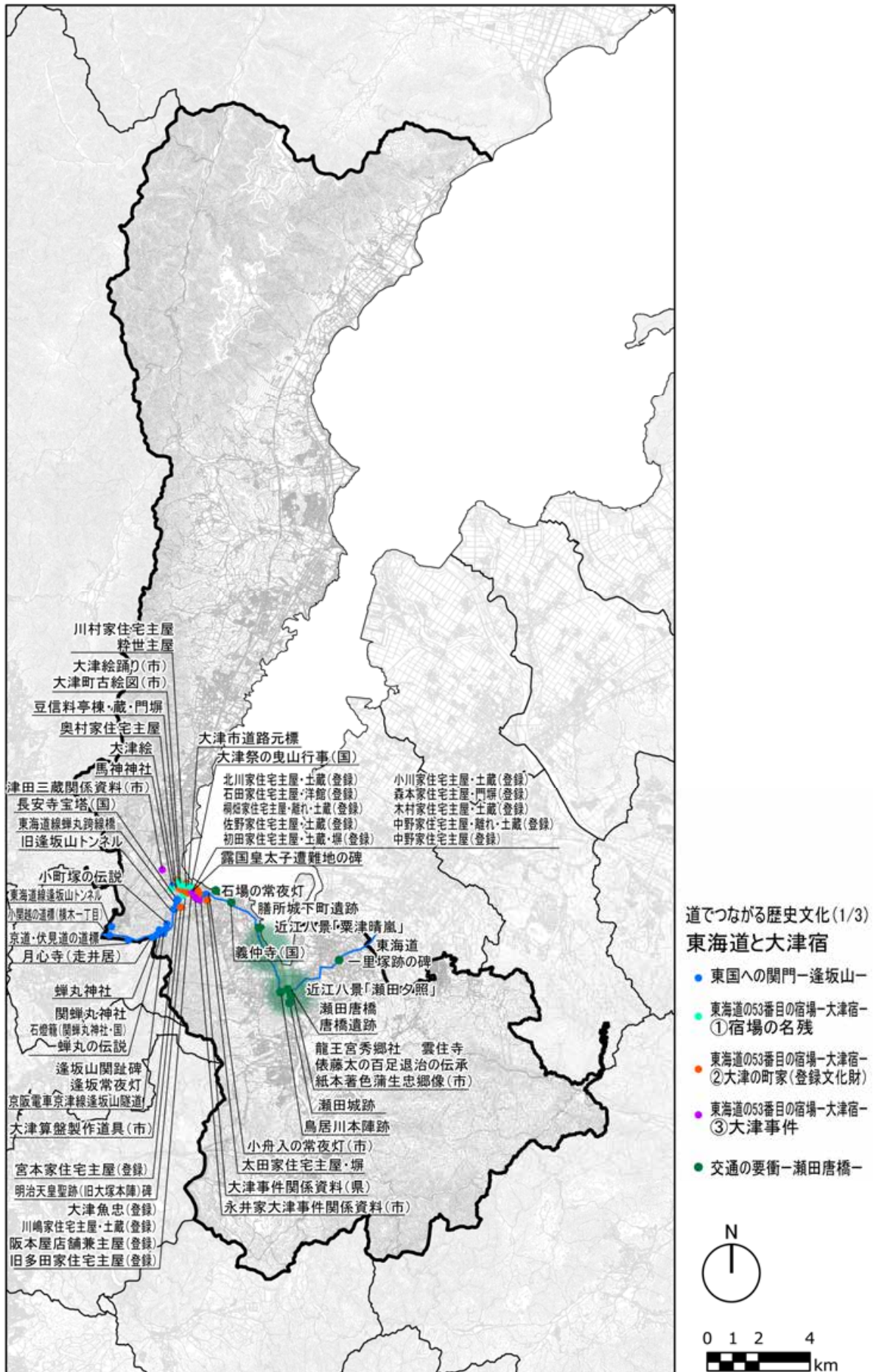
〔東海道の53番目の宿場—大津宿— ③大津事件〕

大津事件関係資料（県）、津田三蔵関係資料（市）、永井家大津事件関係資料（市）、露国皇太子遭難地の碑

〔交通の要衝—瀬田唐橋—〕

石場常夜灯、義仲寺（国）、膳所城下町遺跡、近江八景「粟津晴嵐」、鳥居川本陣跡、唐橋遺跡、瀬田唐橋、近江八景「瀬田夕照」、俵藤太の百足退治の伝承、龍王宮秀郷社、雲住寺、紙本著色蒲生忠郷像（市）、瀬田城跡、一里塚跡の碑

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

東国への関門—逢坂山—

「東海道」とは、元々は古代の行政区画のひとつであり、それらの国々を通る道の名前でもあった。それが、江戸幕府によって江戸を起点に五街道が整備されると、江戸と京都を結ぶ幹線の名前として定着した。江戸時代の東海道は、京都から山科を経て近江に入り、追分・大谷から逢坂山に至る。この間に、横木で北国海道（西近江路）に通じる小関越、追分で六地藏や伏見、あるいは奈良に通じる奈良街道（伏見街道）が分かれる。大谷にある月心寺は、平安時代の文献に見える旅人の喉を潤した走井の旧跡で、江戸時代には茶店があったが、昭和初年に画家の橋本関雪の邸宅として整備された。また江戸時代には、大谷・追分周辺で土産物として大津絵や大津算盤が売られていた。

逢坂山には、平安時代に逢坂関が置かれ、有事の際には関を閉じて警護がなされた。関所付近には関寺が建立され、坂上と坂下に「坂神」が祀られたところから関の守護神として関明神と呼ばれ、さらに琵琶の名手として知られる蝉丸の霊を合祀し、関蝉丸神社と呼ばれるようになった。芸能上達の神社として信仰が厚く、近年は関蝉丸神社芸能祭が開かれている。また、六歌仙の1人で絶世の美女とわれた小野小町が、年老いてから関寺辺りに住んだとの伝説から、関蝉丸神社下社の裏手には小町塚と呼ばれる石碑がある。なお、逢坂峠を戻った大谷にも江戸時代に勧請された、蝉丸神社が鎮座する。

逢坂山は大津から京都へ荷物を運ぶ際の難所であり、江戸時代には輸送の便をはかるために峠の切り下げが行われ、荷物を積んだ牛車のために車石が敷かれ、峠付近には常夜灯も建立された。近代になって、京都と大津を結ぶ鉄道が計画された際には、明治13年（1880）日本人技術者のみの手によって、逢坂山トンネルが開通している。大正10年（1921）東海道線の付け替えによってその役割を終えるが、昭和38年（1963）開通の名神高速道路蝉丸トンネルの京都側入口は、旧逢坂山トンネルを再利用している。逢坂山には、大正10年開通の現逢坂山トンネルに加え、京阪電車の逢坂山隧道（大正元年）、東海道線蝉丸跨線橋（大正10年）といった現役で活躍している近代化遺産が残されている。



写 5-29 逢坂山関址碑（大谷町）

東海道の53番目の宿場—大津宿—

逢坂山を越えると、大津宿の中心で高札場や人馬會所（人馬継問屋）の置かれた札の辻までの間は八町通と呼ばれ、本陣が2軒、脇本陣が1軒あった。御幸町の「明治天皇旧跡」碑の建つ場所が、かつての大塚本陣の跡である。この周辺の有様は、初代歌川広重の浮世絵『木曾海道六十九次之内大津』が描くように、正面に琵琶湖を望み、街道の両側には旅籠屋が連なり、米を積んだ牛車で賑わっていた。札の辻の十字路は、東に向かう東海道と、西に向かう北国海道（西近江路）の分岐点で、大正時代になって大津市の道路元標が置かれた。

写 5-30 『木曾海道六十九次之内大津』
(大津市歴史博物館蔵)

大津宿の人口は、天保14年（1843）で14,892人を数え、東海道の53の宿場中で最大であった。大津城の本丸跡に大津代官所と幕府の御蔵が置かれ、湖岸には関と呼ばれた船入が開かれて、諸大名の蔵屋敷も置かれた。また、札の辻で東海道から分かれた北国海道の通る園城寺（三井寺）の門前町

も、大津宿の一部であった。大津宿には現在も多くの町家が残し、その一部は登録有形文化財となり、町家を宿泊施設として活用する「宿場町構想」が進められている。

大津宿は、「大津百町」と呼ばれる100の町からなっており、その範囲は、南は逢坂峠より京都側の追分、東は東海道の松本村、西は北国海道の尾花川に及んでいた。宿場の役割は、宿泊施設の完備と、公用の人馬を次の宿場まで送り届けることにあり、東海道では100人の人足と100匹の伝馬を常備することが求められていた。大津宿からの継ぎ立ては、西は京都と伏見宿、東は草津宿と矢橋（草津市）の4ヶ所であった。矢橋は大津宿から琵琶湖を船で渡った先で、瀬田唐橋を渡る陸路に対し近道となっていた。矢橋の渡しこふないりの起点となったのは小舟入（中央四丁目）で、今も常夜灯が残されている。

東海道は、明治時代になっても主要な交通路として利用されていた。明治24年（1891）来日中のロシア皇太子ニコライが、京都へ戻る途中に警備の巡查津田三蔵つださんぞうに斬りつけられた「大津事件」の舞台も、旧東海道筋しもこからさきの下小唐崎町（京町二丁目、中央二丁目）であった。現場近くには、「此附近露国皇太子遭難之地」と刻まれた石碑が建っている。

交通の要衝—瀬田唐橋—

大津宿には東西に通る道が3本あった。北から湖岸沿いの浜通り、中町通り、山手の京町通りで、京に通ることから名前の付いた京町通りが東海道のことである。この3本の通りは、大津宿の東の石場で合流する。東海道がはじめて琵琶湖と出会う石場は、鳥居川、月輪、矢倉（草津市）とならんで草津宿との間にあった立場たてば（休憩場所）であり、ここからも矢橋へ船が通い、常夜灯が建てられていた（現在は、琵琶湖ホール横に移設）。石場から先の東海道は琵琶湖に沿って通じており、源みなもと（木曾）義仲よしのなと松尾芭蕉まつおぼしやうの眠る義仲寺ぎちゆうじ、膳所城下町、近江八景のひとつ「栗津晴嵐あわづのせいらん」で知られる松並木を経て鳥居川に至り、直進すれば石山寺に至るが、東海道は道を東にとる。この間は、江戸時代には膳所城下を除いては田園風景であったが、現在は住宅街、工場、商店街が連なり、栗津の松並木も数本の松を残すに過ぎない。

鳥居川の前で、瀬田川を渡る。瀬田川は、古来より軍事・交通の要衝であり、壬申の乱、源平の争乱、南北朝の内乱などで、しばしば合戦の舞台となった。現在は中島を挟んで大橋と小橋からなり唐橋と呼ばれて親しまれているが、2本の橋の初見は織田信長おだのぶながによる架け替えからである。昭和62年（1987）から実施された瀬田川浚渫工事で、現地から約80m下流で7世紀頃に架けられたと思われる橋の遺構が見つかり、古代の東海道のルートや橋の構造を知るうえで貴重な発見となった。現在の唐橋はコンクリート製となっているが、欄干の擬宝珠には江戸時代に幕府の命によって膳所藩が架け替えたことを示す刻銘が残されている。唐橋は俵藤太たわらのとうたの百足退治の伝説や、近江八景のひとつ「瀬田夕照せたのせきしやう」の舞台となり、江戸時代には付近の名産としてセタシジミや夕照酒が知られていた。



写 5-31 瀬田唐橋

唐橋を渡った先には、俵藤太と竜神を祀る龍王宮秀郷社りゅうおうぐうひでさとしや、百足退治伝説の遺品を伝える雲住寺うんじゆうじ、江戸時代には膳所藩主の別邸で瀬田城跡と伝える臨湖庵跡りんこあん（以上、瀬田二丁目）などが残る。東海道は直進して近江国一之宮の建部大社へ向かうが、石造の大鳥居の手前で北に曲がる細い道がある。これが江戸時代の東海道で、この先は、古代の近江国府へ通じる道と重なりながら、草津宿へと向かっている。その途中に建つ「一里塚址」の碑（一里山二丁目）は、市内の東海道にあった3カ所の一里塚跡の中で、唯一の旧跡である。

11 北国との交流の道

【歴史文化ストーリーの概要】

琵琶湖の西岸には、京都と北国を結ぶ2本の道が通っていた。大津宿で東海道と分かれて琵琶湖の西岸に沿って通じる北国海道（西近江路）と、京都の八瀬・大原から花折峠を越えて比良山地と丹波山地の間を抜ける若狭街道である。湖岸と谷間という好対照の道は、和邇今宿と途中の間で結ばれ、人ともものが行き交い様々な文化が交流する場であり、白鬚神社や明王院への参詣の道でもあった。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔湖岸を進む北国海道〕

北国海道（西近江路）、小関越の道標（横木一丁目）、峠の地蔵（園城寺町）、石造小関越道標（市）、下阪本の町並み、北国海道の道標（酒井神社、坂本六丁目、北比良）、仰木道のエノキ、小野神社飛地境内社道風神社本殿（国）、小野神社境内社篁神社本殿（国）、榎の顕彰碑（一里塚跡）、木戸の集落、北小松の町並み、小松宿本陣跡

〔北国海道の名勝〕

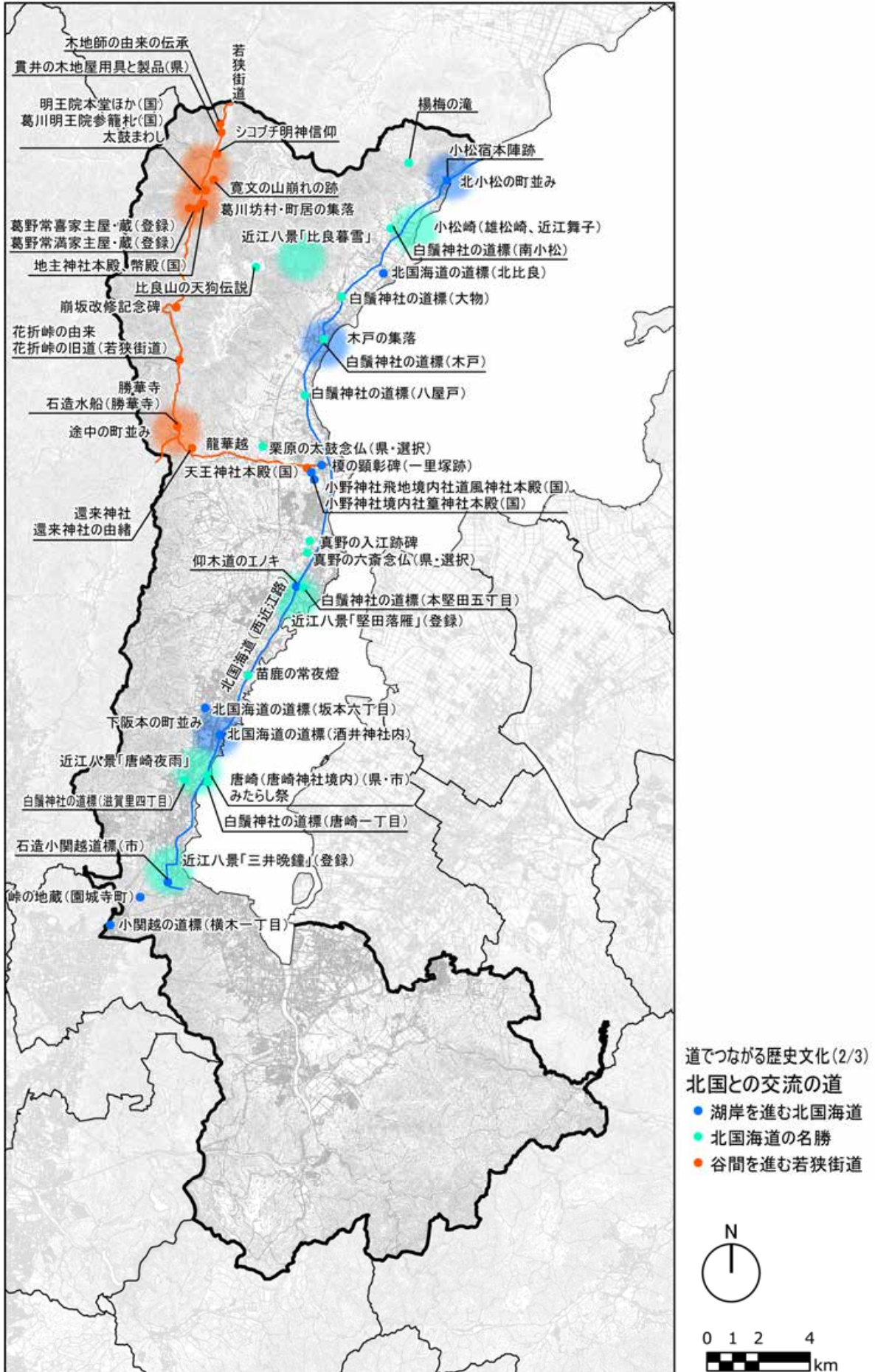
近江八景「三井晩鐘」（登録）、白鬚神社の道標（滋賀里四丁目、唐崎一丁目、本堅田五丁目、八屋戸、木戸、大物、南小松）、唐崎（唐崎神社境内）（県・市）、みたらし祭、近江八景「唐崎夜雨」、苗鹿の常夜灯、近江八景「堅田落雁」（登録）、真野の入江跡碑、真野の六斎念仏（県・選択）、栗原の太鼓念仏（県・選択）、小松崎（雄松崎、近江舞子）、楊梅の滝、比良山の天狗伝説、近江八景「比良暮雪」

〔谷間を進む若狭街道〕

途中の町並み、勝華寺、石造水船（勝華寺）、龍華越、還来神社、還来神社の由緒、天皇神社本殿（国）、花折峠の由来、花折峠の旧道（若狭街道）、崩坂改修記念碑、明王院本堂ほか（国）、葛川明王院参籠札（国）、地主神社本殿（国）、地主神社幣殿（国）、葛野常喜家主屋・蔵（登録）、葛野常満家主屋・蔵（登録）、葛川坊村・町居の集落、シコブチ明神信仰、貫井の木地屋用具と製品（県）、木地師の由来の伝承、寛文の山崩れの跡

太鼓まわし：7月18日の夜、明王院で行われる。参籠中の回峰行者が、本堂外陣で廻される太鼓に飛び乗り、合掌して向かい側に飛び降りる。明王院を開いた相応和尚が、葛川の三の滝で修行中に不動明王を感得した故事に由来する。

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

湖岸を進む北国海道^{ほっこくかいどう}

奈良に都があった時代の北陸道は、山科から小関越を通過して大津に出て、大津宮の中心線を通り北進していた。それに対し、江戸時代の北国海道（西近江路）は、大津宿の札の辻から東海道とは反対の道を取り、園城寺の門前を抜けて琵琶湖に出て、湖岸を北上していた。米原（米原市）から琵琶湖の東岸を北上する「北国街道」（東近江路）に対して「北国海道」（西近江路、「海道」の名は沿線に点在する道標に刻まれている）と呼ばれた。北国海道は、越前敦賀までの間に、衣川、和邇、木戸、小松（北小松、以上大津市）、河原市、今津（高島市）の6宿があり、5人5疋の人馬が常駐し、人や荷物の継ぎたてを行っていた。今津からは、若狭小浜への道が分かれていた。

坂本城下町の歴史を持つ下阪本、かつての宿場町であった和邇・木戸・北小松には、宿場の名残をとどめる遺構や古い町並みが残されている。和邇中と今宿の境界に位置する交差点には、「顕彰碑」と刻まれた石碑が建てられている。ここは、後で触れる若狭街道からの道が合流する場所で、かつては榎^{えのき}が植えられており、一里塚の跡とも天皇神社の神木とも言われる。なお、道を戻った衣川と堅田の間でも仰木への分かれ道に榎が植えられており、仰木道の榎と呼ばれて一里塚の役目を果たしていたという。和邇から先の



写 5-32 下阪本の町並み

北国海道は山手の道と湖岸の道の2ルートがあったが、山手の道に位置する木戸は、樹下^{じゅげ}神社の前面に開けた扇状地に集落が広がる、独特の景観をとどめている。一方、湖岸に接する北小松で棒状の一石を横にして基礎とする建物が多く見られるのは、かつて石の産地であったことを物語っているという。

北国海道の名勝

北国海道には名勝が多い。唐崎には、日吉大社西本宮の祭神^{おおなむちかみ}大己貴神が大津宮遷都にあたり大和からこの地に上陸し、日吉社に向かったとの伝承がある。平安時代には「七瀬^{せのはらえしよ}祓所」のひとつに数えられ、現在も7月28・29日の両日に「ちの輪くぐり」の神事が行われ、近江八景「唐崎夜雨」の舞台でもあった。同じく歌枕として知られた「真野入江」は入江の姿は大きくかわり、田の中に「真野入江」碑が建つのみである。しかし、真野の地には六斎念仏^{ろくさいねんぶつ}が今に伝わっている。京都で盛んに行われた六斎念仏は、室町



写 5-33 唐崎

時代の終わりごろに京都から近江、若狭へ伝播したと言われている。そのため、街道に沿った地域で六斎念仏が受け継がれてきた。真野中村・真野沢の六斎念仏と栗原の太鼓念仏、そしてかつて六斎念仏が伝承されていた下阪本や雄琴、千野などにも、街道を通過して伝わったと考えられる。

南小松にあるJR湖西線の駅名は、近江舞子駅である。これは明治30年代に、その景勝を兵庫県舞子と対比させて、近江舞子と呼ばれるようになったことに由来する。内湖のある景勝地は、古くは雄松崎と呼ばれ、天皇即位後の大嘗祭の屏風歌に詠まれるほどの歌枕で、湖岸の名勝として知られていた。昭和に入ってから、琵琶湖の海水浴場として大いに賑わった。北小松集落の西北にある楊梅^{ようばい}の滝も古くから名勝と知られ、比良山にまつわる天狗の伝承も残している。そして、何よりも比良山系にかかる雄大な冬景色は、近江八景「比良暮雪^{ひらのぼせつ}」の舞台となっている。

北海道は、信仰の道でもあった。高島市鶴川に鎮座する白鬚神社は、延命長寿の神として崇敬を集めているが、白鬚神社へと参詣者を導く道標が、滋賀里四丁目、唐崎一丁目、本堅田五丁目、八屋戸、木戸、大物、南小松に残されている。判読できる刻名から天保7年（1836）に京都の寿永講が建立した。また、街道沿いには常夜灯も数多く見られる。なかでも弘化4年（1847）の苗鹿常夜灯は、北海道沿いでは最大の大きさをほこる。伊勢講のひとつ苗鹿講の建立になり、基壇には堅田・雄琴・和邇・仰木など周辺の講元や講名が刻まれ、その広がりを知ることができる。なお、この常夜灯は国道の拡幅工事によって、当初の位置から道の反対側に移築されている。

谷間を進む若狭街道

琵琶湖岸を北上する北海道に対して、比良山地と丹波山地の間を安曇川に沿って進む若狭街道は、八瀬、大原から途中越を経て、花折峠の難所を越えて葛川、朽木から保坂（高島市）で、今津から小浜に通じる「九里半街道」に合流する。若狭でとれた鯖を京都へ運んだ街道として「鯖街道」とも呼ばれているが、近年の俗称である。天台回峰行の聖地である葛川の明王院へ向かう道であり、京都と若狭を結ぶ最短ルートであった。室町時代には京都を迫られた足利将軍がこの道を通って朽木に逃れ、元亀元年（1570）



写 5-34 明王院への参道

越前の朝倉氏を攻めていた織田信長が浅井長政の離反にあつて京都へ逃げ帰ったのもこの道である。

山城から近江に入った若狭街道は、途中町の三叉路で北海道へ通じる道が分かれる。三叉路には、かつて安永7年（1778）建立の道標があり、九里半街道との合流点である保坂にも同じ道標が残る。途中町の勝華寺は明王院へ参籠する行者が準備を整える場所で、弘長2年（1262）の銘を持つ石造水船が残る。途中町から北海道へ向かう道は、和邇川を渡って還来神社の前から龍華を経て和邇に通じている。古くは龍華越と呼ばれ、天安元年（857）、逢坂・大石とともに龍華関が置かれた。

途中町からの若狭街道は山道を登って行くが、最高峰は花折峠と呼ばれる。明王院への参詣者が仏前に供える檜を手折ったところから、その名が付いたといわれている。昭和50年（1975）に花折トンネルが開通したことにより交通の便が図られたが、今もトンネルの前後には峠へ通じる旧道が残されている。トンネルを抜けて葛川に入ると近代的な道を通じる一方で、安曇川沿いには旧道が残る。葛川坂下町の葛川橋付近には、文政6年（1823）葛川谷の8カ村により新道が開かれたことを示す石碑があり、江戸時代から地域住民によって道の整備に不断の努力が払われていたことが知られる。

葛川の中心は、坊村の明王院と地主神社で、毎年7月には天台回峰行の行者が参籠することで知られている。鎌倉時代を最古に、参籠の際に持参した参籠札が残されており、その中には足利義満や日野富子のもも見られる。地主神社の前には行者の手助けをする葛野常喜・葛野常満の主屋が残り、明王院への参道は昔ながらの面影を伝えている。葛川では安曇川にそって集落が点在しているが、シコブチ明神を開拓の祖神とする信仰があり、坂下・坊・梅ノ木にはシコブチ明神を祀る社がある。また、貫井はろくろにより木製品を作る木地師の村として知られており、貫井の木地屋用具と製品が県の有形民俗文化財の指定を受けている。

最後に触れておきたいのが、自然の脅威の痕跡である。寛文2年（1662）の大地震は、明王院で本堂や石舞台を破壊し、梅ノ木・町居の両村は土砂崩れによって埋没するという大きな被害をもたらした。現在も町居の東岸の山手には山崩の跡が残されている。

12 山越の道と参詣の道

【歴史文化ストーリーの概要】

大津市は、主要街道が複数通り、また奈良や京都に近い立地から、都とつなぐ多くの間道が見られる。特に比叡山を越えて平安京とつながる道は、兵火などの際に都から人、物が避難してくる道となっており、市内各所に都の文化を持ち込むルートであった。江戸時代になると、延暦寺や園城寺、西国三十三所観音巡礼をはじめとする社寺への参詣が盛んとなる。これらの旅人を導く道標も数多く残されており、庶民の信仰や活動を知ることができる。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔官道に準じる「田原道」〕

宇治田原越、関津遺跡、関津城跡

〔比叡山を越える道〕

山中越、山中城跡、石造阿弥陀如来坐像（志賀の大仏）（市）、石造阿弥陀如来坐像（市）、山中町の重ね石、山中町の町並み、無動寺道の道標（山中町）、伊香立越、新知恩院、仰木越、大原・横川の道標、大原ほかの道標、白鳥越、壺笠山城跡、青山城跡

〔参詣道と道標 ①比叡山へ登る道〕

大津側：本坂、根本中堂の道標（坂本四丁目）、横川道（飯室谷）、元三大師道の道標（千野一丁目）、無動寺道（坂本）、無動寺道の道標（坂本二丁目）

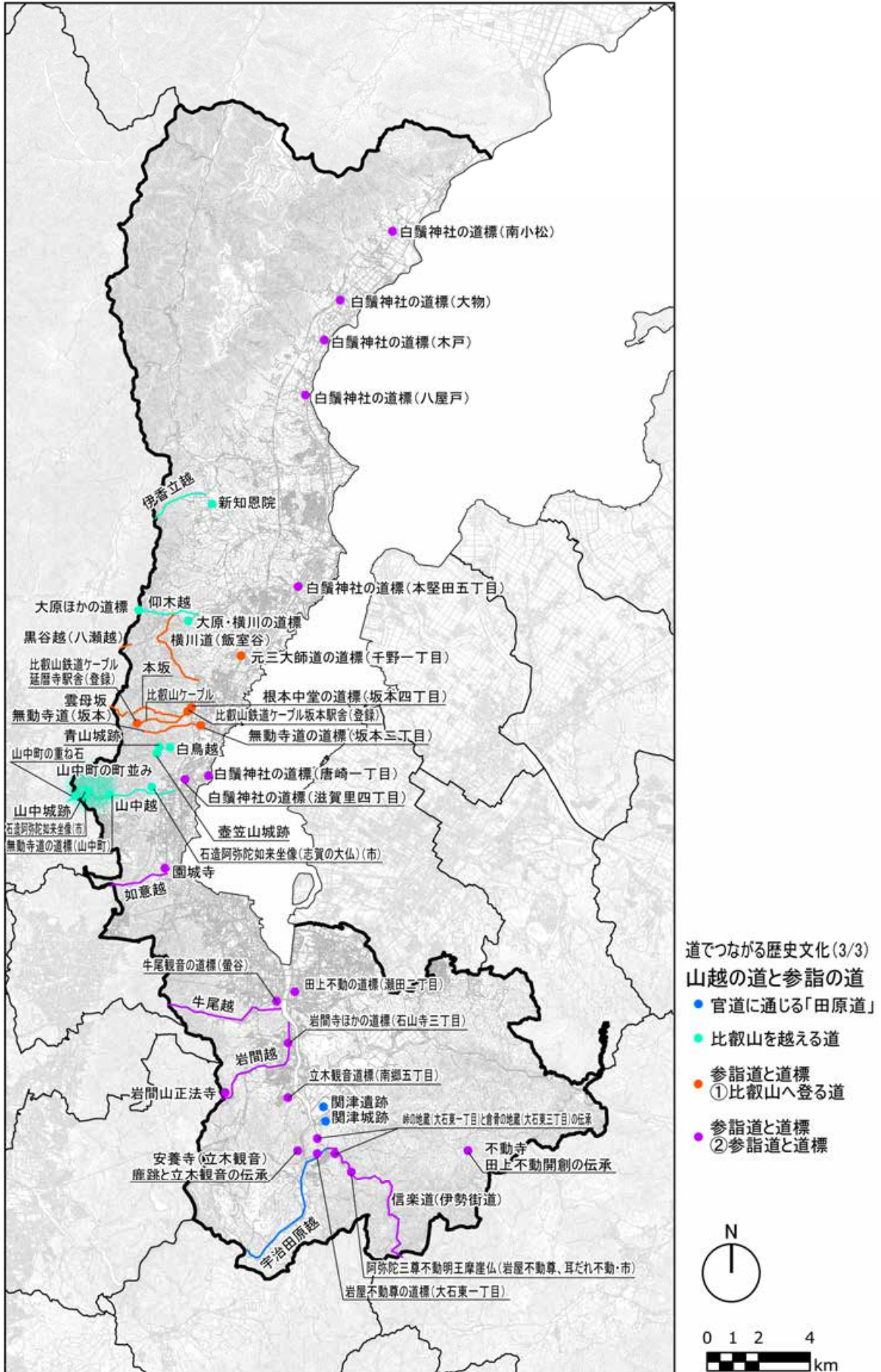
京都側：雲母坂、黒谷越（八瀬越）

比叡山鉄道ケーブル坂本駅舎（登録）、比叡山鉄道ケーブル延暦寺駅舎（登録）、比叡山ケーブル

〔参詣道と道標 ②参詣道と道標〕

園城寺、如意越、牛尾越、牛尾観音の道標（螢谷）、岩間山正法寺、岩間越、岩間道ほかの道標（石山寺三丁目）、不動寺、田上不動の道標（瀬田二丁目）、田上不動開創の伝承、安養寺（立木観音）、立木観音の道標（南郷五丁目）、鹿跳と立木観音の伝承、阿弥陀三尊不動明王磨崖仏（岩屋不動尊、耳だれ不動・市）、岩屋不動尊の道標（大石東一丁目）、信楽道（伊勢街道）、峠の地藏（大石東一丁目）と倉骨の地藏（大石東三丁目）の伝承、白鬚神社の道標（滋賀里四丁目、唐崎一丁目、本堅田五丁目、八屋戸、木戸、大物、南小松）

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

官道^{かんどう}に準じる「田原道」^{たわらみち}

江戸時代の天津市は、東海道、北国海道^{ほっこくかいどう}（西近江路）のふたつの街道が通る交通の要衝であった。その歴史は、古代の東山道、東海道、北陸道にさかのぼる。また、平安京遷都により琵琶湖を利用した水運も活発で、平安時代以来、都への物資が日本海側の敦賀や小浜で荷揚げされ、琵琶湖を通過して大津や坂本に運ばれるなど重要な地点であった。坂本城や大津城は、水運を抑える目的で時の権力者によって築城されている。

しかし、天津市を通る道は、このような歴史上に知られた道ではなかった。江戸時代に宇治田原越と呼ばれた街道は、大石小田原町から禪定寺峠^{ぜんじょうじ}を越えて宇治田原町へ至る。この道は、古代より大津と奈良（平城京）をつなぐ主要ルートで、古くは「田原道」と呼ばれていた。天平宝字4年（674）の藤原仲麻呂^{ふじわらのなかまろ}（恵美押勝^{えみおしかつ}）の乱では、官道（東山道）を通る反乱軍に対して、朝廷軍がこの道を通っていち早く瀬田に着き、勢多橋を焼き落として反乱軍の渡河を妨げたと記録されている。近年、関津遺跡（関津一丁目）



写 5-35 「田原道」跡
（滋賀県教育委員会提供）

の発掘調査によって8世紀から9世紀にかけての道路跡が見つかった。これは道路敷の幅18m、路面の幅15mで、総延長315mが直線に敷設されていた。これが古代の「田原道」とみられ、主要官道と比較しても引けをとらない立派な道がつけられていたことがわかる。

平安京に都が移されて以降、「田原道」の重要性はやや低くなるが、それでも大津から宇治や奈良への間道として重視された。天安元年（857）、逢坂関に加え新たに龍華、大石に関を設置し三関として平安京の守りを固めている。この大石の関の位置が、「田原道」のルート上に位置する、関津峠ではないかと考えられている。関津峠には、室町時代になると道の押さえとして関津城（関津三丁目）が築かれている。

比叡山を越える道

延暦13年（794）都が平安京に遷されると、比叡山を挟んで東に位置する天津市との間で、峠を越えて行き来する道がいくつも見られる。史料の上で最初に確認できるのが、滋賀里から志賀峠を越えて山中町へ、さらにそこから京都の北白川へと至る、山中越である。弘仁6年（815）嵯峨天皇が唐崎に行幸した際にはこの道を通っており、途中の崇福寺で永忠^{えいしゅう}が天皇に茶を献じている。「志賀の山越」「志賀の今道^{いまみち}」といわれて歌枕のひとつとなり、室町時代には坂本（下坂本）から京都へ荷物を運ぶ主要な交通路となっていた。坂本と山中には運送業者である馬借^{ばしやく}が住み、山中には延暦寺の支配する山中関が置かれていた。

滋賀里の集落から少し道を進んだところには「志賀の大仏」とよばれる石仏が、山中町の西教寺にも同様の石仏（阿弥陀如来）があり、いずれも鎌倉時代の作で、市指定文化財となっている。近江と山城の境には地藏尊を彫った「重ね石」が、北白川にも鎌倉時代の石仏があり、いずれも道中の安全を祈願したものといわれている。なお、現在の山中越といわれる道（主要地方道下鴨大津線）は、永禄13年（1570）宇佐山城^{うさやま}の築城にあたって新たに開かれた道である。

比叡山を越える道は、江戸時代になると「〇〇越^{ごえ}」の名称で、史料に登場してくる。以下、主要な峠道を紹介していく。



写 5-36 志賀の大仏（滋賀里町甲）

「伊香立越」は、伊香立上在地町から京都市左京区大原小出石町に至る道である。元禄10年(1697)頃成立の地誌『淡海録』に、その名が見られる。伊香立下在地町に所在する新知恩院は、京都東山の知恩院の僧侶が応仁の乱を避けて宝物とともに避難したことにはじまるが、この際に通ったのがこの伊香立越であったといわれている。

「仰木越」は、仰木から京都市左京区大原上野町に至る道である。古くは「篠峰道」と称しており、『太平記』にも登場する。観応2年(1351)足利尊氏と不和となった足利直義はこの道を通って、北国から鎌倉へ落ち延びている。上仰木の集落には、「右・京大原 左・元三大師道」の道標が、また仰木峠にも「(矢印) 大原道・(矢印) 仰木道 (矢印) 横河元三大師道」の道標が残る。

「白鳥越」は、穴太から比叡山無道寺の南を経て京都市左京区の修学院に至る道である。『太平記』では、足利尊氏軍が後醍醐天皇軍と白鳥で攻防した様子が記されており、この頃には道として開かれていたとみられている。また、この道沿いには安土・桃山時代、壺笠山城(坂本本町)や青山城(坂本本町)が築かれている。壺笠山城は、織田信長と浅井・朝倉の連合軍との戦の際に、浅井・朝倉方の陣城として見られる。やはり、京都と坂本を結ぶルートが重要視されたものであろう。現在も壺笠山山頂部には、曲輪や虎口、石垣や石段なども見られる。

参詣道と道標

比叡山を越える多くの道を紹介したが、「〇〇坂」「〇〇道」と呼ばれた延暦寺へ登る道も、大津側・京都側から数多くあった。坂本からの「本坂」、京都修学院からの「雲母坂」が、それぞれの表参道である。山上の延暦寺へ参詣する道、荷物を運ぶ道であり、平安時代には僧兵が日吉社の神輿を担いで強訴のために下り、南北朝時代には延暦寺に籠もった南朝方とこれを攻撃する北朝方が戦火を交えた道でもあった。江戸時代になると、横川元三大師堂や祖師の霊場などへの参詣者も利用するようになるが、参詣の道は明治以降大きく様変わりする。まず、本坂を上下するための駕籠が整備され、昭和2年(1927)に日本最長の坂本ケーブルが、昭和33年には比叡山ドライブウェイが開通し、参詣者は徒歩から、駕籠、ケーブル、車と手段を変えていった。

延暦寺以外にも、市内では社寺参詣のための道が整備され、道標が各地に残されている。園城寺(三井寺)から如意ヶ岳を越えて京都市左京区の鹿ヶ谷に至る道は、「如意越」と呼ばれている。古くは平安時代の文献にも登場する道であるが、江戸時代には園城寺への参詣道のひとつとして京都で出版された書籍に紹介されている。「牛尾越」は国分から牛尾山を経て京都市山科区へ至る、牛尾観音の参詣道である。現在この道は東海自然歩道になっており、螢谷に道標が残されている。「岩間越」は、石山寺(石山寺一丁目)から岩間山正法寺(石山内畑町)を経て京都市伏見区の醍醐寺へと至る道で、西国三十三所観音巡礼の道として開かれたものである。この道にはいくつも道標が建てられており、多くの参詣があったことが想像される。不動寺(田上森町)へ参詣する「不動道」でも、瀬田唐橋の東詰に移築された道標があり、田上・上田上両学区内にも数多くの道標が建てられている。また、立木観音(石山南郷町)や岩屋不動尊(通称「耳だれ不動」、大石富川町)など、霊験を求めて訪れる参拝者のための道標がある。なお、岩屋不動への道は、東海道から関津峠を越えて岩屋不動から信楽に通じていることから信楽道(伊勢街道)と呼ばれ、信楽へは建部大社の参道から上田上の平野、牧、大鳥居を経由する道(田上道)もあった。山中越で京都からやってくる参詣者を高島市の白鬚神社へ導くための道標が北国海道(西近江路)にそって市内に7カ所ある。このほかにも、様々な道標が市内各所にみられ、一部には道路工事等によって移動したのものもあるが、地域の歴史を語る貴重な財産として今に残されている。



写5-37 元三大師道の道標
(坂本六丁目)

13 水と技

【歴史文化ストーリーの概要】

豊かな水をたたえる琵琶湖の景観は、近江八景を代表とし、古くから名勝として人々に親しまれてきた。その雄大な風景と閑静な土地に注目した人々は、湖畔に別荘やホテルを建設する。水の恵みは琵琶湖疏水を通して京都へも運ばれ、水運、灌漑、発電など、近代日本の発展に寄与した。一方で、自然は災害を引き起こす。度重なる洪水を防ぐために四ツ子川の百間堤ひゃっけんづつみや瀬田川の南郷洗堰、上田上桐生のオランダ堰堤など水防の技が活かされた。自然を取り入れ、自然と共生する歴史文化が大津市には根付いている。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔風光明媚な琵琶湖の景観〕

近江八景「堅田落雁かたたのらくがん」（登録）「三井晩鐘みいのばんしょう」（登録）「比良暮雪ひらのぼせつ」「唐崎夜雨からさきのやう」「栗津晴嵐あわづのせいらん」「瀬田夕照せたのせきしょう」「石山秋月いしやまのしゅうげつ」、唐崎（唐崎神社境内）（県・市）、居初氏庭園（国）、楊梅の滝ようばい、旧伊庭家住宅（住友活機園いぼ）洋館ほか（国）、蘆花浅水荘本屋ほか（国）、蘆花浅水荘庭園（市）、旧琵琶湖ホテル（市）

〔水の恵み〕

琵琶湖疏水（国）、大戸川発電所・水路だいどがわ

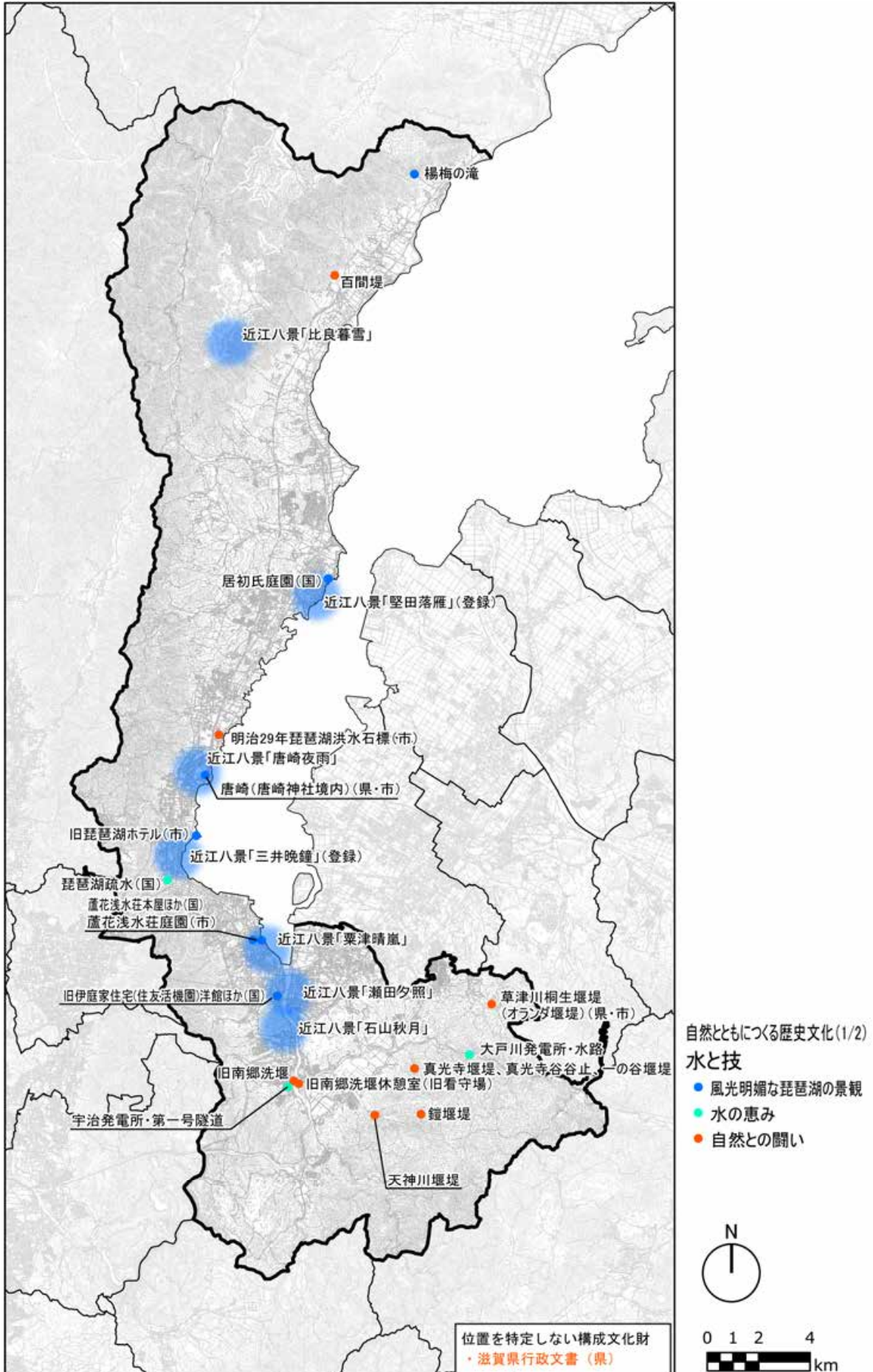
宇治発電所・第一号隧道：琵琶湖の水を利用して水力発電を行うため、瀬田川の水を南郷一丁目の取水口から取り込み、11kmに及ぶ水路と隧道を掘削して建設。大正元年（1912）竣工

〔自然との共生〕

明治29年琵琶湖洪水石標（市）、旧南郷洗堰、旧南郷洗堰休憩室（旧看守場）、百間堤、草津川桐生堰堤（オランダ堰堤）（県・市）、鑑堰堤よるい、天神川堰堤、真光寺谷堰堤、真光寺谷谷止、一の谷堰堤

滋賀県行政文書（県）：滋賀県が地方行政を行うために作成、受理した公文書。田上山の砂防事業、琵琶湖疏水の建設など、近代の水防関係資料も含まれる。

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

風光明媚な琵琶湖の景観

大津市は北から比良、比叡などの山地や丘陵が続き、琵琶湖に囲まれた自然豊かな都市である。豊かな水をたたえる琵琶湖の景観は、古くから名勝として人々に親しまれてきた。15世紀には京都の文人たちによって中国湖南省北部にある洞庭湖付近の名勝瀟湘八景になぞらえて、近江八景が見出される。江戸時代はじめごろには、当時の文人たちの選定によって定着し、現行の近江八景（比良暮雪、堅田落雁、唐崎夜雨、三井晩鐘、粟津晴嵐、矢橋帰帆、瀬田夕照、石山秋月）となった。近江八景は初代歌川広重による浮世絵などで親しまれ、現在もその景観を伝えるものとして「堅田落雁」と「三井晩鐘」が登録記念物となっており、国名勝である堅田の居初氏庭園は琵琶湖を借景とした名園として知られる。また、北小松には、室町時代から名勝として知られ、室町幕府第13代将軍足利義輝による命名と伝わる楊梅の滝がある。楊梅の滝は、江戸時代の『伊勢参宮名所図会』において「江州第一の滝」と紹介され、比良の滝、遥拝の滝とも言われた。落差約72mは県下一を誇り、湖上からも望むことができる。

明治時代以降、琵琶湖の雄大な風景と閑静な土地が注目され、別荘やホテルの建設が行われるようになる。明治37年（1904）、眼下に瀬田川、遠くに比叡・比良山系や琵琶湖を望む高台に建てられた旧伊庭家住宅（住友活機園、田辺町）は、住友本店の総理事を勤めた伊庭貞剛が、引退後の住居として建築した建物で、平成14年（2002）に重要文化財に指定された。2階建ての洋風住宅と平屋建ての和風住宅からなり、洋風と和風を組み合わせた住宅の県内唯一の例である。また、帝室技芸員の画家山元春挙は生まれ育った膳所の地に別邸として蘆花浅水荘（中庄一丁目）を建築する。これは大正時代、琵琶湖畔に営まれた別荘建築としての形態を庭園とともによく保持し、滋賀県を代表する近代和風建築として重要文化財に指定されている。そして、琵琶湖を借景とした庭園の東端には船着場が残り、もとは琵琶湖に直面して、対岸の三上山をはじめとする湖東・湖南の山々を望んでいた。しかし現在は庭園先の湖岸を埋め立てて道路が建設されたことにより、残念ながら往時の景観は失われている。昭和9年（1934）に竣工した旧琵琶湖ホテル（柳が崎）は、景勝地である滋賀県にはじめて建設された外国人観光客のための迎賓館的ホテルであった。鉄筋コンクリート造でありながら、意匠は和風で社寺建築を思わせる造りになっている。平成12年に市の文化財に指定され、ホテルとしての営業は終えたが、文化施設として親しまれている。



写 5-38 旧伊庭家住宅（住友活機園）洋館（田辺町）

水の恵み

水の恵みは、江戸時代までは灌漑用水としての利用が中心であったが、明治時代になると水力発電や物資運搬など多目的に利用されてきた。そのひとつが、明治18年（1885）に着工し、同23年に完成した琵琶湖疏水（三井寺町他）である。琵琶湖疏水は、三保ヶ崎から京都の蹴上までの約9kmに水路を掘削したもので、途中には3本の隧道（トンネル）が通る。平成8年（1996）には、近代化遺産として疏水に関する史跡12ヶ所が国史跡に指定され、そのうち大津



写 5-39 琵琶湖疏水・第一隧道入口

側の史跡は、第一隧道の東西出入口、第一・第二豎坑の4ヶ所である。第一隧道の出入口には、意匠を凝らした石造洞門が配置されており、東口には、当時の政府の主要メンバーであった伊藤博文が揮毫した扁額「氣象萬千」が、西口には山県有朋が揮毫した扁額「廓其有容」が掲げられている。琵琶湖疏水は、輸送用の船を通すとともに、京都洛北農村の灌漑用水として利用された。また、疏水を利用した蹴上発電所の水力発電は、日本最初の市街電車（京電）を生み出すなど、琵琶湖疏水が近代日本の発展に果たした役割は非常に大きい。

明治時代以降、大津では水力発電所として、明治43年に竣工した大戸川発電所と水路（上田上牧町）、大正3年（1914）に竣工した大鳥居発電所（上田上大鳥居町）がある。とくに煉瓦造の大戸川発電所主屋は、設立当時の概観を今に伝えており、稼働中の県下発電所中唯一の煉瓦造として貴重な建築である。また、瀬田川の旧南郷洗堰の上流約360mの地点から水を引いている宇治発電所も、琵琶湖の水を利用した施設といえよう。

自然との共生

琵琶湖は美しく、恵みをもたらす一方で、水害ももたらした。江戸時代から幾度も水害が発生し、なかでも明治29年（1896）に起こった洪水は、過去に例を見ないほど未曾有の水害となり、県内の琵琶湖に面する地域はあますところなく浸水した。下阪本四丁目の酒井神社に残る明治29年琵琶湖洪水の水位を示した石標には、下阪本村において記録された最高水位388cmが刻まれている。水害の起こる要因のひとつに、琵琶湖から流出する河川が瀬田川ひとつということにあった。江戸時代から、洪水対策として瀬田川の川底に溜まる土砂を取り除く瀬田川浚えが行われてきたものの、解決にはいたっておらず、明治29年の洪水を契機に瀬田川の浚渫ならびに洗堰の工事が本格化する。明治38年に完成した南郷洗堰は、総延長約173mのレンガ造り、約3.6m間隔に31本の堰柱が取り付けられた。堰柱に角材を落としたり、引き上げたりすることで、瀬田川の流量が調節できるようになり、琵琶湖周辺の水害・渇水に効果を上げた。昭和36年（1961）には、下流に新たな洗堰が作られ、現在も機能している。

水害は琵琶湖だけで起こるものではない。琵琶湖へと注ぐ河川や上流にある山でも水害は生じた。比良山麓では、大雨が降ると比良山系の急斜面を下る雨水が、普段は流れの少ない川からあふれ、氾濫を起こした。そのため、江戸時代から何度も堤が作られ、洪水対策がなされてきた。嘉永5年（1852）の水害のあと、大物では百間堤と称される巨石を用いた石堤が、四ツ子川の本流に沿って上流部からの土石流を受け流すように延長約200m、幅18mにわたって築かれた。百間堤は、大物の集落の生活用水の取水施設としてもいまなお機能している。

田上山系から流れ出る大戸川もまた、洪水の頻発する河川であった。田上山系は、藤原京・平城京の造営、東大寺の建立などで大量の木材が切り出され、その後も伐採が続き、樹木がまったくない山となっていた。このため、瀬田川や大戸川へ土砂が流入し、水害の要因となっていたことから、明治になって全国初の内務省直轄事業として砂防工事が行われた。明治22年に完成した上田上桐生町の草津川上流にある砂防ダムは、オランダ人技師デ・レーテが指導し、日本人が設計したこと、オランダ堰堤と呼ばれて文化財に指定されている。また、大戸川へ土砂流入を防ぐため田上森町の天神川上流に築かれた鑿堰堤もまた、デ・レーテの指導を受けて同年に作られた砂防ダムである。天神川では他にも明治、大正、昭和と3代にわたる堰堤が、同じく大戸川支流の吉祥寺川にも明治時代の石積み堰堤があり、いずれも現役の堰堤として機能している。



写5-40 百間堤（大物）

14 里山の暮らしと生業

【歴史文化ストーリーの概要】

南部地域の山間部では茶の栽培が行われ、北西部地域の伊香立学区や仰木学区の山麓には大小さまざまな棚田が広がり、里山は生業の場となっている。また暮らしのなかでは、豊かな実りを祈る行事や山での安全を祈願した山の神行事も各地で盛んに行われてきた。比良山麓では、かつて木戸石や守山石と呼ばれる石材の切り出しが行われ、これらの石材を利用して、江戸時代には獣害対策のシシ垣が築かれた。里山の自然環境と生業、そして暮らしのなかで築かれてきた歴史文化がいまでも残されている。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔茶栽培と棚田〕

崇福寺跡すうふくじ（国）、日吉茶園、日吉茶園の碑さんのおうさい、山王祭（市）、仰木の集落、真野大野の御田植祭、関津の御田植祭、御田神社の綱引き、田上の衣生活資料（田上郷土史料館・登録）

〔山の神行事〕

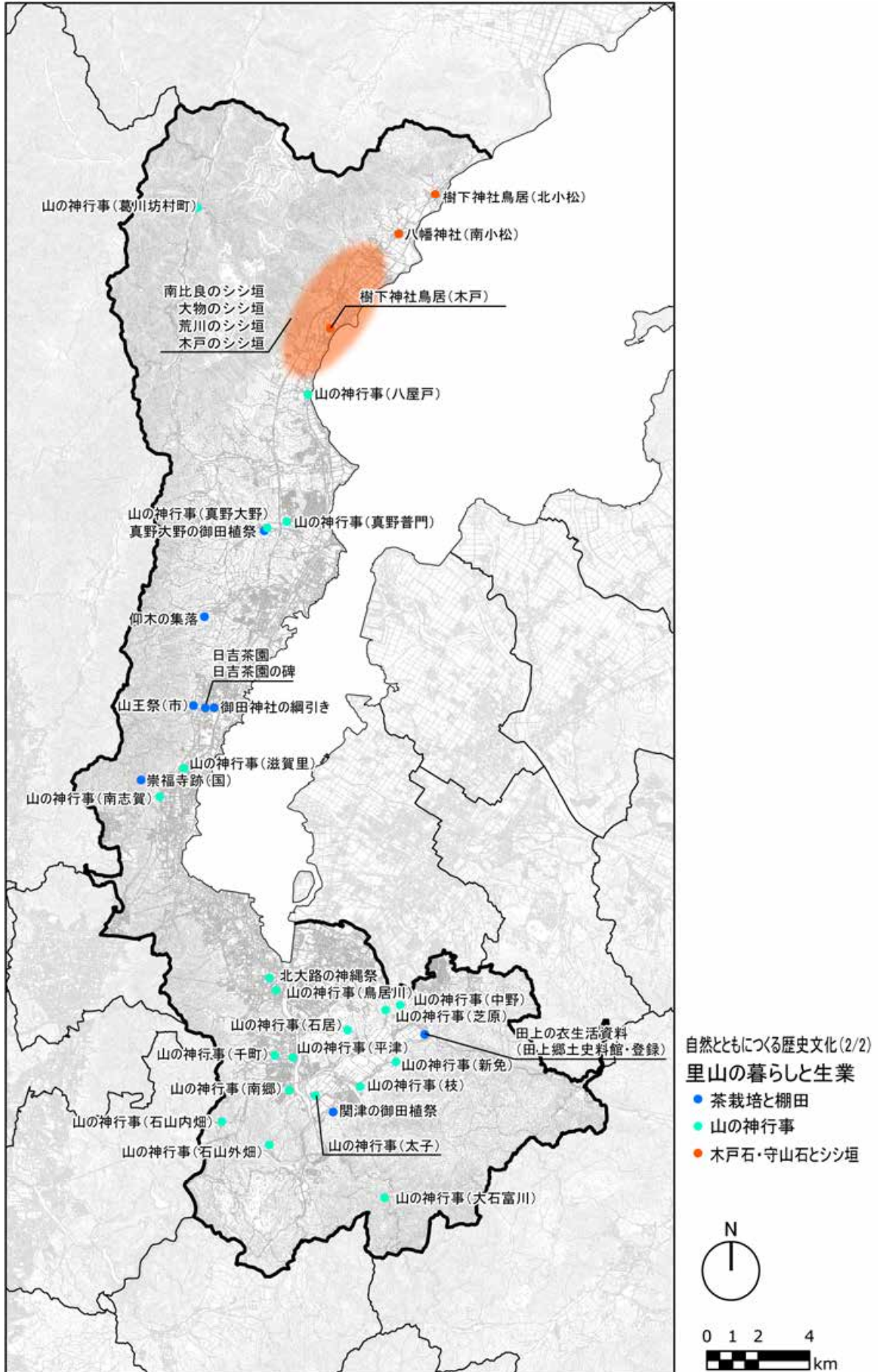
山の神行事（八屋戸、葛川坊村町、真野普門、真野大野、滋賀里、南志賀、鳥居川、平津、千町、南郷、石山内畑町、石山外畑町、大石富川、枝、石居、太子、中野、芝原、新免）、北大路の神繩祭かんじょうさい

〔木戸石・守山石とシシ垣〕

南比良のシシ垣、大物のシシ垣、荒川のシシ垣、木戸のシシ垣、樹下神社鳥居じゅげ（北小松）、樹下神社鳥居（木戸）

八幡神社（南小松）：正面に巨石が据えられ、狛犬や灯籠などの石造品が数多く見られる。

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

茶栽培と棚田

北部から中北部地域にかけて、比良山や比叡山の山々の東斜面には琵琶湖と里山の景観が広がり、比良川、和邇川など幾本もの豊かな水の流が琵琶湖へとそそいでいる。これらの地域では冬になれば比良・比叡山系の嶺に雪雲がぶつかり、多くの積雪をもたらす。一方で、東部・南部地域では、音羽山地が連なり、琵琶湖から唯一流出する瀬田川の左岸には、田上山地、瀬田丘陵が広がりを見せ、奥深く多彩な自然環境を形成している。大津市では琵琶湖と歩んできた暮らしがある一方で、里山における暮らしも営まれてきた。

南部地域の太石では山間部における茶の栽培が盛んであった。茶の文化は、奈良時代に中国から仏教との関わりのなかでもたらされたと考えられ、少なくとも平安時代初期に中国から戻った遣唐留学僧たちは茶を飲んでいたことがわかっている。遣唐留学僧であった永忠が、弘仁6年(815)、唐崎へ行幸に来た嵯峨天皇に崇福寺で茶を献上している。これが契機となって、嵯峨天皇は畿内や播磨、近江などの国々に茶樹を植えさせ、茶を貢進するよう命じた。坂本四丁目には、最澄が唐より持ち帰った茶種を植えた日本最古の茶園と伝わる日吉茶園の碑が大正10年(1921)に建立されており、現在もおおよそ20本の茶樹が植えられている。日吉茶園では、毎年立春から数えて八十八夜の日(8月13日)に日吉大社の神職と巫女によって茶摘みが行われ、6月4日に延暦寺浄土院にて行われる長講会と翌年4月13日の日吉山王祭献茶式で宵宮場に並ぶ4基の神輿へ、日吉茶園の茶で作られた新茶が献上される。



写 5-41 日吉茶園 (坂本三丁目)

伊香立や仰木の山麓には大小さまざまな棚田が広がり、棚田オーナー制度を取り入れるなど、地域住民とボランティアによって、棚田の保全活動が行われている。また、豊かな実りを祈願して真野大野や関津では御田植祭が举行され、坂本の御田神社(坂本六丁目)では、毎年1月15日に近い日曜日に大蛇に見立てた綱を東西に分かれて引き合い、当年の豊作を祈願する綱引きが行われている。



写 5-42 仰木の棚田

山の神行事

生業と結びつき、豊作を祈願する行事は里山の暮らしのなかで数多く行われてきた。そのひとつである山の神行事は、炭焼きや茶の栽培など山仕事の安全を願うとともに、山の神は春になると里へ下って田の神になり、秋には山へ行き山の神になるという伝承から豊作を祈る行事としても、大津市の全域で行われている。多くは1月初旬もしくは12月と1月の2回行われ、12月の行事から1月の行事までの期間は山に入ってはいけないとされていたところもある。山の神行事では米粉で作った団子や鰯、鯖といった魚などを供え、勧請縄と呼ばれる注連縄を張って山の神を祀ることが多い。田上の枝では、杉を神木とし、12月の終い寅、正月の初寅の2度、山の神行事が行われる。正月の場合、1mほどの二股の檜に男根を付けた人形を安置し、神木の横に勧



写 5-43 山の神行事 (大石淀)

請縄を掛ける。男性のみが参拝し、鏡餅、お神酒、塩鯖、ご飯を供えて、焚き火を囲んで直会^{なおり}をする。また、真野普門の神田神社では、山の神は醜い女性であると考えられており、オコンタという滑稽な顔をした小魚を供えることによって、山の神が喜ぶと言われている。真野普門だけでなく、全国的に山の神は女性とされており、そのため女性は山の神を祀った場所や行事に立ち入れないことが多い。

木戸石・守山石とシシ垣

小松・木戸の山間部には良質の花崗岩があり、江戸時代の早い段階から、木戸石や守山石として切り出しが行われていた。木戸石・守山石は割石や石灯籠、石塔に加工され、また庭石として大津市域をはじめ、京都、湖東へと運ばれていた。北部地域には木戸石で作られた石組みの水路や石灯籠などがいまでも残されている。また、京都・大津間の東海道に敷かれた^{くろまいし}車石にも木戸石が用いられていた。江戸時代以来、この地域では採石作業や加工作業を行う石工業を営む者が多かったが、昭和30年代初頭になると採石は行われなくなり、現在では他所から石を買い付け、加工する石材業者のみが残る。かつては、山から集落まで石を運ぶためにつけられた道を牛や人力で木製の二輪車（トンボ車）を引いて搬出していた。

江戸時代に比良山麓の集落ではイノシシやシカなど野生動物が田畑へ侵入し、農作物へ被害を与えないようこれらの石材を利用して石積みのシシ垣が築かれた。古文書からこの地域のシシ垣は江戸時代の初めにはすでに築かれていたことがわかっている。シシ垣は湖岸を口にして集落を囲うように「コ」の字形に築かれており、江戸時代や明治時代の絵図にも集落を囲うシシ垣が描かれている。北比良・南比良・大物の集落を囲っていたシシ垣は、現状で約1.1kmが残存し、荒川・木戸の集落を囲うシシ垣は約1kmが残存している。

なかでも荒川の集落に残るシシ垣は、獣害対策に加え、集落の北東を流れる大谷川の洪水・土石流対策を兼ねたシシ垣となっていた。このように獣害対策と水害対策を併用したシシ垣は全国的にも珍しい。荒川の集落を囲うシシ垣には木戸口と呼ばれる集落への出入り口が5ヵ所あり、夜間や水害の恐れがある際には、木戸口へ板をはめ込んで集落への侵入を食い止めていた。大谷川の堰堤工事がなされたことで、土石流災害の危険性は低くなり、また石積みのシシ垣の上に電気柵を設置したことによって獣害も少なくなった。荒川のシシ垣はその役割が低下したことによって崩壊したり、改変されたところが目立つものの、この地域の自然環境と生業、そして暮らしのなかで築かれてきた歴史文化遺産としていまでも残されている。



写 5-44 シシ垣（南比良）

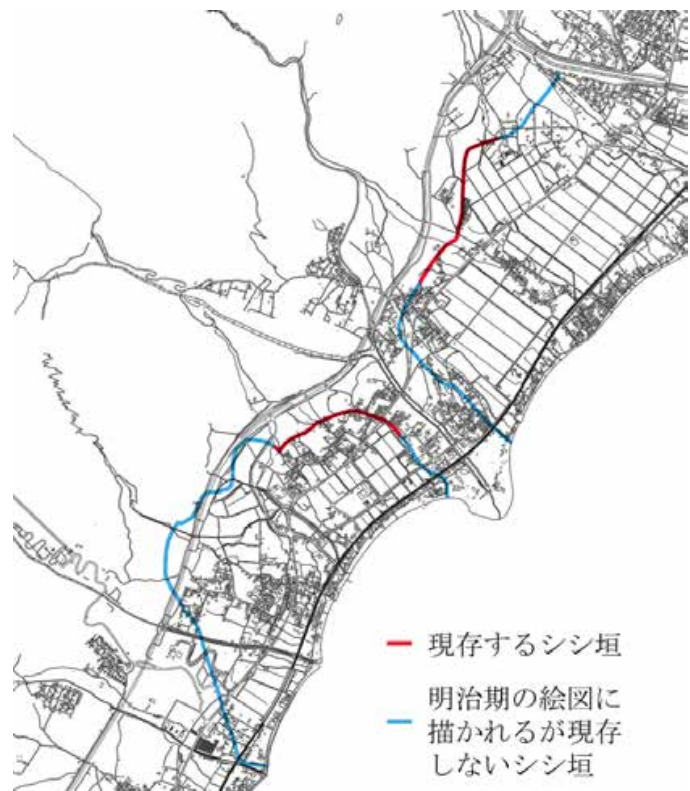


図 5-7 比良山麓のシシ垣

15 歌と物語

【歴史文化ストーリーの概要】

琵琶湖と周辺の自然豊かな景観は、古代から人々の心に響く風景として、歌や俳諧に詠まれ、また物語の舞台として、さまざまな書物のなかで描かれてきた。近江八景や歌枕の名所において俳聖・松尾芭蕉は門人とともにすぐれた俳諧を残している。大津を第2の故郷と称した芭蕉は、いまも義仲寺で静かに眠る。『源氏物語』着想の地である石山寺や『平家物語』に描かれた世に名高い粟津の合戦ゆかりの地と関連する能など、和歌・俳諧・物語という文学作品の舞台となるところが、大津市の歴史文化の奥深さを物語っている。

【構成する主な歴史文化遺産の一覧】

〔歌に詠まれた風景 ①近江八景と歌枕〕

唐崎(唐崎神社境内)(県、市)、近江八景「堅田落雁」(登録)「三井晩鐘」(登録)「比良暮雪」
「唐崎夜雨」「粟津晴嵐」「瀬田夕照」「石山秋月」

歌枕：比良の山、小松、真野入江、堅田、比叡の山、日吉の社、三津の浜、唐崎、楽浪、志賀、志賀の山越、志賀の山寺、志賀の花園、長等の山、相坂・逢坂、逢坂山・手向山・関山、関の清水、走井、音羽山、打出の浜、陪膳の浜、粟津野、石山、心見の瀬、八島、桜谷、田上山、田上川、瀬田の長橋

〔歌に詠まれた風景 ②歌人ゆかりの地〕

簗神社、小野神社境内社簗神社本殿(国)、道風神社、小野神社飛地境内社道風神社本殿(国)、小野妹子神社、小野神社、唐白山古墳、融神社、藤原定家歌碑(安楽律院)、黒主神社、福王子神社、紀貫之墓、近江神宮、近江神宮本殿ほか(登録)、平忠度歌碑(長等公園)、関蟬丸神社

〔松尾芭蕉の足跡〕

義仲寺境内(国)、竜ヶ丘俳人墓地(市)、本福寺(本堅田一丁目)、幻住庵跡
松尾芭蕉句碑(代表的なもの)

「鎖あけて月さし入よ浮御堂」(満月寺)

「大津絵の筆の始は何仏」(月心寺)

「先たのむ椎の樹もあり夏木立」(幻住庵跡)

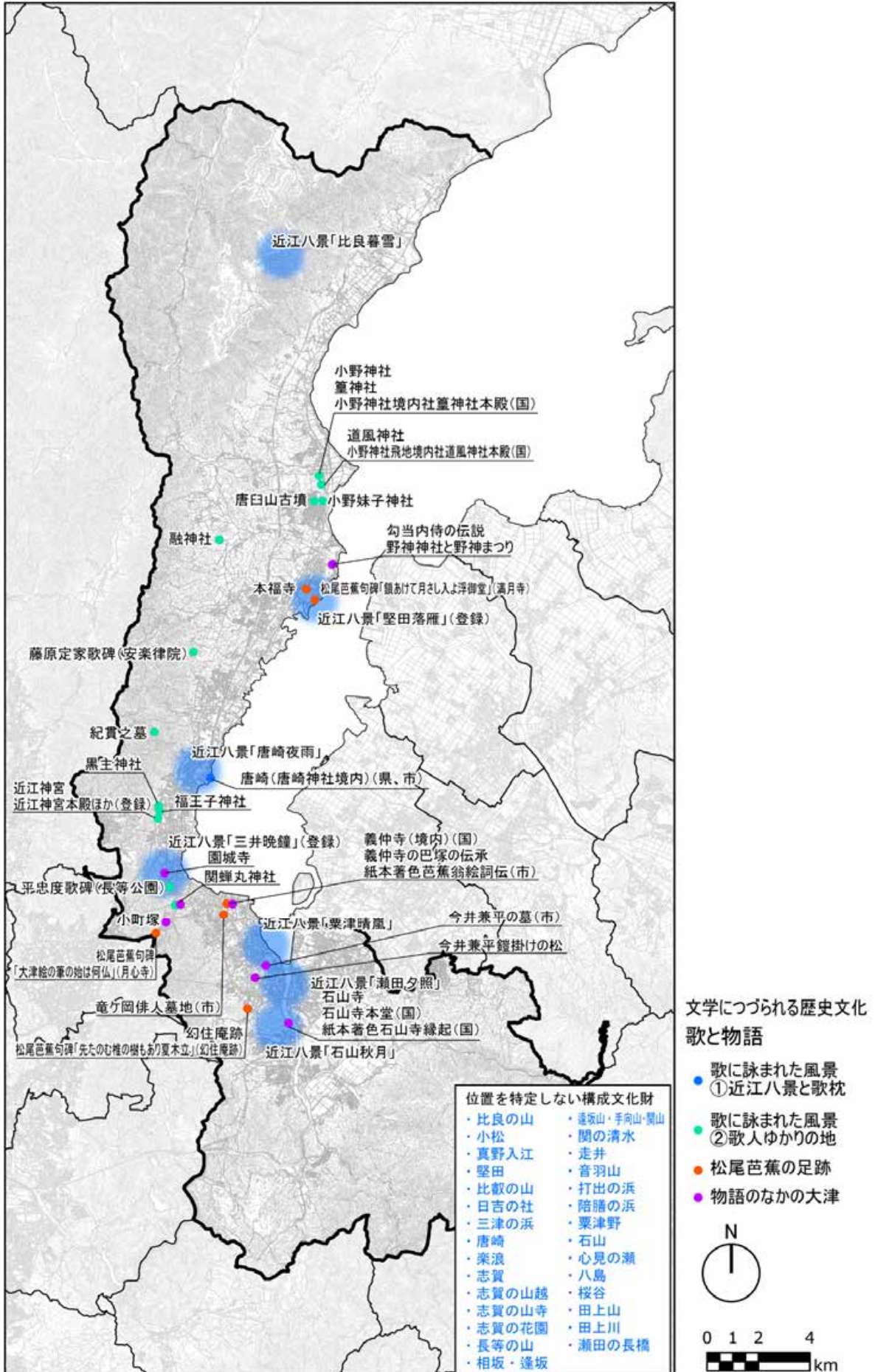
紙本著色芭蕉翁絵詞伝(市)：芭蕉没後、義仲寺の無名庵を再興した蝶夢が、芭蕉の生涯を三巻の絵巻にまとめたもの。寛政4年(1792)完成。

〔物語のなかの大津〕

石山寺、石山寺本堂(国)、今井兼平の墓(市)、今井兼平鎧掛けの松、義仲寺の巴塚の伝承、園城寺、関蟬丸神社、小町塚、勾当内侍の伝説、野神神社と野神まつり

紙本著色石山寺縁起(国)：石山寺の創建から、後醍醐天皇と後宇多天皇の院政までの時代を描く。紫式部が源氏物語の構想を練ったと伝える場面が、巻四に見える。

【構成する主な歴史文化遺産の分布】



【歴史文化ストーリー】

歌に詠まれた風景

琵琶湖と周辺の景観は、古代から人々の心に響く風景として、歌に詠まれてきた。『万葉集』には、滋賀県内各地と、琵琶湖周辺の地名（山・川など）が歌われており、これらはのちに近江の歌枕となる。歌枕は和歌に詠み込まれた名所のことをいい、大津市内の歌枕で代表的なものは、「比良の山」「小松」「真野入江」「堅田」「比叡の山」「志賀の山越」「唐崎」「逢坂」「打出の浜」「粟津野」「石山」「瀬田の長橋」などが挙げられる。『万葉集』に収められた柿本人麻呂が荒廃した大津宮を詠んだ「ささなみの志賀の大わだ淀むとも昔の人にまた逢はめやも」や、『後撰和歌集』に収録され小倉百人一首にも選ばれている蝉丸の和歌「これやこの行くも帰るも別れつつ知るも知らぬもあふさか（逢坂）の関」が有名である。歌枕は15世紀に成立したと考えられる近江八景にも取り入れられた。

大津市内には歌人にまつわる場所も多い。小野には、漢学者で歌人の小野篁を祀った篁神社や書家・小野道風を祀る道風神社、小野氏の氏神である小野神社、水明一丁目には小野妹子を祀る小野妹子神社や小野妹子の墓と伝わる唐臼山古墳など、小野氏ゆかりの歴史文化遺産が数多く残る。延暦寺においては、慈円のように歌人としても著名な僧侶を輩出した。このほかにも天智天皇を祀る近江神宮（神宮町）や蝉丸を祀る関蝉丸神社（逢坂一丁目）、源融を祀る融神社（伊香立南庄町）、六歌仙のひとり大伴黒主を祀る黒主神社（南志賀二丁目）、『古今和歌集』の撰者・紀貫之を祀る福王子神社（南志賀二丁目）など、歌人が祭神として祀られている神社が市内各所に鎮座する。また、ケーブルカーで比叡山上へ登る途中の裳立山には紀貫之の墓があり、「木工頭紀貫之朝臣之墳」と刻まれた明治元年（1868）建立の石碑が建てられている。



写 5-45 小野神社境内社 篁神社本殿

松尾芭蕉の足跡

古来、大津市には多くの歌人が来訪し、各地で歌が詠まれてきたが、江戸時代になると、俳聖と仰がれた松尾芭蕉を中心とする俳人たちが優れた作品を残す。芭蕉は貞享2年（1685）、『野ざらし紀行』の途中で大津に立ち寄る。このとき、のちに堅田本福寺の住職となる千那、大津の町医者尚白、大津の青鴎が入門し、湖南蕉門形成のきっかけとなった。これ以降、芭蕉は近江をたびたび訪れ、千那の養子であった角上、大津の智月・乙州、膳所藩士の菅沼曲翠・水田正秀、膳所の町医師浜田酒堂（珍碩）など堅田や大津、膳所の門人たちと交流を深めていく。

芭蕉が大津市に訪れた際の仮住まいは、源（木曾）義仲を葬った塚のある義仲寺（木曾塚）の草庵（馬場一丁目）であったが、元禄3年（1690）には前年までの『奥の細道』による旅の疲れを癒すため、国分の幻住庵（国分二丁目）に入る。この庵での3ヵ月半におよぶ体験をもとに『幻住庵記』が記された。幻住庵は平成3年（1991）に建物が復元されている。そして元禄4年には、門人の水田正秀のはからいで義仲寺に無名庵が建てられ、以降、芭蕉は大津市訪問時には無名庵へ滞在している。



写 5-46 義仲寺

芭蕉は堅田の浮御堂や唐崎など近江八景にも描かれる名所で句を詠み、「鎖明けて月さし入れよ浮御堂」の句とともに俳文「堅田十六夜の弁」などを残す。また、堅田で病に臥した芭蕉は、近江八景

のひとつ「^{かたのらくがん}堅田落雁」を意識した「^{やわかり}病雁の^{よさむ}夜寒に落て旅寝かな」という句も詠んでいる。

元禄7年5月から7月までを大津で過ごした芭蕉は、伊賀から大坂へ向かい、病に襲われる。そして10月、芭蕉は回復することなく、大坂の地でこの世を去る。縁深いところである義仲寺へ亡骸を送ってほしいという芭蕉の遺言に従い、同寺に葬られた。芭蕉は近江湖南の地を「^{ふるさと}旧里のごとく」と手紙に記しており、第2の故郷と考えていたのである。義仲寺には、無名庵や芭蕉の墓、芭蕉を祀る翁堂が今も残る。また、義仲寺の裏山には、^{しやうもんじゆつてつ}蕉門十哲のひとり内藤^{しやうぞう}丈草の名を刻んだ墓石を中心に、^{かがみしこう}水田正秀・^{ゆうしやう}各務支考・^{うんり}森田祐昌・^{ちやうむ}渡辺雲裡・^{はせい}蝶夢・^{ぶんそ}巴静・北川文素ら芭蕉門下17人の墓が建立され、^{たつがおか}竜ヶ丘俳人墓地（馬場二丁目）として、大津市の史跡に指定されている。

物語のなかの大津

大津市は物語の舞台として、さまざまな書物のなかで描かれてきた。平安時代、^{むらさききぶ}紫式部によって著された『源氏物語』は、紫式部が石山寺へ参詣した夜、十五夜の月が琵琶湖の水に映るのを見て着想を得、「須磨」「明石」の2巻を書きはじめたという伝説が残る。石山寺本堂の一角には、紫式部が執筆を行ったという源氏の間が現在も残っている。石山寺は、平安時代、貴族から庶民にいたるまで信仰を集めた寺院で、^{せいしやうなごん}清少納言も『枕草子』のなかで「寺は石山」と評している。とくに貴族女性が多く参詣・参籠したこともあり、『大和物語』など王朝文学にもたびたび登場する。

平安時代後期に、インド・中国・日本の説話を集めて編纂された『今昔物語集』にも、大津市にまつわる多くの物語が見られる。仏法関連では、延暦寺、園城寺、石山寺、崇福寺、梵釈寺、関寺などの寺院の創建や靈験、僧侶にまつわる話があり、藤尾寺の尼による放生会、逢坂山の蟬丸、瀬田橋と鬼、三津浜の狐、瀬田川での鯉と鰐の戦といった、世俗の興味深い話も伝えている。

軍記物語の代表作である源平争乱を描いた『平家物語』では、栗津における合戦と^{みなもとの}源（木曾）^{きそ}義仲・^{よしなか}今井兼平の最期が描かれる。源義経・^{かねひら}範頼軍に宇治川の合戦で敗れた源義仲が、再起をねらって逃げる途中、打出の浜において乳兄弟で腹心の武将でもあった今井兼平と再会する。しかし、直後に栗津の松原で義仲は討死にし、兼平も義仲のあとを追って自害した。栗津の松原に程近い義仲寺に義仲の墓所があり、その傍らには、挙兵以来、彼に伴った^{ともえ}巴御前の供養塔も残る。このほか、今井兼平の墓（晴嵐二丁目）や今井兼平が鎧を掛けたという鎧掛けの松（園山一丁目）がある。これら栗津の合戦や巴御前の物語は、能「兼平」や「巴」の題材となった。



写 5-47 今井兼平の墓（晴嵐二丁目）

このほかにも大津が舞台となっている能がある。能「三井寺」は、子どもを人買いにさらわれた母親が子どもを求めてさまよい、園城寺（三井寺）の鐘が縁でめでたく再会を果たすという物語である。また「関寺小町」「^{おうむ}鸚鵡小町」は、平安前期の六歌仙のひとりである小野小町が晩年、逢坂山の関寺あたりに隠れ住んだという伝説を題材にした能であり、関蟬丸神社下社（逢坂一丁目）の裏手には小町塚が残る。

『平家物語』と並ぶ軍記物語の代表作『太平記』は、堅田を舞台に南朝方の主将であった^{にったよしきだ}新田義貞の悲話を綴る。^{あしかがたかうじ}足利尊氏との戦いに敗れた義貞は、妻の^{こうとうのななし}勾当内侍を今堅田に残し、越前へと落ち延びる。やがて義貞戦死の報を知った内侍は出家し、京都嵯峨の往生院で菩提を弔ったと記されている。しかし、内侍は義貞のあとを追って琴ヶ浜（今堅田一丁目）で入水したと堅田では伝承される。今堅田二丁目の野神神社は内侍を祭神とし、毎年命日にはその霊を慰めるため、祭礼が行われている。

(2) 重点的な施策展開の方策

関連文化財群を構成する主な歴史文化遺産と周辺地域（関連文化財群を構成する主な区域）を重ね合わせると、歴史文化のテーマごとに、それぞれ図 5-8～図 5-13 のように整理できる。さらにこれらを重

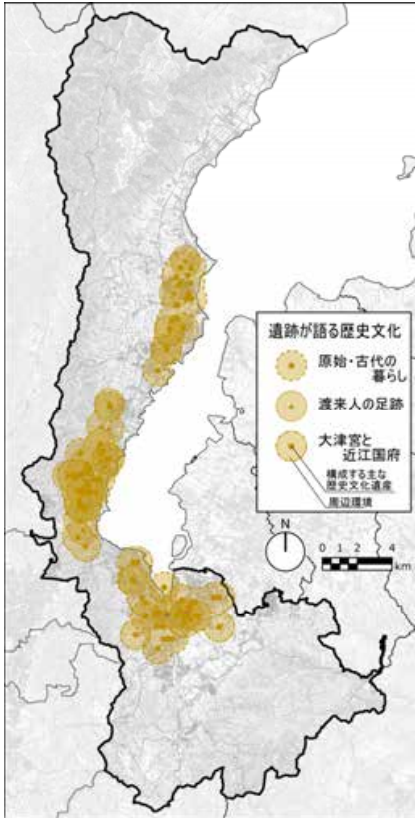


図 5-8 「I. 遺跡が語る歴史文化」の関連文化財群を構成する主な区域

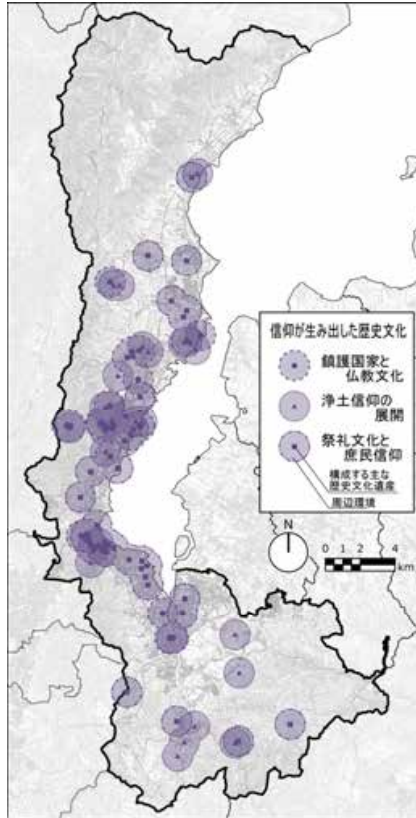


図 5-9 「II. 信仰が生み出した歴史文化」の関連文化財群を構成する主な区域

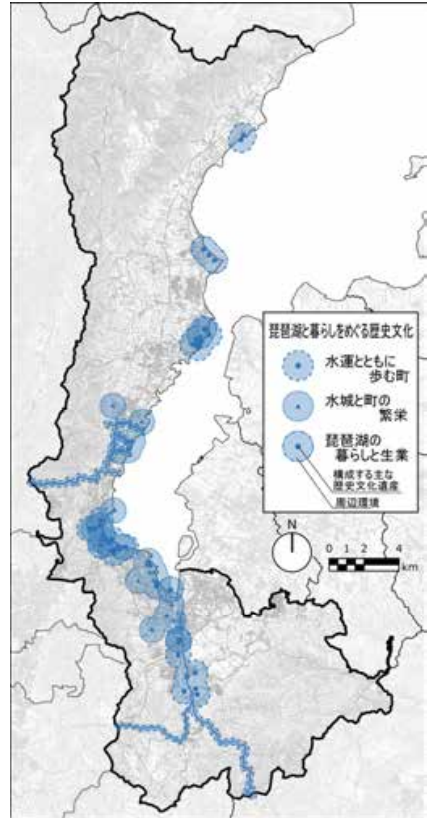


図 5-10 「III. 琵琶湖と暮らしをめぐる歴史文化」の関連文化財群を構成する主な区域

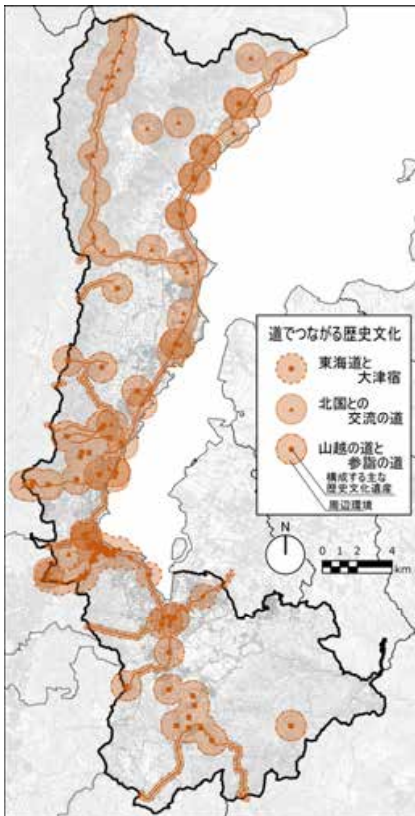


図 5-11 「IV. 道でつながる歴史文化」の関連文化財群を構成する主な区域

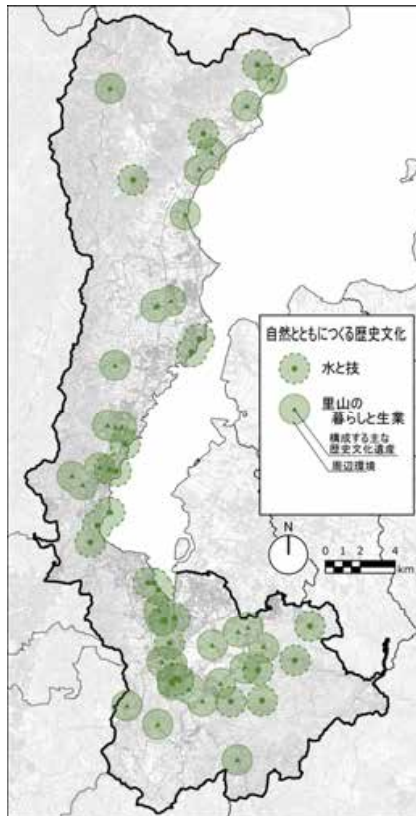


図 5-12 「V. 自然とともにつくる歴史文化」の関連文化財群を構成する主な区域

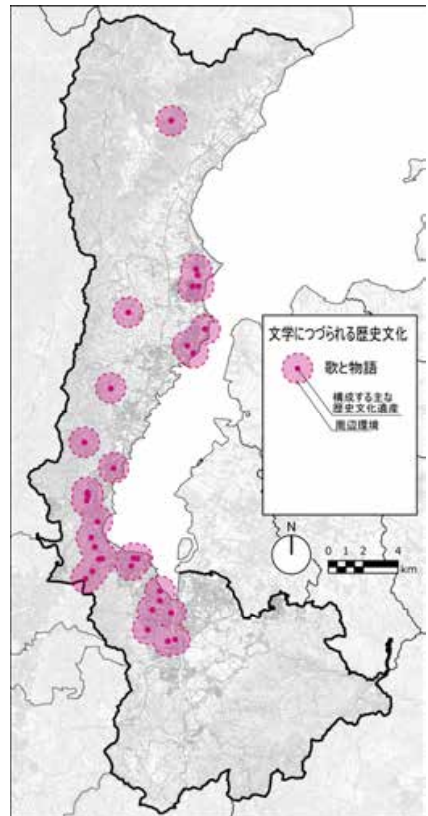


図 5-13 「VI. 文学につづられる歴史文化」の関連文化財群を構成する主な区域

ね合わせると、図 5-14 に示すとおりとなり、瀬田から和邇に至る琵琶湖岸一帯の低地から丘陵地に至る区域並びに比叡山付近の山地に重なりが多い。従って、この一帯の区域を重点的な施策展開を図る区域として設定する。

同区域については、今後、本構想をベースに策定する「文化財保存活用地域計画」において、区域界を検討し、具体的な取り組み方針・方策を示していく。併せて、「大津市歴史的風致維持向上計画」においても、これらの区域と関連づけながら、歴史的風致の一体性の視点等を踏まえて、重点区域の設定を行っていくことで、施策の効果を高めていくことが想定される。

なお、この重点的な施策展開を図る区域以外においても、本構想で設定した関連文化財群のまとまりや、都市計画マスタープランで掲げる「コンパクト+ネットワークのまちづくり」をもとに整備される公共交通等を中心としたネットワーク網を活用しながら連携を図り、市全域における歴史文化の保存・活用へと展開していくものとする。



図 5-14 重点的な施策展開を図る区域

(3) 市による具体的な施策（重点実施計画 2）

歴史文化の戦略的な保存・活用の推進のために、大津市が今後 10 年程度で優先的に実施する具体的な施策の内容は表 5-3 のとおりとする。

表 5-3 大津市による具体的な施策（重点実施計画 2）

対応する 方針番号※1	具体的な施策の内容	特に関係の深い関連文化財群※2														
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
1-①	・大津宮と近江国府の発掘調査や研究等の推進		●	●												
1-③	・史跡公有化の推進		●	●												
1-③	・「大津市坂本伝統的建造物群保存地区の保存に関する計画」に基づく町並みの保存の継続				●											
1-④	・文化的景観の選定に向けた検討							●	●	●	●	●	●	●	●	
1-④	・大津百町における文化財登録の推進							●	●		●					
2-②	・指定等文化財活用のための施設および各地域の歴史文化の拠点となる施設（遺跡公園や資料館など）の充実									●						
2-②	・最新の科学技術を活用したAR・VRコンテンツの開発や高精細レプリカの製作・展示									●						
2-④	・関連文化財群を活かした観光ルートづくり									●						
2-④	・各地域における関連文化財群を活かした着地型観光メニューの開発の支援									●						
2-④	・日本遺産の魅力向上・発信の取り組みの継続				●	●	●	●		●			●	●	●	●
3-④	・関連する歴史文化遺産を有する市町村や周辺地域の市町村等との広域連携体制の整備									●						
3-⑤	・「大津市歴史的風致維持向上計画」の策定									●						

※1 方針番号は「4-2 歴史文化の保存・活用の方針」に対応している。

※2 関連文化財群の番号は、それぞれ次のとおりである。

1：原始・古代のくらし 2：渡来人の足跡 3：大津宮と近江国府 4：鎮護国家と仏教文化 5：浄土信仰の展開
6：祭礼文化と庶民信仰 7：水運とともに歩む町 8：水城と町の繁栄 9：琵琶湖の暮らしと生業 10：東海道と大津宿
11：北国との交流の道 12：山越の道と参詣の道 13：水と技 14：里山の暮らしと生業 15：歌と物語